
マーレ島の伝説

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーレ島の伝説

【Nコード】

N9242U

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

ホウエンリーグを制覇した少年ラルドとオダマキ博士の娘のエメルが持っていた図鑑がパワーアップした。それに伴い、彼らはアルトマーレに近いマーレ島という島に向かうことになった。そこで、彼らは新しい仲間と出会うと共に、奇妙なポケモンを使う人間と出会い、それはマーレ島に暗躍する謎の組織だった。

ポケモンコロシウム・ポケモンXDのネタバレを含みますのでご注意ください。

ブローグ

「いっけラグ！とどめの、ハイドロポンプだ」

「サマヨールかわせ！」

102番道路で、バトルをしている少年がいた

「フルパワーだラグ！」

そのハイドロポンプはサマヨールを倒した

「サマヨール！？戻れ」

サマヨールのトレーナーがそういつてボールに戻した

サマヨールのトレーナーが言った

「君強いね」

「だてに修行をしていませんよ」

「「ありがとう」」

2人はそういつて102番道路を後にした

そして、101番道路

「いやーあの人なかなか、強かったなラグ」

「ラゲー」

この少年の、名前は、ラルド、そして相棒のラゲ（ラゲラージ）

ラルドは、サイユシティのポケモンリーグを制覇し、故郷のミシロタウンに帰っていく途中だった

そして、ミシロタウンに帰ってきた

「母さんただいま」

ラルドは元気に言った

「お帰りラルド、リーグ制覇おめでとう」

「ありがとう母さん」

照れながら言った

その夜ラルドは、夕食の時に旅の話をして、眠るのだった・・・

次の日、リビングに行くと、父さんがいた。父さんは、トウカジムリーダーのセンリ、センリは忙しくてあまり家には帰ってきていなかった

「父さん、お帰り」

「ただいま、ラルドちょっと来い」

ラルドは、キッチンで水を一杯飲んでからいった

「何、父さん？」

「まずは、リーグ制覇おめでとう」

「ありがとう、父さん」

「今日は、お前にプレゼントがあるんだ」

「プレゼント？」

ラルドは不思議そうに言った

「これだよ」

センリは、ボールをラルドに差し出した

「このボールは？」

「あけてみればわかるさ」

ラルドは、ボールをあけた、すると、ワニノコが出てきた

「ワニノコじゃないか、父さんどこで、捕まえてきたの」

ワニノコは、ハウエン地方では、珍しいポケモンだった

「こないだ、ジョウト地方に出張したんだ。そのとき、捕まえたんだ」

「父さんありがとう」

ラルドは喜んだ。ラルドは、水ポケモンが好きだったからである

そして、ラルドは、朝食を食べ終わった時だった

「そういえば、ラルド、オダマキ博士が呼んでいたわよ」

「オダマキ博士が？なんのようだろ？」

ラルドは疑問を持ちながらオダマキ研究所に行った

「おお、おはようラルド君」オダマキ博士が行った

そこには、娘のエメルもいた

「おはようございます、今日は何のようですか」

「まずは、そのイスに腰をかけたまえ」

ラルドは言葉どおりイスに座った

「ラルド君のポケモン図鑑は今何匹かな」

「今は、まだ１００匹ですけど・・・」

「１００匹か、それなら、図鑑を貸してくれないか」

ラルドは、博士に図鑑を渡し、博士が奥で何かしていたのが見えた

「なあ、エメルお前は今何匹だったんだ？」

「私は、あなたと違って150匹よ」

「150匹！？すごい」

そのときオダマキ博士はラルド達の所に戻ってきた

そして、図鑑をラルドとエメルに渡した

「その図鑑は、全国版に進化させておいた」

「全国版ですか！ありがとうございます」

ラルドは喜んだ、前の図鑑（ハウエン図鑑）だとワニノコのデータが無かったからだ

「実は、今日は2人に頼みがあるんだ」

「「頼み？」」

ラルドとエメルが声を合わせていった

「ああ、図鑑を完璧にするために、マーレ島に行ってほしいんだよ」

「マーレ島？」

ラルドが疑問系で言うとエメルが

「あなた、もしかして、マーレ島も知らないの」

「なんだよ、お前は知っているのか」

「とうぜんよ、マーレ島といえば、水の都アルトマーレの近くの島ですもの」

「アルトマーレって？」

またラルドが疑問系で言う

「あなた、アルトマーレも知らないの？しょうがないわ、アルトマーレは、世界で一番綺麗な島なの」

エメルがあきれたように行った

ラルドが理解したところで、

「ともかく、マーレ島にはホウエンにはいないポケモンが結構いるという話だから、そこで、図鑑の完成に近づけてほしいんだ」

「「わかりました」」

2人は声を合わせていった

「チケットはこれだよ」

オダマキ博士が2人にチケットを差し出した

「船は、明日の10時に、カイナシティを出るから乗り遅れないで

ね」

そう言われると、ラルドは家に帰って、お母さんに、その旅のことを話した

そして次の日、ラルドは8時におきて、9時に家を出た

「じゃあ母さん行ってくるよ」

「気をつけてね」

「いでよ、クイック」

ラルドはクイック（オオスバメ）をだしてカイナシティに向かった

着いたときは、まだ9時半だったが、船に乗った

部屋に案内されると、ラルドは荷物を置いた

そして汽笛が鳴り船は出港した

エピソード終了第1話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
バッジ：ホウエン8個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV55

クイック（オオスバメ）LV53

??? (ワニノコ) LV????

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

グリーン(ジュカイン) LV????

プロローグ（後書き）

あとがき

最新小説の始まりです、今度はトレーナーが主人公ですので、わかりやすいと思います。それでは、今後ご期待ください

第01話 「友達登場」(前書き)

ラルドは、オダマキ博士に、図鑑を全国版にバージョンアップをしてもらい、マーレ島で図鑑を完璧に近づけるようにするようになわれ、マーレ島に行くのだった。

第01話 「友達登場」

ラルドが船に乗ってから、1時間がたった。

「あーあ、船は長いなー」

とても暇そうに言った、そこで、

「船の中でも見学してみようかな」

ラルドは、部屋を出て、甲板に向かって歩いていった

甲板に着いたら、見覚えのある誰かがいた

「だれだろ？」

不思議に思いながら、その人のところに行った

そのとき、その人が、ラルドの方を向いた

「よおラルド、久しぶりだな」

「何でお前がいるんだよ、ゴールド」

その誰かは、ゴールドという少年だった（ゴールドのイメージは、金銀の主人公です）

「俺は、マーレ島まで行くんだ、お前はどこに行くんだ？」

「俺も、マーレ島だよ、偶然だな」

「そうか！お前も行くのか」

ゴールドは、喜んで言った

「でも、お前トレーナーズスクールはどうしたんだ？」

ゴールドは、ジョウト地方ワカタウンの出身で、留学で、カナズミのトレーナーズスクールに通っていた、ラルドとあったのも、そこである

「スクールは、俺に合わなかったからやめたんだよ、それで、マーレ島にも、ジムがあるって言うからそこで修行しようかと思ってな」

「マーレ島には、ジムがあるのか！」

ラルドは喜んだ、図鑑完成の目標だけだと、つまらないと思っていたからである

「なんだお前知らなかったのかよ。そういや、お前は何のためにマーレ島に行くんだ？」

ゴールドは、ラルドに聞いた

「ああ、図鑑を完成に近づけるために、マーレ島のポケモン達を捕まえに行くんだよ」

「へーお前も大変だな」

そのとき、誰かが、ラルド達に近づいてきた

「ラルドここにいたの、まったく探したわよ」

そこにいたのはエメルだった

「ラルド、この子はだれだ？」

ゴールドはエメルのことは、知らなかった

「え、えっと」

ラルドが言おうとした時に、エメルが

「初めまして、私はエメルといいます。」

「初めまして」

ゴールドは、そう言っただけで自分の紹介は、何もしなかった。
しかし、数秒たってから

「あ、俺はゴールドです」

「そっいや、エメル何のようだ？」

ラルドがエメルに聞いた

「あなた、まだマーレ島の地図持って無いでしょ、これが無いとわからなくなるわよ」

そう言うと、エメルは、ポーチから、マーレ島の地図をくれた

「サンキューエメル」

「そういえば、あなた、マーレ島にジムがあるの知ってる？」

エメルがラルドに聞いた、ラルドは

「それくらい知ってるよ」

そう言ったら横から

「こいつ本当は知らなかったんですよ、だから、俺が教えてやったんです」

ゴールドが、そう言った

「なんでそんなこと聞くんだよ」

ラルドが顔を赤らめながらエメルに聞くとエメルは

「ジムがあればジム戦をやると思ってる」

「そりゃやるけど、お前には関係ないだろ」

「まあね、でも、ジム戦をするといいいことがあるから、それをあなたにやってもらおうと思ってるね」

「いいことって何？」

「ジムバッジを8個集めて、リーグチャンピオンに勝つと、ポケモンがもらえるらしいのよ」

「だから何？」ラルドが聞くと

「だから、そのポケモンをあなたがつれてきて欲しいの」

「えーーーーーなんて俺が貰ってこなきゃいけないんだよ」

ラルドは驚いた、いくらジム戦をするからといって、リーグチャンピオンに挑戦する気はあまり無かったからである

「いいじゃない、どうせジム戦やるなら」

「だったらお前がやればいいだろ」

「私は、あまりジム戦が得意じゃないから」

「じゃあ、ハウエンのバッジは何なんだよ」

「あれは、ポケモン達を強くしたいと思ったから」

「じゃあ、また強くすればいいじゃないか」

「私はあなたと違って図鑑を早く完成さしたいの」

エメルも少しむきになってきた

「いいよじゃあ、俺が連れてくるよ、でも、そのポケモンは俺が育てるからな」

「そんなの当たり前じゃない」

こうしてラルドはジムバッジを8個集め、リーグチャンピオンに勝たねば行けなくなった

「そういえば、マーレ島のジムリーダーは強いらしいから、この船で練習していくといいわよ」

「この船にバトルする所があるのか？」

ラルドは、疑問に思った、船は特別大きいわけではなかったからだ

「それがあるのよ、行く？」

エメルが聞くと

「もちろん行くぜ！」

ラルドは、少し燃え始めた

「ゴールドお前も行くか？」

ラルドが聞くとゴールドは

「俺も行くぜ！」

「じゃあ私についてきて」

ラルドとゴールドはエメルについていった

少し歩くと騒がしくなってきた

「ここよ」

エメルが言っと、なかなか広い、バトル場があった

「よっしゴールド行こうぜ！」

「おう！」

「2人は、早速バトルを始めた」

2人がバトルを始めてから2時間たつと船は、マーレ島「ドロップシティ」についた

こうしてラルド達は、船を下りた

「よっし、まずは、ポケモンセンターでも行くか」

そうラルドが言っとエメルは

「私は行かないわ」

「なんで？」

ゴールドが聞くと

「私は、船でポケモン達を、回復させたからポケモンセンターに行く必要は無いの」

「そうか、じゃあまた今度」

ラルドが言うと

「ええ、あと、ラルドすっかりボール買ったときなさいよ」

そついうとエメルは行ってしまった

そこで、ラルドはボールの数を数えると10個しかなかった

「やべ、ボール買ったかないとな」

「早くポケモンセンターに行こうぜ」

ゴールドがそそのかす

「わかってるよ」

こうしてラルドとゴールドは、ポケモンセンターに行った

ポケモンを回復しているうちにラルドはボールを買い、ポケモンセンターに戻った

「はい、あなたのポケモンは、すっかり元気になりましたよ」

ジョーイさんが言った

「ありがとうございます」

ラルドがお礼をいい、ゴールドを呼んだ

「ゴールド早く行こうぜ」

「わかってる、ちょっと待って」

ゴールドは、何かをしていた。数分後ゴールドはラルドの元に来た

「よしじゃあ行こうぜ、ラルド」

「ああ、次は、ロイヤルシティだ」

こうして、ラルドとゴールドは、ロイヤルシティを目指してポケモンセンターを後にした

第1話終了第2話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
バッジ：8個 ホウエン

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV54

????（ワニノコ）LV????

ゴールドのトレーナーカード
バッジ：0個

第01話 「友達登場」(後書き)

あとがき

ゴールドが登場しましたね、ゴールドがどっいつ活躍するか、ご期待ください

第02話 「Rのマーク、Dのマーク」 （前書き）

マーレ島に行く船に、ラルドは友達のゴールド再開する。聞くとマーレ島のジムで腕試しをするという。それにラルドも加わることにした

船はドロップシティに到着し、ラルド達はロイヤルシティに向かうのだった

第02話 「Rのマーク、Dのマーク」

ドロップシティを出てから1日目、ラルド達はロイヤルシティの近くの森に来ていた

「行け！ゲイト、かみつく」

ワニノコのゲイトが、キャタピーにかみついた

「いまだ！モンスターボール！」

モンスターボールはキャタピーを捕らえ、捕まえた

「ふーキャタピーゲット」

ラルドが言つと

「キャタピーぐらいで喜ぶなよ」

ゴールドが言つた

「キャタピーはハウエンに生息しないポケモンだから、珍しく思えるんだよ」

こうして2人は、順調にロイヤルシティに向かっていた

そのころ、エメルは・・・

「モンスターボール！」

エメルは、ビードルを捕まえていた

「今日はこのぐらいにしようかな」

こうしてエメルもロイヤルシティに向かっている途中、エメルの前に誰かがいた

「誰かしら？」

そう思いながら見てみると、同じ服を来た人が何人もいた、胸の辺りに【R】というマークがついていた

そして【R】のマークがついている奴らはこういった

「いいか、ここに奴がいるはずだ、奴を見つけたら、確実に捕獲しろ」

「いったい何を捕獲するつもりなのかしら？」

そう思ったとき、【がさっ】と音を立ててしまった

「誰だ！」

エメルはその場から逃げ出した

「待て！」

団員らしき奴がおいかけてきた

「グリーンでできて」

エメルはジュカインのグリーンを出した

「グリーンここにひみつのちからよ」

グリーンは、秘密の力を使いあなを作った、そこにエメルは逃げ込んだ

団員は、そこを通りすぎていった

「ふうあぶなかった」

そういつてから、あなの周りを見渡し安全を確認してから、あなから出た

「あの人達はもしかて・・・」

エメルには心当たりがあった

それを考えながら、エメルは、ロイヤルシティについた

そのころラルド達は、まだ森の中にいて、夜になってしまった

「なあラルド、この森いつになったらぬけられるんだ？」

ゴールドがラルドに聞いた

「さあ？でももう少しじゃないか、あっちから光が少し見えるから」

「適当だな〜」

ゴールドはそう思いながらも、ラルドの言つとおり光に見えるほうに歩いていった

「なあ、あそこに誰かいなか？」

ラルドがゴールドに聞いた

「いるな、ちょっと様子を見てみるか」

2人は人の近くに近づいていった

そいつらは胸の辺りに【D】のマークがついていた

「いったい誰だろう？」

そう思ったとき、ゴールドの腹がなった

「誰だ！」

【D】のマークを付けていた奴らの1人が言った

「まずい！ゴールドのあほ！」

「ごめん、それより逃げるぞ」

2人はその場から、すごい勢いで逃げていったに

「おいラルド、あそこに光が見えるぞ」

「またあいつらか」

そう思いながら光の場所に言ったら、ロイヤルシティが見えた

「ここがロイヤルシティみたいだな」

ゴールドが言った

「街に逃げればバレねえだろ、急ごうぜ」

こうして2人は、街の中に入っていった

そのころ、Rのマークの奴らは、団員が幹部に報告していた

「報告します、草むらの影にいた物は、ロイヤルシティに逃げ込んだ模様です」

「バカもの!!」

「もうしわけございません、逃げたものは女の方です」

そんな会話をしていた

逆にDのマークの奴らは

「すみません、逃げられました、しかし逃げたものは、2人の男の模様です」

そのころラルド達は、ロイヤルシティのポケモンセンターにいた

「ジョーイさん、こいつらをお願いします」

ラルドがジョーイさんに行った

わたし終えた後ゴールドのところに戻った

「いったい、誰だったんだろうな」

ラルドが言った

「さあ？その話は明日にして、今日は寝ようぜ」

「そうだな」

2人は、部屋に戻り布団の中に入った

しかし、ゴールドはすぐ寝てしまったが、ラルドは、寝られなかった

「いったい、誰だったんだ？」

そう思いながら、ラルドもようやく寝ることが出来た

第2話終了第3話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
バッジ：8個 ホウエン

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV54

???（ワニノコ）LV10

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個 ホウエン

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV????

ゴルドのトレーナーカード

バッジ：0個

第02話 「Rのマーク、Dのマーク」 (後書き)

あとがき

今回少なかったですね。Rのマークの奴らは、皆さんわかるかもしれませんが、Dのマークの奴らは誰でしょうか？期待してくださいね♪

第03話 「ロイヤルジムへの挑戦」(前書き)

ロイヤルシティの近くの森でラルド達は「D」のマークを付けた奴らとであつた、

一方エメルは「R」のマークを付けた奴らに合つた、ラルドとエメルは疑問を浮かべながら1夜をすごしたのだった

第03話 「ロイヤルジムへの挑戦」

次の日、ラルドは、6時に起きた、しかし、ゴールドはまだ寝ていた
ラルドは着替えて、朝食を取った、朝食を食べ終えたのは8時ごろ
だった

そのあと、ジョーイさんから預けていたポケモン達を引き取った
受け取った後に、部屋に戻り、地図を広げた

「この街に、ジムがあるな、調整しておかないと・・・」

そう思っで、ラルドは外にでで、練習を始めた、

そのころ、ゴールドは起きた

「はーよくねた」

ゴールドは起きてから、思った

「あれ、ラルドがもういないな、朝飯でも食べてるのかな」

そう思いながら着替えていた時、何気なく外を見たら、ラルドがい
るのを見つけた

「あいつももう練習してるのかよ」

そう思いながらも、食堂で、朝食を食べた

「いけゲイト！みずでっばうだ」

ラルドはゲイト（ワニノコ）の練習をしていた

そして9時半ごろ、ラルドが部屋に戻ると、ゴールドが練習の準備をしていた

「ゴールド起きたのか」

ラルドが聞いた

「もうお前は起きて練習したみたいだな」

「お前いまから練習するのか？」

「悪いな、1時からジムに挑戦しような」

「ああ」

そう言うとゴールドは、部屋を出て行った

「俺も練習するか」

ラルドは、また部屋を出て行った

そのころエメルはなぜかジムの前に来ていた

「私も1回ぐらいは挑戦しておかないと」

エメルは扉を開けて、ジムの中に入っていた

こうして12時になり、ラルド達は、昼食を食べた

昼食を取った後、ラルド達は、ジムに向かった

ジムの近くまで来たとき、エメルがいた

「よおエメル」

ラルドが先に話かけた

「あらラルド、今からジム挑戦？」

「そうだけどなんでお前ここにいるの？」

「ちょっと用があつてね、ジム戦がんばってね」

そう言うとエメルはどこかに行ってしまった

「なんだったんあいつ？」

ラルドはおかしいなと思いながらもジムの前まで来た

ゴールドがジムの扉を開け中に入った

「挑戦者ですか？」

ジムの奥から女性の声が聞こえた

「そうです」

ゴールドが答えた

するとジム内照明がついた

「ようこそロイヤルジムへ、私がジムリーダーの、アズリノです」

「俺はラルドです」

ラルドが自己紹介をした

「いいでしょう、それでは、配置についてください」

「ちょっと待った」

ゴールドが言った

「何ですか？」

アズリノが言った

「俺も挑戦したいのですが」

「わかりました、ではどちらからやりますか」

「ラルド、お前からやっていいぞ」

ゴールドが言った

「わかった」

ラルドは、そういつて、配置についた

「ルールは、3対3のシングルバトル。入れ替えは両者自由です。先に2体倒したほうが勝ちです」

審判が言った

それではバトル開始！

「行け！ゲイト」

「いきなさい、アゲハント」

ラルドはゲイト、アズリノはアゲハントをだした

「ゲイト！みずでっぼうだ」

みずでっぼうがアゲハントに当たった

「アゲハント！ぎんいろのかぜです」

アゲハントも負けじと、ぎんいろのかぜをうちだした

「ゲイト！かわすんだ」

ゲイトはぎんいろのかぜをかわすことが出来た

「にがしません、アゲハント！メガドレイン」

メガドレインがゲイトに当たってしまった

「ゲイト！大丈夫か」

ゲイトは、ダウンをしていた

「ワニノコ戦闘不能、アゲハントの勝ち」

「ゲイト、お疲れ様」

そういうとラルドは、ゲイトをボールに戻した

「ラルド！しっかりしろ」

ゴールドからの声が聞こえた

「わかってるよ！」

「さあ、次は、どのポケモンを出すのですか？」

アズリノが言った

「相手はアゲハントだからラグだと、またやられる可能性がある、
そうすると・・・」

「決まりましたか？」

アズリノが聞いた

「ああ、行け！ロック」

ラルドはロック（コドラ）を出した

「バトル開始」

審判が言つと

「ロック！ずつきだ」

ロックはアゲハントをめがけてはしっていく

「アゲハント！上昇するのです」

アゲハントは上昇し、ずつきが届かない高さまで、上昇した

「逃がすか！ロック！すなあらしだ」

いくらダメージをうけないにしても、アゲハントは飛んでいるのがきつい状況になった

「アゲハント、1回降りてくるのです」

アゲハントは、下に下りてきた

「もらった！ロック！がんせきふうじ」

がんせきふうじは、アゲハントにクリーンヒットした

「アゲハント戦闘不能、コドラの勝ち」

「アゲハントご苦労様です」

そう言いながら、ボールに戻した

「いくのです、バタフリー」

アズリノはバタフリーを出してきた

「バトル開始」

まだすなあらしの効果が残っており、ロックが有利だった

「ロック！がんせきふうじだ」

がんせきふうじが、バタフリーに当たった

「バタフリー、ねむりごなです」

ロックは眠ってしまった

「ロック！」

「いまでもバタフリー！ギガドレイン！」

ギガドレインは、ロックに当たった

「ロック！起きろ！」

ラルドは必死に、ロックを起こそうとしているが、なかなか起きない

「バタフリー！にほんばれです」

バタフリーはにほんばれをした

「とどめをさすのですバタフリー！ソーラービーム！」

ソーラービームはすぐ発射され、ロックにヒットした

「ロック！」

「コドラ戦闘不能！バタフリーの勝ち」

「ロック、ご苦勞様。行くんだ！ラグ」

ラルドはラグラージを出した

「バトル開始！」

「バタフリー！ねむりごなです」

ねむりごなが、ラグに飛んで来る

「ラグ、まもる」

ラグは、ねむりごなから身をまもった

「ラグ！れいとうビーム！」

するどくなっているれいとうビームがバタフリーに当たった

「バタフリー!?!」

バタフリーは、地面におちた

「バタフリー 戦闘不能! ラグラーズの勝ち」

「バタフリー、ご苦労様です」

そう言いながらバタフリーをボールに戻した

「行くのです、レディアン」

アズリノはレディアンを出した

「バトル開始!」

「ラグ! れいとうビームだ」

れいとうビームは、レディアンに当たった

「レディアン! 耐えて、高速移動です」

レディアンは動きが早くなった

「レディアン! ソーラービームです」

まだ、日照り状態が続いていたのでソーラービームはすぐに発射された

「ラグ！まもるだ」

ラグはソーラービームから身をまもった

「ラグ！れいとうビーム」

れいとうビームはレディアンにヒットした

「甘いですね」

アズリノが言った

「何！」

「レディアン！ギガドレインです」

レディアンは、上空にいた、そしてギガドレインがラグに当たった

「ラグ！」

ラグは辛そうだったが、まだ戦えるという気合を見せていた

「くそ！さっきのかけぶんしんのぶんしんだったのか」

「そうです、ではとどめといきます。レディアン！ソーラービームです」

ソーラービームが放たれた時、ラグは構えていた

「ラグ！ぶぶきだ！」

ラグは吹雪を吐き出し、ソーラービームとぶつかり合った

「ラグがんばれ」

ラルドはそういった

すると、ふぶきがソーラービームを押していた

「何ですって!?!」

こうして、ふぶきはレディアンに当たり、レディアンは戦闘不能になった

「レディアン戦闘不能!ラグラージの勝ち、よって勝者ラルド!」

「やったぜ!ラグ」

ラルドは、ラグと一緒に喜んだ

「おめでとう、ラルドさん」

アズリナが、ラルドに声をかけてきた

「これがこのロイヤルジムを勝ち抜いた証の、ロイヤルバッジです」

アズリノは、バッジをラルドに差し出した

「ありがとうございます」

そういつてからゴールドのそこに行った

「やったなラルド」

ゴールドが声をかけてきた

「ああ、お前もがんばれよ」

「おう」

「次はあなたの番ですが、私のポケモンは今、全員戦闘不能状態なので少し待ってください」

「えっ！だってまだ残り3匹いるんじゃないですか？」

「それは・・・」

アズリノの声が小さくなった

「？」

2人ともわけがわからなかった

第3話終了第4話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個 ホウエンバッジ：8個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV54

ゲイト（ワニノコ）LV20

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV???

ゴールドのトレーナーカード

バッジ：0個

第03話 「ロイヤルジムへの挑戦」(後書き)

あとがき

小説ではこれくらいが普通なのでしょうが初めてこれだけの文を打ちました。次回も期待してください

第04話 「ゴルドの実力」(前書き)

ラルドがロイヤルジムリーダーアズリノに勝利し、ゴルドの番になったのだが・・・

第04話 「ゴルドの実力」

「どうしたんですかアズリノさん？」

ラルドがアズリノに聞いた

「それが、あなた方が来る前に、『エメル』というトレーナーが来て私に勝利して言ったんです」

「何だって！エメルが、ジムに挑戦してたんですか！？」

ラルドは驚いた。エメルはジム戦が嫌でラルドにジム戦を挑戦さしたのだから、エメルはジム戦をやらないと思っていたのだから

「彼女を知っているんですか」

「ええ、俺の友達ですから」

「そう言うわけですので、もう少しお時間をください」

「なあ、ラルド、じゃあ、ポケモンセンターで待っていようぜ」

「そうだな、じゃあ、アズリノさんポケモンセンターで待っていますから」

「わかりました、準備が出たらよびにいきます」

こうして、ラルド達はアズリノのポケモンが回復するのをまつために、ポケモンセンターに戻るのだった

ポケモンセンターにつくとラルドはポケモンをジョーイさんに預けた
預けてからラルドはゴールドのところに行った

「なあゴールドお前のポケモンは、他に何がいるんだ?」

「そいつは見てのおたのしみさ」

「ふーん」

こうして、1時間がたったころ、ポケモンセンター内に放送が流れた

「ピンポンパンポーン、ゴールド様ゴールド、様至急カウンターまでお越しください」

「おっやつとかな」

ゴールドは座っていたため、腰を上げカウンターのジョーイさんのところに行った

「ゴールドさんですか?」

ジョーイさんが聞いた

「そうです、ジムからですか?」

「そうです、準備が整ったようです、がんばってくださいね」

「ありがとうございます」

ゴールドがカウンターから離れようとした時、ジョーイさんが、話しかけてきた

「ゴールドさん待ってください」

「なんですか？」

「ラルドさんから伝言を預かっています」

「伝言？」

ゴールドは不思議そうに聞いた

「はい、ラルドさんは調べたいことがあるといつことで、応援には行けないということです」

「わかりました・・・」

ゴールドはそう残念そうに言ってカウンターから離れた
そうして、ゴールドはロイヤルジムに向かうのだった

ジムについて、扉を開けた

「きましたか」

アズリノが言った

「やっとうですか、ジムに挑戦することが出来るのは」

ゴールドがうれしそうに言った

「それでは始めましょう、ルールは先ほどの試合と同じです」

「わかりました」

「それではこれより、ゴールド対アズリノによるジム戦を始めます」

「いくぜ！」

ゴールドが言った

「バトル開始！！！」

「いっけーヨルノズク！」

ゴールドはヨルノズクを出した

「いくのです、アメモース」

最初は、ヨルノズク対アメモースだった

「ヨルノズク！かぜおこしだ」

ヨルノズクのかぜおこしは、アメモースに当たった

「アメモース反撃です、れいとうビーム！」

アメモースはれいとうビームを放った

「ヨルノズク！かわすんだ」

しかし、ヨルノズクは動くのが遅すぎて、れいとうビームを受けて、地面に落ちてしまった

「ヨルノズク大丈夫か」

ゴールドがヨルノズクに問いかけたが、ヨルノズクは倒れてしまった

「ヨルノズク戦闘不能！アメモースの勝ち」

「ヨルノズク、ありがとう」

そういつてからゴールドはボールにヨルノズクを戻した

「行け！モココ」

ゴールドはモココを出した

「バトル開始！！」

「モココ！10万ボルト！」

ゴールドは速攻を狙ったのか、合図があっからすぐに、わざの指令を出した

「アメモース！こうそくいどうでかわすのです」

アメモースは高速移動を繰り返して、10万ボルトをかわした

「にがすなモココ！かみなりだ」

モココはかみなりを放った

「アメモース！かわしてください！」

しかし、その声はとどいたもののかわすことは出来なかった、そしてアメモースは地面にたたきつけられた

「アメモース戦闘不能！モココの勝ち」

「やったぜ！モココ」

「アメモースよくやりました戻ってください」

アズリノはアメモースをボールに戻した

「いきなさい！ストライク」

アズリノはストライクを出してきた

「バトル開始！！」

「モココ！10万ボルト」

「もうその手にはのりません、ストライクかげぶんしんです」

ストライクはかげぶんしんをして、10万ボルトをかわした

「くそ！モココ！10万ボルトを放ち続けるんだ」

モココは10万ボルトを放ち続けた

「そんなんで、かげぶんしんに当たるとでも思っているんですか」

「なに」

「ストライク！つるぎのまい」

ストライクはかげぶんしんをしながらつるぎのまいをはじめた

「そこからこうすごいんです」

ストライクは、ものすごい動きになった

「くそ！モココ、攻撃を止めるんだ」

ゴールドはモココに攻撃を止めるようにしじした

「こうげきをとめていいんですか、ストライク！れんぞくぎりです」

ストライクは、れんぞくぎりでモココを襲った

「モココ！かわせ」

しかし、こうすごいどうをしてかげぶんしんをしていたためかわすことは出来なかった

「ストライクそのままれんぞくぎり」

ストライクのれんぞくぎりは、つるぎのまいのおかげで、攻撃力が数倍になっていた

「モココ！でんじはでくりぬけるんだ」

「モココは弱い電気を放ちストライクをまひさせた」

「そのまま、かみなりだ！」

「あぶない！ストライクかわしてください！」

しかし、ストライクはまひして動けなかったため、かみなりをかわすことが出来なかった

「ストライク戦闘不能！モココの勝ち」

「やったぜ！」

ゴールドは喜んだ

「ストライクご苦労様です、ゆっくり休んでください」

ストライクはボールに戻された

「いよいよ最後か・・・」

ゴールドはそう思った

「行きなさい！ドクケイル」

「バトル開始!!」

「モココ!かみなり」

ゴールドは一気にたおしにいった

「あまいですね、ドクケイルひかりのかべ」

ドクケイルは、ひかりのかべで、威力を減少させた

「ドクケイル!サイコネシスです」

「しまったモココかわすんだ」

しかし、サイコネシスは当たってしまった

「モココ戦闘不能!!ドクケイルの勝ち」

「モココ、ありがとう」

そういつてからモココをボールに戻した

(ついに最後か、あとはこいつしかいないな・・・)

ゴールドはそう思った

「いつけ!マグマラシ!」

ゴールドはマグマラシを出した

「バトル開始!!」

「マグマラシ!かえんぐるまだ」

マグマラシはドクケイルに向かってかえんぐるまをした

「ドクケイル!ふきとばしでかえんぐるまを吹き飛ばして下さい」

かえんぐるまは、ふきとばされた

「マグマラシ!スピードスター」

スピードスターは、ドクケイルに当たった

「ドクケイル!サイコネシスで、反撃です」

「マグマラシかわすんだ」

マグマラシは、サイコネシスをかわすことが出来た

「マグマラシ、一気にかえんほうしゃを放つんだ!」

マグマラシのかえんほうしゃは、素早かった

「ドクケイルかわしてください」

しかし、かえんほうしゃは、すばやすぎてかわすことが出来なかった

「ドクケイル!」

ドクケイルは地面に落ちていた

「ドクケイル戦闘不能！マグマラシの勝ち、よって勝者ゴールド」

「やったぜ、マグマラシ！」

ゴールドはよろこんだ

そのときに、アズリノはゴールドに近づいて話しかけてきた

「おめでとうゴールドさん」

アズリノがゴールドにいった

「これが、ロイヤルバッチです」

アズリノが、ゴールドにロイヤルバッチをさしだした

「ありがとうございます」

「ええ、次のジム戦もがんばってくださいね」

「はい」

そついつて、ゴールドはジムを後にし、ポケモンセンターに戻った

「ラルド戻っているかな」

ゴールドはそう思いながら、ポケモンセンターに入った

「ゴールドどうだった」

ラルドはポケモンセンターに戻っていた

「もちろんかちぬいたぜ」

「そうか、じゃあ次の町に行く準備をしようか」

「それよりお前何を調べていたんだ？」

ゴールドはそれがずっと気になっていた

「それは、次の町に行く途中で話すよここで話すと、ちょっと長くなるからな」

「わかった」

こうしてゴールドは、ポケモンたちをジョーイさんに渡して回復させているうちに、次の町に行く準備をした

「ゴールドさん、おあずかりしたポケモンたちは全員回復しましたよ」

ジョーイさんがゴールドにいった

「ありがとうございます」

「じゃあ、ゴールドいこうか」

「ああ」

こうしてラルド達は、ロイヤルシティを後にし次の町に行くのだった

第4話終了第5話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV20

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個 バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV???

ゴールドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV35

ヨルノズク（ヨルノズク）LV30

モココ（モココ）LV29

第04話 「ゴールドの実力」(後書き)

あとがき

なんか、最後のほうが早足になってしまいました、ごめんなさい。
それと、たぶんゴールドのマグマラシはずっと進化しないかも(え
ちなみにいまさらですけど、アズリノのポケモンってほとんどが、
飛んでいる虫ポケモン何ですよ。アゲハントとかドクケイルとか

第05話 「奇妙なポケモン」 (前書き)

ゴールドがロイヤルジムに挑戦し、主力のマグマラシに続いてモココ、ヨルノズクのおかげで勝利することができ、

ラルドと合流し次の町を目指すのだった

第05話 「奇妙なポケモン」

ラルド達は、次の町ユーラスタウンを目指すのだった

ユーラスタウンに行くためには、森を通る必要があるので、ラルド達はその森の中を歩いていた・・・

「なあ、ラルドお前が調べていたのは何なんだ？」

ゴールドがラルドにたずねた

「ああ、そろそろいいかな」

ラルドはためらうように言った

「ロイヤルシティに行く前のもりであった奴らがいただろ」

「ああ」

「あいつらが何をやっていたか気になったんだ」

「それで？」

「で、その場所に行ったらこれを見つけたんだ」

ラルドはバッグから紙切れを一枚取り出しゴールドに見せた

「これをよんでみな」

その紙切れにはこうかかれていた

「この森に伝説のポケモン【ラティアス】と【ラティオス】がいる。この二匹を捕獲し【ロケット団】に対抗するんだ」

そのあとにも、文字が書かれていたが汚れてしまつて読めなかった

「ロケット団つてもしかして・・・」

ゴールドはそう思った、以前ジョウト地方でラジオ塔が占拠され、占拠していたのが【ロケット団】という奴らが占拠したということを知っていたからだ

「しっているだろう？お前も、俺はよく知らないけどジョウトに住んでいたお前なら」

「ああ、あいつらがこの島に」

ゴールドは思いつめたような顔を始めた

「それで、俺は町で、ロケット団について調べただけど、確信のある情報は無かつたんだ」

「そうか、しかしどうするもしロケット団がこのマーレ島で、何かを起こすしたら警察に知らせたほうがいいんじゃないか？」

ゴールドがラルドに言ったが、ラルドは首を横に振って

「警察はだめだ、こんな確信の無い情報では、動いてくれないよ」

「そうしたらどうする、この情報を知っている人は俺達しかいないんだぜ」

「いや、まだ知っている人がいるよ、この紙切れに文字を書いた人たちさ」

「そうか、じゃあその人たちを探せば何とかしてくれるかもしれないな」

「ああ、でも探すのはきわめて困難なはずだから旅をしながら探すのはどうだ」

ラルドはそう提案したが、ゴールドは

「そんなのんきにいつていいのか？相手はいつなにをするかわからないんだぞ」

「でも、こんな広い島をどうやって探すんだ？」

「そうか・・・うーん、じゃあ旅をしながら探すしかないな」

「それしかないだろ、じゃあ決まったところで次の町に早く行くとするか」

「ああ」

こうしてラルド達は次の町ユーラスタウンを目指すのだった

そしてそのころエメルは、【R】のマークのついた奴らがいた森にいた・・・

「慎重に行かないと、もし私の記憶が正しければあの【R】のマークは・・・」

エメルは思いつめたような顔だった

そしてエメルは、一本の木を見つけた

「この木は!？」

エメルは驚いた、ある一本の木だけものすごいあとがついているのだった

「この木、普通のポケモンのわざで傷が出来たんじゃない」

エメルはそう思った。普通の人ではそんなことが分らない様なことだが、エメルはオダマキ博士の娘なので普通の人がわからないようなこともわかった

その木は、全てのタイプのわざで受けてはいなかった。まるで、悪意がこもったようなわざだった

「いったいどんなわざを使っただろう?」

エメルがそう思ったとき、後ろの草むらが【がさ】と音を立てた

エメルは音がしたほうを見た、するとザンゲースとザンゲースのトレーナーらしき人がいた。そいつはがっちりした体つきの男だった

そのトレーナーは、胸あたりに【D】のマークを付けていた

「あなたは？」

エメルがそう聞くと

「その傷を見てしまったようだな、しかもその傷が普通のポケモンのわざで出来たものじゃないとわかっているとすれば、きさまを消すしかないな！」

そのトレーナーは、語尾を強く言っ

「ザングース！きりさくだ」

ザングースがエメルに向かってきりさくをしてきた

「くっ！」

エメルはそのきりさくをうまくかわした

「出てきて！グリーン」

エメルはグリーン（ジュカイン）を出した

「グリーン！リーフブレード」

リーフブレードはザングースに当たった

「ちっ！ザングース！ダークラッシュ！」

ザングースは、今まで誰も見たことのないような技を出してきた

「何ですって！」

そのわざは、グリーンに当たり効果抜群のわざだった

「グリーン大丈夫」

グリーンは、立ち上がったがとても辛そうだった

「相手はザングース、それなら」

エメルがそう思うと

「ザングース！ダークラッシュ！」

ザングースが、グリーンめがけて攻撃してきた

「グリーン！かわらわりよ」

グリーンはかわらわりをし、かわらわりとダークラッシュがぶつかり合った

「グリーンがんばって！」

エメルはそういった

グリーンは力を上げダークラッシュを押し切ってザングースにダメージを与えた

「ちっザングース！ダークラッシュ」

またダークラッシュをしてきた

「グリーン！ギガドレインよ」

グリーンはギガドレインをザングースにあて回復した

「ザングース！」

ザングースは、戦闘不能になった

「くそっ！覚えていろ！」

トレーナーは、ザングースを戻し、森の奥深く隠れていった・・・

「ふーグリーン大丈夫？」

エメルはグリーンにそう言うところグリーンは、大丈夫そうな声を出した

「グリーン、今のポケモンのことを調べるため、いったん町に戻る
う」

そういつてから、エメルは、ロイヤルシティに戻っていった

こうしてラルド達は、ユーラスタウンを目指し、エメルは、さっき
のポケモンについて調べるためロイヤルシティに戻るのだった

第5話終了第6話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV20

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個 バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV60

ゴールドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV35

ヨルノズク（ヨルノズク）LV30

モココ（モココ）LV29

第05話 「奇妙なポケモン」 (後書き)

あとがき

今回は、ちょっと短かったですね。ザンゲースがどんなポケモンなのかは、これからわかります

第06話 「ユーラスタウン！一時休息」（前書き）

ラルド達はロケット団についての情報を得て、次の町ユーラスタウンを目指していた

一方エメルは森の中で【D】のマークの奴らのことを調べていると、奇妙なポケモンに合うのだった

第06話 「ユーラスタウン！一時休息」

ラルド達はユーラスタウンが、見える丘に来ていた

「はー長かったな」

ゴールドが言った

「ああ、さつさとユーラスタウンに行くとするか」

ラルド達は、丘の横にある道で下っていった

一方そのころエメルは、ロイヤルシティを出て、ユーラスタウンを目指していった

（あの奇妙なポケモンについてラルドたちに教えないとあぶないかもしれない・・・）

そのころラルド達は丘を下りきりユーラスタウンの入り口に来ていた

「やっとついたなゴールド」

「ああ、まずはポケモンセンターに行くか」

こうしてラルド達は町の中に入っていき、ポケモンセンターに行った

ラルド達は、ポケモンセンターに入ると、ポケモンたちを預けた

「はい、お預かりします。部屋は205号室です」

そういわれるとジョーイさんからカギを貰い205号室に行き荷物を置いた

「ゴールド、この町の地図貰ってきてくれないか」

ラルドが頼むと、ゴールドは

「自分で行けよ、どうせ近いんだから」

「俺疲れてるんだよ」

「俺だって疲れてる」

「じゃあ、じゃんけんできめようぜ」

ラルドがそう提案した

「わかった」

2人はじゃんけんをした。結果はラルドが【パー】でゴールドが【グー】だった

「くそ俺の負けかよ」

「じゃあ頼むぜゴールド」

ゴールドはいやいや部屋を出て地図を取りにいった

ラルドは、ベッドに座った

（いったいロケット団は何をしようとしているんだ）

ラルドは、そのことを考えていた

そのときポケギアがなった

「だれだ？」

そう思いながらも電話に出ると、エメルの声がした

「エメルだけど」

「なんだエメルか何のようだ」

「あなたにききたいことがあるんだけど」

「聞きたいこと？」

「そうよ、最近奇妙なポケモンを見なかった？」

「奇妙なポケモンってどんなポケモンだよ」

「【ダークラッシュ】っていう技を使うポケモンよ」

「うーん、みてないなー」

「そうわかったわ、それじゃ」

エメルが電話を切ろうとしたときラルドはきるのをとめさした

「まってエメル」

「????」

「なんで、お前がジムに挑戦していたんだ」

ラルドはロイヤルジムのことについて聞いた

「あれは、私の力を旅の初めに試しておきたかったから挑戦したの」

「本当か？」

「本当よ」

「そうかならいいんだ、それじゃあ」

ラルド達は電話を切った。そのときゴールドが戻ってきた

「ほらよ」

ゴールドはそう言いながら地図をラルドに渡した

「サンキュー」

「あとこれも使えよ」

ゴールドはもう1個地図を取り出した

「これは？」

「マーレ島の町の地図がすべて載っているらしい。もっとも、町だけの地図と違って細かいところまでは書いてないがな」

「ふーん、こんなものがあつたんだ」

「今日はこの後どうする？ポケモンたちも回復するのは明日だぞ」

「今日は自由行動でいいよ」

「わかった、じゃあ俺は町でも見学してくるよ」

「じゃあ午後6時に食堂で」

「わかった」

そういつてゴールドは、部屋を出て行った

「さつき【疲れた】とかいったくせに、町を見学するぐらいなら疲れてないじゃないか」

そうおもってからラルドはベッドの中に入り、眠り始めた

それから、ラルドは午後5時半まで、眠っているのだった・・・

一方町に出たゴールドはというと・・・

「へー結構静かな町だな」

コーラストاونは、人があまりいなく、店もたいしてなかった

「これじゃ大して面白そうなものはないな」

そう思いつつもゴールドは、町を進んでいった

そのとき、ひとつの博物館を見つけた。その博物館には、【リーグ博物館】と書かれていた

「リーグ博物館？よくわからない題名だけどいつてみるか」

こうしてゴールドは博物館に入ってしまった

「いらっしゃいませ」

受付の人が言った

「すみません、いくらですか？」

ゴールドが聞くと

「いいえ、本館は無料ですので、どうぞお入りください」

「やったぜ」

ゴールドは、そういつて館中に入ってしまった

最初に入った部屋では【セキエイリーグ優勝者】と書かれていた

入ったらず、カントー地方のリーグ優勝者のポケモンとトレーナーの絵が飾られていた

「ヘーカントー地方のトレーナーは強いんだ」

カントー地方のトレーナーは100回中半数を占めていた

次は、ジョウト地方のリーグ優勝者のポケモンとトレーナーの絵があった

「ジョウトか、そういえばしばらく帰っていないな」

ゴールドは、ジョウト地方には、1年ほど帰っていなかった。

ここで、セキエイリーグからオレンジリーグとなった

「オレンジリーグ？初めて聞いたな」

その中の1人のトレーナーの手持ちポケモンに【ピカチュウ】や【ラプラス】がいた

その次は、【サイユウリーグ優勝者】となった

ゴールドはずっと見ていくと一番最後に知っているトレーナーの名前があった

「あつ、ラルドの名前がある」

サイユウリーグの一番新しい優勝者の名前にラルドの名があった

「あいつ、こんなに強かったんだ」

そうして、このマーレ島のリーグ【マーレリーグ】の優勝者を見ようと思ったが、まだ工事中だった

「しかたない、戻るか」

ゴールドは、博物館の入り口に戻り博物館を出た

「おっもう5時かそろそろ戻るとするか」

ゴールドは、ポケモンセンターに戻った

そして現在の時刻5時半ラルドは起きていた

「よくねたな」

ラルドは、目を時計に向けてベッドから降りた

「もう5時半か本当によくねたな」

そう思いながら、食堂に向かった

食堂は、きれいでファミリーレストランのような場所だった

食堂に行ったが、まだ誰もいなかった

「まだ、5時半だから誰もいるわけないか」

食堂にいたのは、食事を作るおじさんしかいなかった

そのころゴールドは、ポケモンセンターについていた

「5時半か・・・まだ早いけど食堂で待つてようかな」

ゴールドは、まず食堂に向かった

するとラルドがいたので、声をかけた

「早いなラルド」

「ゴールドか、お前も早いだろ約束の6時まであと15分あるぞ」

「まあ気にするなよ、それよりお前何か頼んだか？」

「まだたのんでないよ」

「そうかじゃあ何を頼むか」

こうして、ラルドたちの休息は、夜まで続いた、明日はまたラルド達の旅は始まるのだった

第6話終了第7話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ハウエン

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV20

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

マレ島バッジ：1個 バッジ：8個^{ホウエン}

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV60

ゴルドのトレーナーカード

マレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV35

ヨルノズク（ヨルノズク）LV30

モココ（モココ）LV29

第06話 「ユーラスタウン！一時休息」（後書き）

あとがき

タイトルが休息でしたが、これを書いているとき「休息早いんじゃないか」と思いました。微妙な裏話です。では次回もご期待ください

第07話 「ロケット団との遭遇」 （前書き）

ユースタウンに着いたラルド達は、一時休息を取り今後のたびのために力をつけるのだった

第07話 「ロケット団との遭遇」

そしてラルド達はユーラスタウンを出て、次の町アフトシティを指していた・・・

「ラルド、ちょっと休憩しようぜ」

ラルド達は山越えをしていた。ゴールドが疲れるのも無理はないだろう

「そうだな休むか」

ラルド達は、近くの岩の上に座った

「それにしても、この山全然人がいないな」

それにきずいたのは、ラルドだった

「今日天気が悪いからじゃないか」

ラルド達のいる山の空には、雨雲があっただが、まだ降ってこなかった

「しかたない、ゴールド、雨宿りが出来そうなところを探してそこで休もう」

「そうだな」

ラルド達は立ち上がり、雨宿りが出来そうなところを探した

数分後、ラルド達は、洞窟を見つけた

「おっ、あれなんかいいんじゃないか」

最初に見つけたのはゴールドだった

「そうだな、早速行こうぜ」

ラルド達が、その洞窟に近づいた時、雨が振り出した

「降り出したな、ゴールド早く行こうぜ」

ラルド達は、洞窟に向かって走り出した

「ふう、ついた」

走ったのはものの15秒ほどだったが、山登りをしたラルド達にとっては、大変疲れていた

ゴールドが、リュックを置くと、洞窟の奥に入っていた

「この洞窟そんなに広くないな、もう行き止まりだ」

ゴールドが行き止まりと言ったところは、入り口から見える場所だった

「どうでもいいけど休もうぜ」

「ちょっとまってラルド、なんかこの壁に、小さなくぼみがあるぞ」

そのくぼみは、直径20cmほどの小さな穴だった

「そのくぼみは、わざの【ひみつのちから】を使つと秘密基地が出来る場所なんだよ」

ラルドは、そういった。よく考えれば、ホウエンには、小さなくぼみなどたくさんあるので、ラルドが知らないわけはなかった

「ふーん」

そういいながら、ゴールドは、戻ってきて、腰を下ろした

「雨やみそうもないな」

そういったのはゴールドだった

「ああ、今日はこの洞窟で、一晩過ごすことになるかな」

そうこうしているうちに、あつとゆうまに夜になった。雨はやみそうもない

「仕方ない、今日は本当にここで寝るか、ゴールド」

「ああ」

2人は、寝袋を出してそこで寝始めた

そして、夜はふけていく・・・

ちょうど0時ごろ、洞窟の外から、足音が聞こえた。その足音でラ

ルドは、起きてしまった

「だれだ、こんな夜中に」

ラルドが、外に出てみると雨はやんでいた

「おっ、雨やんでるじゃん」

そういった時、洞窟の左側から声が聞こえてきた

「なんだ？」

ラルドは、そう思いつつ見に行くと、話し声が聞こえてきた

「奴らに、先を越さすな！勝利は我が手に！」

ラルドは、その声を出している奴らを見ると胸の当たりに【R】のマークがついていた

（ロケット団だ！）

ラルドは、そう思った、ラルドは、この事態をゴールドに知らせるため、戻ろうとしたそのとき

「がさ！」

大きな音を立ててしまった

（しまった！）

「誰だ！」

団員からの声が飛ぶ

「まずい、急がないと」

ラルドは、洞窟に戻った、洞窟は少し見つかりにくい場所にあったが、すぐばれるだろうと思っていた

「おい、ゴールド起きろ」

ラルドは、ゴールドの体をゆすりながら、起こした

「何だよ、ラルド」

ゴールドが、不機嫌そうに起きた

「どうもこうもないんだよ。この洞窟からとっとと逃げるぞ」

ラルドはそういって、寝袋をバッグに戻した

「どうしたんだよ急に？」

「ロケット団がいたんだよ、しかも俺が、音を立てたから、今頃俺を探しているはずだ」

「なんだって！」

そう言うとゴールドは、おきて寝袋をしまった

2人ともリュックをしょって、洞窟から出るタイミングを計っていた

「よいまだ」

ラルド達は、急いでその洞窟をでて、隠れながら山頂を目指した

そのとき、1人の団員が、ラルド達を見つけた

「おーい！ガキがいるぞ」

団員が、大きな声で言った

「ちっ」

ゴールドは、そう思った。そして団員が言ってきた

「きさまらここで何をしている」

その質問にラルドが言い返した

「それは、こっちのセリフだ。ロケット団がここで何をやっているんだ」

「ほう、われらの名前を知っているとは、きさまらあいつらのスパイか」

そのとき他の団員が4人ほどきた

「どうした」

その中の一人が、最初からいた団員に聞いた

「こいつら、あいつらのスパイみたいです」

「そうか、ならば倒すしかあるまい」

そう言うと、5人の団員が、ボールを取り出し、ポケモンを1体ずつ出してきた

「くそ、ゴールドやるぞ」

「おう！」

ラルドたちもボールを出した

「行け！ゲイト」

「行くんだ！マグマラシ」

2人はゲイト（ワニノコ）とマグマラシを出した

相手のポケモンは、5匹ともグラエナだった

「行け！ゲイト、みずでっぽう」

「マグマラシ、かえんぐるまだ」

2匹の攻撃は、別々のグラエナに当たった

「グラエナ、ひるむな！とおぼえ！」

グラエナ5匹がいつせいに【とおぼえ】をした

「ちっ、これじゃまずいな」

ラルドはそう思った

「ラルド、ここは、俺達ももう1匹出そう」

「そうだな」

「なにをこちゃこちゃ言っている、グラエナ！かみつくだ」

「行け！ロック」

「行くんだ！モココ」

「ロック！てっぺき」

ロック（コドラ）は、かみつくをてっぺきで防いだ

「ロック！がんせき封じ、ゲイト！みずでっぽっ」

「マグマラシ！かえんぐるま、モココ！10万ボルト」

4匹の攻撃は、混ざり合い、巨大な攻撃力を生み出した。そしてその攻撃は、5匹のグラエナに当たった

「グラエナ！」

けむりが晴れグラエナたちを見ると、戦闘不能になっていた

「今だ！ゴールドポケモンたちをボールに戻して、この山を下山するぞ」

「わかった」

2人は、ポケモンたちをボールに戻し頂上を目指した

「おい、あいつらがいないぞ」

団員がそれに気がついたのは、ラルド達が、頂上を目指し始めて30秒後のことだった

そのころラルド達は、山頂を目指して走っていた

「なあ、ラルド。いったいどうしてこんな山にロケット団がいたんだ」

ゴールドが聞いた

「分らない、でも【奴らに先を越させるな】って言っていたから、その【奴ら】が関係していると思うんだけど・・・」

「そうか、今そんなことを考えていても始まらないな。さっさとこの山を下山しようぜ」

そういつているうちにラルド達は、山頂についていた

「よし、やっと山頂だな。あとは下るだけだ、行こうぜラルド」

「ああ」

こうしてラルド達は下山して行った。幸いにもくだりの道は直線一本という変わった山だった

そして、ラルド達が下山しているころ、ラルド達を取り逃がした団員は

「きさまら！失敗したな」

「はっ、申し訳ございません。ボス」

5人の団員がいつぺんに頭を下げた

すると、ボスは、近くの幹部に言った

「おい、こいつらをあそこに連れて行け」

「はっ」

幹部が、団員に近づいてきた

「ボス、それだけはやめてください」

団員達が必死に言った

「とつとと連れて行け」

幹部は、グラエナたちを出し、団員達を連れて行った

「いったい奴らは、何をする気だ」

そしてそんなことが起きている中で、ラルド達は、下山し終わっていた

「ふう、やっと下山できたよ」

ラルドが、一息ついた

「さあ、さつさと町に行こう。あいつらが、また来ると面倒だから」

「そうだな、行こう」

こうして、ラルド達は、次の町アフトシティを目指すのだった

第7話終了第8話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
バッジ：8個 ホウエン

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV57

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV25

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個 バッジ：8個 ホウエン

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV60

ゴルドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV35

ヨルノスク（ヨルノスク）LV30

モココ（モココ）LV29

第07話 「ロケット団との遭遇」 （後書き）

あとがき

今回も無事に終わりました。ロケット団との遭遇をし、これからどんな展開になるかその辺に注目です。次回をお楽しみに

第08話 「アフトジムに挑戦！〜前編〜」 （前書き）

ラルドとゴールドは、ロケット団と遭遇してしまったが、なんとか振り切ることができ、アフトシティを目指すのだった

第08話 「アフトジムに挑戦！〜前編〜」

ラルド達は、山を超え、アフトシティにたどり着いた

2人は、いつものように最初にポケモンセンターに行った

ポケモンセンターについたのは、夜の7時だった

そして、ジョーイさんにポケモンたちを預け、部屋に荷物を置いた

「ふーやっとなつたな」

ラルドは、ベッドに飛びとってから、いった

「今日は、ゆっくり休んで、明日ジムに行こうぜ、ラルド」

「ああ」

「お前、これからどうする、飯でも食いに行くか」

「そうだないくか」

ラルドは、ベッドから降りゴールドと一緒に食堂に向かった

食堂は、ファミリーレストラン風で、地下にあった

ラルド達は、席に座りメニューを取った

「何にしようかな？」

ラルドが迷っていると、ゴールドは

「お前、いつも注文する時遅いな」

「じっくり選んでるんだろ」

そういうと、ラルドは、注文をきめ、店員に注文をした

その後、料理を食べ、部屋に戻った。部屋に戻った時間は、午後8時を過ぎていた

「今日はもう寝るか」

ラルドがそう言う

「俺は、もう少し起きてるよ。先に寝てていいぞ」

「そうか、じゃあお休み」

ラルドは、布団に入った

それを見るとゴールドは、部屋を出て行った

ゴールドはその足で、フロントに向かった

「すみませんジョーイさん」

ゴールドは、ジョーイさんに話しかけた

「はい？」

「俺のポケモンで、完全に回復しているポケモンはいますか」

「ゴールドさんのポケモンでは、ヨルノズクが回復していますよ」

「ヨルノズクだけですか？」

「はい」

「そうですね、分かりました」

そういうとゴールドは、部屋に戻って、布団に入った

そのころ、エメルは、ラルド達が、ロケット団であった山のふもとにいた

「今日は、ここで休もう」

エメルは、近くにあった洞窟に入り寝袋を出し寝始めた

エメルは、ユーラスタウンに夕方についたにもかかわらず、ユーラスタウンで休まなかった

そうして、夜はふけていった

「あーよく寝たな、今何時だ」

ラルドが時計を見ると、まだ6時だった

「よし、ポケモンたちをとりに行くか」

ラルドは、ベッドから降り、フロントに向かった。ゴールドは、まだ寝ていた

「おはようございます、ジョーイさん」

ジョーイさんはすでに起きてから1時間はたっているような顔をしていた

「おはようございます」

「俺のポケモンは回復していますか？」

「はい、ラルドさんのポケモンは、すっかり元気になりましたよ」

ジョーイさんはラルドのポケモンが、入ったボールをラルドに渡した

「ありがとうございます」

そういつてラルドは、部屋に戻った

するとゴールドはちょうど起きてきた

「ラルド、今何時だ〜」

寝ぼけた声で言った

「今は、6時10分だ」

「じゃあ俺は、もう1回寝るから7時ごろ起こしてくれ」

そういつとゴールドは、また眠ってしまった

「しょうがないな、しかたないトレーニングにゴールドを連れて行くかと思うんだけど1人で行くか」

ラルドは部屋を出て外に出た

「出て来い！ゲイト」

ラルドは、ゲイト（ワニノコ）を出した

「よしゲイト、あの木をめがけてみずでっぼうだ」

ゲイトは、みずでっぼうを木に当てた

「よしその調子だ」

ラルドは、それから1時間ほど練習をした

そして、部屋に戻ったら7時20分になっていた

「おいゴールド起きろ」

ラルドが、ゴールドを起こした

「今何時だ」

「今、7時20分だ」

そういつとゴールドは、起きた

「おはようゴールド」

ラルドが、そういったがゴールドは、ボーとしている

「とっととしろよ、めし食いに行くぞ」

「わかった」

ゴールドは、立ち上がりラルドと一緒に食堂へ行った

「なあ、ラルド今日は何時ごろジムに行くんだ？」

「今日は、１０時ごろ行こうと思ってるんだけど」

「わかった」

そして朝食を済ませたラルド達は、９時ごろまで練習をしていた

そうして、１０時きっかりにジムに着いた

「たのもー」

ゴールドは、そっいいながら扉を開けた

ジム内は、岩がたくさんあった

「このジムは、岩タイプのポケモンを使うトレーナーのようだな」

ラルドは、そう思った

そのとき奥にある扉が開き、誰か出てきた

「挑戦者か」

出てきた男はそういった

「そうです」

「いいだろう、俺の名は、ゲンダイだ」

ゲンダイという男は、体つきががっちりしていて、身長の高い男だった

ゲンダイは、無線機のようなもので誰かを呼んでいた

「お前達、どっちが挑戦するんだ」

ゲンダイは、2人を見ていった

「2人とも挑戦さしてもらいたい」

ラルドが言つと

「ほう、ならばまとめていっぺんにかかってくるといいだろう」

「ダブルバトルですか、面白い受けて立ちましょう」

ゴールドは、ダブルバトルについては、あまり詳しくないがラルドに船の練習の時に教えてもらっていた

その時、奥から審判らしき人が出てきた、どうやらさっき呼んでいたのは、審判のようだ

ゲンダイは、審判にルールを告げ審判が所定の位置についた

「それでは、これよりジムリーダーゲンダイ対ラルド・ゴールドによるジム戦を行います。」

ルールは、2対2のダブルバトルです」

「それでは、試合開始!!」

「行くんだ! ラグ」

「行け! ウパー」

ラルドは、ラグ。ゴールドは、ウパーを出した

一方ゲンダイは

「ゆけ! ゴローニャ、ピジョット」

ゲンダイは、なぜかピジョットを出してきた

「先手必勝だラグ! ゴローニャにハイドロポンプ!」

「ウパー、みずでっぽっ」

2つの水のわざにゴローニヤは

「ゴローニヤ！あなをほる」

あなをほるで、地中に逃げ、わざをかわした

「甘いぜ！ラグ地震だ」

ラグは、地震を起こしゴローニヤにダメージを与えた

「ウパー！ピジョットにれいとうビーム」

れいとうビームは、ピジョットむけて飛んでいく

「ピジョット！高速移動からかげぶんしん、ゴローニヤ！いわおとし」

ピジョットは、れいとうビームをかわしゴローニヤは、地中から出てきていわおとしをし、ウパーにダメージを与えた

「ウパー！」

「ラグ！ハイドロポンプだ」

ハイドロポンプは、ゴローニヤめがけて飛んでいった

「ゴローニヤ！あなをほる」

ゴローニヤは、また地中に逃げ出した

「ラグ！地震」

ラグが地震を起こそうとしたそのとき

「ピジョット！つばさでうつ」

つばさでうつで、ラグが地震を起こすのをとめた

「ウパー！ピジョットにれいとうビーム」

ウパーは、れいとうビームを打った

「高速移動でかわせ！」

ピジョットは、れいとうビームをかわした

「ラグ！ピジョットにれいとうビーム」

「ウパー！れいとうビーム」

2つのれいとうビームは、ピジョットめがけて飛んでいったが

「高速移動からかげぶんしん」

またかわされてしまった

「行け！」

ゲンダイは、そういった。すると、ウパーは、ダメージを受け戦闘

不能になってしまった

「ウパー！」

「甘いなお前達、地中にゴローニヤがいるのを忘れていたのか」

ゲンダイが、言った

「ウパー！戦闘不能ゴローニヤの勝ち」

「ウパー戻れ」

「これで、2対1だな」

「まだだ、まだ俺のラグがいるんだ」

ラルドは、そういった

「ラルドがんばれよ」

「面白い、やれるものならやってみろ」

「やってやるぜ！」

2人の戦いは、次回に続く・・・

第8話終了第9話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マールレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV59

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV30

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マールレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV62

ゴルドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV37

ヨルノズク（ヨルノズク）LV30

モココ（モココ）LV30

ウパー（ウパー）LV30

第08話 「アフトジムに挑戦！〜前編〜」 （後書き）

あとがき

ジム戦の前編ですが、最初がジム戦と全然関係ありませんね（汗）
まあ、気にしないでください

第09話 「アフトジムに挑戦！〜後編〜」（前書き）

ラルド達は、1日休憩し次の日アフトジムに挑戦するが

ゴールドのウパーがやられ2対1になり不利な状況になった

第09話 「アフトジムに挑戦！〜後編〜」

「さて、お前のラグラージも倒してやろう」

ゲンダイは言った

「ゴローニャ！地震、ピジョット！フェザーダンス」

ラグ（ラグラージ）は、攻撃力を下げられ、そのうえ地震を受けて、ラグは大ダメージを受けた

「ラグ！」

ラグは、もうひんしに近い状態だった

「ほう、ひんしを免れたか、なかなかの耐久力のポケモンだ」

ゲンダイは、そう言った

「ラグ！れいとうビームだ」

ラグは、れいとうビームを放った

「同じ手が、何度も通用するとても思っているのか、ピジョット！高速移動からかげぶんしん」

ピジョットは、前のれいとうビームをかわしたときと同じことをした

「かかった！」

ラルドは、そういった。れいとうビームは、ピジョットではなく、ゴローニヤにヒットした

「何！」

ゲンダイは、驚いた。しかも、ゴローニヤは凍り付いてしまった

「今だ、ラグ！ハイドロポンプ」

ハイドロポンプは、ゴローニヤを襲う

「ピジョット！ゴローニヤをまもるんだ」

ピジョットは、ゴローニヤをかばいに行ったが、ハイドロポンプのスピードの方が早かった

そしてゴローニヤにハイドロポンプはヒットした

「ゴローニヤ戦闘不能！ラグラージの勝ち」

ゴローニヤは戦闘不能になり、ゲンダイはゴローニヤをボールに戻した

「これで、1対1だぜ」

「まだだ、ピジョットは、まだノーダメージだからなお前のラグラージは、すでにHPが少ないではないか」

確かに、ピジョットは、ノーダメージでラグはひんしに近かった

「そんなのは関係ない！ラグ、れいとうビーム」

ラグは、れいとうビームを放った

「ピジョット、高速移動からかげぶんしん」

れいとうビームはまたはずれてしまった

「ピジョット、つばさでうつ

「ラグ！あなをほるでかわすんだ」

ラグは、あなをほってつばさでうつを回避した

「あなをほるなどピジョットには効かないわざだ、むだだな」

ゲンダイは、そう言い放った

（どうしよう？このままでは負けてしまう）

ラルドは、そう考えた

「ピジョット！かげぶんしんをしておくんだ」

ピジョットは、かげぶんしんを行い無数に増えた、ラグは一向に地下から出てこない

「さあ、いつまで地中に入っているんだ」

ゲンダイが、せかすように言った

そのとき、ピジヨットがあなをほるの時に作った、あなの上空にきた

「いまだ、ラグーれいとうビーム」

ラグは、あなのなかから上に向けてれいとうビームを放った

「なに！」

そのれいとうビームは、ピジヨットに当たった

「やったぜ！」

ラルドが、そう喜んだ時

「あまいな・・・」

ゲンダイがそう言うと、ピジヨットが消えてしまった

「まさか、幻影！？」

「そうだ、そして本物のピジヨットは、あそこだ」

ゲンダイは、上空を指差した、その先をラルドが見ると、ピジヨットが何か攻撃を放つ準備をしていた

「まずい！ラグ、あなから脱出するんだ」

「遅い！ピジヨット！あなにむかって、はかいこうせん」

ピジョットのはかいこうせんは、ラグがあなを出ていない時に放たれた

「ラグー！」

「これで、俺の勝ちだな」

ゲンダイが、そう言うと

「まだだ、ラグー！れいとうビーム」

すると、あなのなかかられいとうビームが放たれた

「なに！ピジョットかわすんだ」

「無駄だ、あなたのピジョットのはかいこうせんの反動で動けない
！」

そして、れいとうビームはピジョットにヒットした

そして、ピジョットは地上に落ちた

「ピジョット戦闘不能！！ラグラーズの勝ち、よってラルド&コー
ルドの勝ち」

「やったぜ！」

ラルドは、そう喜んだ

「やったなラルド」

下でみていたゴールドが、ラルドのところに来た

「おい、お前ら」

ゲンダイが、ラルド達のところに来た

「これが、このジムを勝ち抜いた証、アフトバッジだ」

2つのバッジをラルドたちに差し出した

「「ありがとうございます」」

2人は、アフトバッジを受け取った

「なかなかお前は強いな」

ゲンダイが、ラルドに言った

「いえ、まだ修行中です」

「あなのなかでラグラージにいつ【まもる】を指示したんだ」

「ばれてたんですか、ラグには昔今のわざを身につけるように練習
さしたんです、ラグがこの方法を覚えていてくれてよかったです」

「そうか、これからもがんばってくれよ」

「はい」

2人は、アフトジムを後にした

「じゃあ、今日はこの町で休んでから次の町を目指すか」

「ああ」

ラルドと、ゴールドはまずポケモンセンターに行った

2人は、ラグとウパーの入ったボールだけをジョーイさんに渡した

ジムに行く前で休んでいた、部屋に戻った

ラルドが荷物を置くと

「じゃあ、飯でも食いに行くか」

「ラルドが、そう提案した」

「いや、俺はちょっとやりたいことがあるから先に行っていていいぞ」

「？、わかったじゃあ先に飯を食っているぞ」

ラルドが、部屋を出るとゴールドは、ボールを取った

（俺も実力をつけないと・・・）

そう思ってゴールドは、部屋を出た

部屋を出たゴールドは、ポケモンセンターのトレーニングルームに行った

トレーニングルームでは、モココとヨルノズクを出した

こうしてゴールドの特訓は、1時間ほど続いた

そのころエメルは、ラルド達がロケット団あつた山のふもとにいた

現在時刻は午後1時でまだ昼間だった

（今日中には、アフトシティに着くかな）

そう思いながらアフトシティを目指していた

そして、午後2時ごろエメルは、アフトシティのポケモンセンターに入ってきた

「やっとアフトシティに着いた」

エメルは、ジョーイさんにポケモンたちを預けると部屋の鍵をもらった

そしてエメルが、部屋に行く時にゴールドと合った

「あれ、エメルさんじゃないですか？」

ゴールドが聞くと

「ええ、ゴールドさんですよ」

「はい、今日この町に着いたんですか」

「ええ、あなた達は？」

「明日この町を出発する予定です」

「そう、じゃあ」

「はい」

そう言うときエメルは、部屋に入っていた

ゴールドは、食堂に向かいラルドがいる席に行った

「遅かったな」

ラルドが聞く

「まあな、それよりエメルさんがいたぞ」

「エメルが？」

「ああ、挨拶でもしたらどうだ」

「ああ、後でしとくよ」

こうしてラルドは、ゴールドが昼食を食べ終わり部屋にもどったとき、ゴールドに教えられた部屋に行った

「コンコン」

ラルドが、ドアをたたく

「はい？」

エメルがドアを開けた

「やあエメル」

「ラルドか、まあここだと何だから部屋に入って」

ラルドは、部屋に入り、近くにあったイスに座った

「で、ポケモン図鑑のほうはどう？」

ラルドが聞くと

「まあまあね、そう言うあなたはどんなの」

「俺は、全然だよ」

「そう、そういえばゴールドさんは」

「ゴールドは、どっかいったけど」

「じゃあ、今日の午後7時にゴールドさんも連れて食堂に来て」

「なんで？」

「ちょっと重要な話があるの、その話をあなた達にも教えとこ
うと思って」

「わかった、今日の午後7時だな」

「ええ」

「わかった、それじゃあまたあとで」

ラルドは、部屋から出て自分の部屋に戻った

（重要な話して何だ）

ラルドは、そう考えながらも眠りにつき午後7時を待つのだった

第9話終了第10話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV63

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV30

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：1個

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV65

ゴールドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV40

ヨルノズク（ヨルノズク）LV35

モココ（モココ）LV34

ウパー（ウパー）LV30

第09話 「アフトジムに挑戦！〜後編〜」 (後書き)

あとがき

エメルの登場、重要な話しとはいったいなんだろうが、次回をお楽しみに！

第10話 「奇妙なポケモンの真実」(前書き)

アフトジムを勝ち抜いたラルド達は、1日アフトシティで休むことにするとエメルと再会し午後7時に食堂に来るように言われたのだ
った

第10話 「奇妙なポケモンの真実」

ラルドは、よく寝たかのようにして起きてきた

「今何時だろう」

そう思いながら時計を見た

「6時半か」

時計を見た後ベッドから降り、水を飲んだ

「ゴールドはなにしてるんだろう？」

そう思っていたときに、ゴールドは部屋に戻ってきた

「おう、ラルド起きたのか」

ゴールドの額の辺りをみると、汗がたくさん流れていた

「ああ、ちょうど今おきたところだよ」

ゴールドは、近くにあったイスに座った

「そういえば、今日7時から食堂に来てくれって」

ラルドは、ゴールドに言った

「食堂に？お前も行くの？」

「ああいくよ、なんか重要な話があるんだって」

「重要な話しか、なんなんだろう」

ゴールドは、手にタオルを持ち汗を拭きながら言った

「さあ？それよりお前なにしてたの？」

「ちよつとトレーニングをね」

「ふーん、お前が自主的にトレーニングをね〜」

「それよりそろそろ7時だ、早めに行くか」

「そうだな」

ラルド達は、部屋を出て食堂に向かった

食堂にはエメルはまだ来ておらず、少し込んでいた

「あそこの席すいているぞ」

ゴールドは、一番はじの席を指差した

「あそこに座るか」

ラルド達は、その席に座りメニューを取った

「何食べようかな〜」

あいかわらず、ラルドはメニューを選ぶのは遅い

ゴールドはいつものようにすでにきめていて、食堂の入り口を見ていた

「よしこれにしよう」

ラルドが、注文をきめた時ゴールドが

「おっ、ラルド。エメルさんがきたぞ」

食堂の入り口を見るとエメルがいた

ゴールドは、入り口まで行き自分達の席につれてきた

「あなた達早いわね」

エメルは、座りながら言った

「まあね」

「ちょっとメニューかして」

エメルは、ラルドの持っていたメニューを取った

「これでいいか、すみません」

エメルが、店員を呼び注文を告げた

そして注文を継げたあとにラルドが聞いた

「ところでエメル、重要な話して何だ？」

「あなた達、奇妙なポケモンに会わなかった」

「奇妙なポケモンってこないだ電話で言っていたやつ？」

「そう、あの後にそういうポケモンに合わなかったかって聞いているの」

「俺は、見てないぞ、ゴールドもだよな」

「ああ見てない」

「そう・・・じゃあそのポケモンの特徴を教えるからそんなポケモンを見つけたら電話して」

「わかった」

「まず、変なわざを使ってくるの、普通のポケモンじゃ使えないわざを」

「普通のポケモンが使えないわざ？」

「そうよ、確かダークラッシュをとかいうわざなの」

とそのときゴールドが、話を切り出した

「そういえば、そんなポケモンについて聞いたことがあるな」

「え！じゃあおしえてくれない」

エメルが、驚きながら頼んだ

「わかった、そのポケモンは【ダークポケモン】って言うんだ」

「「ダークポケモン？」」

2人が声を合わせていった

「ああ、確か人工的にポケモンの心を閉ざさして、何かするっていうポケモンだ」

「その『何』ってなんだよ」

ラルドが、ゴールドに聞くと

「それが、わからないんだ、そんなに詳しいわけでもないから」

「それで、他には何かないの」

「他には、そのポケモンは、【オーレ地方】っていうところで初めて発見されたらしいけど、ある少年と少女がダークポケモンを助け出したんだって」

「そのダークポケモンを助けた方法って」

「それもわからないでも、オーレ地方っていうところでダークポケモンが初めて生まれた場所だってことぐらいしか」

「そう、あと他には何かある？」

「あとはもうないんだけど」

「そう、ありがとうゴールドさん」

それで、会話が終了したときに料理が運ばれてきた

「じゃあ食べましょうか」

ラルド達は、食事をし終わったら部屋に戻った

「それにしても、ダークポケモンって何なんだ」

ラルドが、つぶやいた

「そのことは、いくら考えてもわからないよ」

「そうだな」

そう言うとゴールドは、ボールを持った

「どこに行くんだ？」

「ちょっとトレーニングに」

「俺も手伝おうか」

「いや、１人でいいよ」

そういつとゴールドは、部屋から出て行った

「なんなんだ急にあいつが自分からあんなにトレーニングをするなんて」

「そう思いながらもラルドは、ベッドに入り寝ることにした」

こうしてラルドは、ダークポケモンについてしりその日は、眠りにつくのだった

そして、次の日の朝、ラルドは相変わらず起きるのが早く午前6時に起きた

ふと、外を見るといい天気だった

「よし、じゃあ行くか」

ラルドは、朝の日課として朝練をしていた

その朝練習では、最近はゲイトの特訓を行っていた

朝練習が終わり部屋に戻ると、珍しくゴールドが起きていた

「おはよう、ゴールド」

「おはよう」

ラルドが、水を飲みに行くとゴールドが

「お前いつもこんな朝から練習してるのか」

「ああ、ちよつとゲイトの特訓をね」

「そうか、じゃあ飯でも食いに行くか」

ラルド達は、食堂に行き朝食をとり部屋に戻ると、次の町に行く準備を始めた

「ちよつと俺、エメルのところにいつてくる」

ラルドがはそう言つと部屋を出て行つた

「エメルいる？」

ドアをノックしながら言つた

すると、エメルはドアを開けラルドを中に入れた

「今日、エメルどうするの」

「私は、まだこの町にいるわ。あなた達は、次の町に行くんでしょ」

「ああ、じゃあそれだけだから」

「ええ、がんばってね」

ラルドは、エメルの部屋をでて、自分の部屋に戻つた

「さあ、ゴールド行こうか」

「ああ」

ラルドは、荷物をもち次の町クレセントシティを目指すのだった

第10話終了第11話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV63

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV35

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：1個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV65

ゴールドのトレーナーカード

マール島バッジ：2個名前

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV43

ヨルノズク（ヨルノズク）LV39

モココ（モココ）LV36

ウ
パ
ー
(
ウ
パ
ー
)
L
V
3
6

第10話 「奇妙なポケモンの真実」(後書き)

あとがき

ダークポケモンを登場させました。これから、ダークポケモンがどうなるかにご期待ください

第11話 「山を越えろ！」（前書き）

奇妙なポケモンについてラルド達は、次の町クレセントシティを
指していた

第11話 「山を越える！」

クレセントシティを目指しているラルドたちに対しエメルはというとラルド達が、次の町に行ったのをみたエメルは、ポケモンの調子を整えていた

「よし、これでいいかな」

エメルは、その足でアフトジムに行った

大きな扉を開けると、ラルド達が見たときより少し荒れていた

「挑戦者か」

ゲンダイがいった

「そうです」

「いいだろう、ルールは2対2のダブルバトルだ」

「わかりました」

こうしてエメルは、ジム戦を行うのだった

一方ラルド達は、平野でトレーナーと戦っていた

「ゲイト！かみつく」

そのゲイトのかみつくによって、相手のポケモンは戦闘不能になりラルドが勝った

「よし、ゲイトもどれ」

ラルドは、ゲイトを戻しまた歩き始めた

「今のバトル結構良かったな」

ゴールドが言った

「ああ、ゲイトもだんだん強くなってきたよ」

そんな会話をしながら、歩いているとまた山が見えてきた

「また、山越えかよ。つらいな」

ゴールドが、嘆いた

「でも、なんか騒がしくないか」

「それもそうだな」

そう思いながら行くと人ごみが出来ていて、警察もいた

「なにがおこったんだろう?」

そう思ったラルドは、近くにいた人に聞いた

「すみません、いったいなにが起こったんですか」

「山の上に、雷雲が出来ていてそこをとるとかみなりがまっさかさまにおちてくるらしいんだ」

「だから交通止めになっているんですか」

「そうだよ、雷雲がなくなるまで通行止めらしいよ」

「そうですか、ありがとうございます」

ラルド達は、人ごみを出て木の下に行った

「どうするゴールド、これじゃあ次の町に進めないぞ」

「いったんアフトシティに戻ろうか」

「それもまた面倒だよな、何か方法ないかな」

そこでゴールドは、この山の近辺の地図をだした

「ラルド、遠回りになるけどいけそうな道があるぞ」

ゴールドは、地図をラルドにわたした

「本当だ、でもこの道で行くと普通の日数より3日以上かかるぞ」

「それでも行こうと思えばいけるぜ」

「そんなに日数がかかるなら、雷雲が消えるのをまっただけで待つが、早いと思うけど」

「そうか、じゃあいったんその山小屋にしようか」

「そうだな」

こうして2人は、雷雲が消えるのを待ったために近くの山小屋で休憩をするのだった

一方、エメルはアフトジムを勝ち抜き、ポケモンセンターでポケモンたちを回復させていた

その回復している時にテレビをなにげなく見ていると、あるニュースが、流れていた

「現在アフトシティからクレセントシティに行くための山に雷雲が出来ていて通れない状態です」

「いま通れない？そしたらラルド達は、戻ってくるのかな」

そう思いながら、テレビを見ているとこういうニュースも流れ出した

「最近、ポケモンが盗難される事件が、クレセントシティで多発しています。クレセントシティでは十分注意してください」

そしてその日の夜、雷雲は一向になくならないことを知ったラルド達は、アフトシティのポケモンセンターに戻ってきた

「はー、最低な日だったな」

ゴールドが言った

「仕方ないさ、自然にかなうはずがない」

ラルド達は、また新しい部屋の鍵を借りてその部屋にもつをおいた
そしてその日は終わったが、次の日、また次の日にも雷雲が消える
様子はなかった

「ラルド、やっぱりあの道を通ろうぜ」

ゴールドは、最初に見つけた迂回ルートを通ろうというのだ

「このままじゃラチが、あかないしな。じゃあ行くか」

ラルド達は、また山に行き、迂回が出来る道に行った

そして、山を登っている最中に声がした

「ちょっとまって!!」

その声の方向を見るとエメルがいた

「エメルいったいどうした」

「私も一緒に行くわ」

「でもどうして」

「私も次の町に早く行きたいから」

「どうするゴールド？」

「いいんじゃないか」

「じゃあ、気をつけろよ。エメル」

こうして3人で行動をすることになって、1日は、平らな場所を見つけそこで休憩、仮眠をとった

そして次の日の昼、天気は曇っていた

次の町に迂回ルートで最短でいく道を通るには、雷雲がある山頂付近を通らないといけなかった

「なあラルド、最短で行くのはやめないか」

ゴールドが、ラルドに聞いた

「大丈夫だよ、近くだから」

そうラルドは、押し切った

（こんなに雷雲がずっと同じ場所にあるなんておかしすぎる、少し確かめてみないと）

ラルドはそう思っていた

そして。山頂付近についた。山頂には立ち入り禁止のはずなのに誰かがいた

「なあ、向こうに誰がいるぞ」

ラルドが、指差した

「本当だ」

ゴールドが言った

「まって、あいつらはダークポケモンを使っていたトレーナーと同じマークをつけている」

エメルが言った

「何だって！よしそれならやつらをやつけようぜ」

ゴールドがそう言うラルドが

「さてよ、ゴールド。あんな雷雲が近くにあるところなんか、バトルなんか出来るもんか」

「じゃあどうするんだ」

「ちょっとまってよ、あいつらに勝てると思っっているの？」

エメルが、2人の間に挟んできた

「そんなこといったって・・・」

ゴールドがささやいた

そのとき、後ろから誰かが近づいてきた

「なにやってんだおまえら！」

ラルド達が後ろを振り向くと、大男がいた。胸には「D」のマークがついている

「あなたはあのときの」

エメルがそういった

「お前は、ロイヤルシティの近くの森にいた女が」

「エメル、いったいこいつは」

ラルドが聞いた

「私が森であつた、ダークポケモン使いの男」

「そういうことだ、あの時は失敗したが今日は、必ずやつつけてやる」

「そんなこといったって3対1じゃ勝ち目はないぜ」

ゴールドが、調子に乗っているように言った

「それはどうかな」

「なに！」

ラルド達が、その大男の後ろを見ると胸に「D」のマークをつけた
トレーナーが、30人ほどいた

「それでも勝ち目はないといえるかな」

「くそ！」

こうしてダークポケモンとの対決がはじまるのだった・・・

第11話終了第12話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV63

クイック（オオスバメ）LV56

ゲイト（ワニノコ）LV39

ロック（コドラ）LV52

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV65

ゴールドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：2個

手持ポケモン

マグマラシ(マグマラシ) LV45

ヨルノスク(ヨルノスク) LV40

モココ(モココ) LV40

ウパー(ウパー) LV40

第11話 「山を越えろ！」（後書き）

あとがき

ダークポケモンとの激突がついにはじまります。次回をお楽しみに

第12話 「対決！ダークポケモン」（前書き）

山を越えようとしていたラルド達は、山でダークポケモン使いと運悪く出会ってしまい、ダークポケモンとの戦いが始まるのだった

第12話 「対決！ダークポケモン」

ダークポケモン使いたちは、ポケモンを出してきた

そのポケモンたちは、ラルドたちの目からも普通のポケモンと違うような感じがした

「やるしかないぞ、ゴールド」

「おう！やってやるぜ」

ラルドとゴールドは、気合を入れた

（もうこの状況では、戦うしかないのね）

エメルは、そう思った

「行け！ゲイト！」

「行くんだ！マグマラシ」

「行くのよ！グリーン」

ラルドはゲイト（ワニノコ）、ゴールドはマグマラシ、エメルはグリーン（ジュカイン）を出した

「エメル、お前は左のやつらを頼む」

「わかったわ」

「ゴールドは、右のやつらだ」

「OK！」

こうしてラルドたちの戦いは、始まった

「行け！ゲイト、みずでっぽうだ」

ゲイトは、ダークポケモンとかしたブーバーにみずでっぽうを当てた
しかし、ブーバーはあまり効いていないようだった

「ブーバー！ダークラッシュ」

ブーバーが、ラルドが見たことのない技を繰り出してきた

「！？ゲイトよけるんだ！」

しかし、ゲイトはよけることが出来ずダメージをおってしまった

「くそ！今のわざはいつたいなんなんだ」

一方そのころゴールドはというと

「マグマラシ！かえんぐるま」

マグマラシのかえんぐるまは、ダークポケモンのバタフリーにヒットした

「バタフリー！ダークラッシュ」

ダークラッシュは、マグマラシに当たってしまった

「ちっ、いまのがダークポケモンだという証拠のわざか」

ゴールドは、そう思った

「マグマラシ負けるんじゃないぞ、かえんぐるまだ」

ゴールドは、必死になって戦っていた

そんな苦戦している2人の中で、1回戦っているエメルは

「グリーン！リーフブレード」

グリーンのリーフブレードは、相手のポケモンを一発で倒すほどの威力の高いわざだった

「負けるな！ダークラッシュ」

相手のダークポケモンは、ダークラッシュを繰り返してきた

「グリーン！かげぶんしんでかわすのよ」

グリーンは、ダークラッシュをかわした

「そのわざは、もう見切ったわ。グリーン！にほんばれ」

グリーンは、にほんばれを行った時相手がダークラッシュをくりだ

してきた

「グリーン！ソーラービーム」

ダークラッシュをしてきたポケモンは、ソーラービームをもろに受け戦闘不能になった

「グリーン、そのまま別のダークポケモンにソーラービーム！」

エメルは、1匹のダークポケモンを倒し次のダークポケモンと戦った

「いつけ！ゲイト、みずでっぼう」

エメルが、1匹ダークポケモンを倒したそのころラルドは、いまだに苦戦を強いられていた

「やれ！ダークラッシュ！」

「ゲイトかわすんだ」

ゲイトは、ダークラッシュをかわした

どうやら少しは、慣れた模様

（このままじゃ、ゲイトがもたないな・・・）

ラルドは、そう思って

「ゲイト戻るんだ」

ラルドは、ゲイトをボールに戻した

「バカか、ダークラッシュをやつに食らわせ！」

ダークラッシュをしてきたポケモンが、ラルドを襲う

「くそ！ラグ頼む」

ラルドは、急いでラグ（ラグラージ）を出して

「ラグ、まもるだ」

ラグは、ダークラッシュからみをまもった

「ラグ、ハイドロポンプ！」

ラグは、ダークラッシュをしてきたダークポケモンにハイドロポンプを食らわした。そのポケモンは、戦闘不能になった

「よし、ラグそのまま行くぞ」

ラルドは、残りあと5体のダークポケモンが残っていた

「ラグ、ハイドロポンプ！」

「まけるんじゃない、ダークラッシュで吹き飛ばせ」

ハイドロポンプが、ダークラッシュの威力によってかき消された

「負けるなラグ、じしんだ」

ラグのじしんは、相手のダークポケモンすべてにダメージを与えた

「もう一発だラグ」

ラグは、もう一度じしんをくりだすと、ダークポケモンいつたいをのこして、全滅となった

「ずいぶんしぶといな」

ラルドがそう言う

「だまりな！行けメタグロス、ダークラッシュ！」

メタグロスは、じめんわざに弱い、飛んでいたためじしんを受けなかったらしい

「ラグ、ハイドロポンプだ」

ラグが、ハイドロポンプをうとうとしたそのとき

「遅い！」

メタグロスのダークラッシュは、ラグにHITした

「なに！？」

「ばかめ、メタグロスのこうそくいどうがあると思わなかったのか」

「くっ」

ラルドは、一瞬追い詰められた感じを受けていた

「ラグ、ハイドロポンプ」

「メタグロス！ダークラッシュ」

ダークラッシュが、ラグを襲う

「ラグ、ジャンプするんだ」

ラルドが、そう指示するとラグはジャンプした

「そのまま、ハイドロポンプ！」

ラグのハイドロポンプは、メタグロスの急所をたらえた

「メタグロス！」

メタグロスは、明らかに倒れていた

「これで、戦闘不能だな」

ラルドは、そういいながらダークメタグロスのトレーナーのところに近づいた

「おい、いったいだークポケモンを作り出してなにをするつもりだ」
ラルドが、ダークメタグロス使いに聞いた

「きさまらが、それを知る必要はねえ」

そついうとダークメタグロス使いは、森の奥に走っていった

「まで！」

ラルドは、そいつを追いかけたが、すぐに見失ってしまった

「くそ、仕方ないゴールドのところに行くか」

ラルドは、引き戻してゴールドのもとに行くった

ラルドがゲイトを戻したころゴールドは

「マグマラシ！かえんぐるま」

あいかわらずかえんぐるまで攻撃をしていたが、そろそろPPが少なくなってきた

しかも、相手はまだ7体のこっていた

（このままじゃちがあかないぞ）

ゴールドは、追い詰められていた

そのころエメルは、

「グリーン、ソーラービーム！」

グリーンのソーラービームで相手のダークポケモンを倒しまくっていたが

あと1体なのに、あのダークポケモンは手ごわい

エメルが、戦っているダークポケモンは、カイリユーだった

「カイリユー、ダークラッシュ」

そのカイリユーのダークラッシュは、別のダークポケモンのわざよりすばやかかった

「グリーン、まもる」

グリーンが、カイリユーのダークラッシュをかわすのは、まもる以外では出来なかった

「カイリユー！だいもんじ」

「グリーン、かわして」

カイリユーは、だいもんじを使ってきて、グリーンを苦しめていた

「グリーン！がんばって」

ゴールドはあとダークポケモン7体。エメルは、手ごわいダークカイリユー、いったいこの戦いはどうなるのか

第12話終了第13話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV67

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV45

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV70

ゴールドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV48

ヨルノズク（ヨルノズク）LV39

モココ（モココ）LV36

ウパー（ウパー）LV36

第12話 「対決！ダークポケモン」（後書き）

あとがき

ラルドのダークポケモン戦終了しました。次回は、エメルのダークポケモン戦です。

第13話 「ダークポケモンの脅威」(前書き)

ダークポケモン軍を倒したラルドは、ゴールドのもとに向かった

そのころエメルは、ダークカイリユーに戸惑っていた

第13話 「ダークポケモンの脅威」

「グリーン、かげぶんしんよ」

エメルは、かげぶんしんでグリーン（ジュカイン）を増やし、だいまんじをうまくかわそうと言うのだ

「無駄だ！ダークラッシュ」

ダークカイリューは、ダークラッシュをくりだしてきた

「そのわざは見切っているわ」

グリーンは、ダークラッシュを余裕でかわした

「あまいな、カイリューだいまんじ」

カイリューは、だいまんじを放ってグリーンにダメージを与えた

「グリーン！」

グリーンは、必死の思いで立ち上がることが出来た

「でも、いったいどうしてあれが本物だって」

「ぶんしんならダークラッシュをかわすはずがないだろう」

「くっ、頭がきれるやつね」

「カイリユー！だいもんじ」

ダークカイリユーは、再び攻撃を仕掛けてきた

「グリーンかわすのよ」

しかし、ぶんしんも消えていて力がほとんど残っていないグリーンはかわすことができなかった

「グリーン！」

グリーンは、だいもんじを受け戦闘不能になってしまった

「グリーン、戻って」

エメルは、グリーンをボールに戻した

「くつくく、これできさまの負けも同じようなものだな」

「まだよ、私にはまだこの子達がいる」

エメルは、次のポケモンを出した

「ちっ、まだ手持ちがいやがるのか。まあいい叩きのめしてやる」

「できるもんならやってみなさい」

こうしてエメルの第2戦が始まるのだった

一方ゴールドは、

「マグマラシ！ひのこだ」

ダークポケモンを1匹倒したもののかえんぐるまのPPがなくなつてしまっていた

「そんな、わざが食らうか！ダークラッシュ」

相手は、ダークラッシュを繰り出した

「マグマラシ、かわせ」

マグマラシは、かわして

「マグマラシ、影ぶんしんだ」

かげぶんしんをマグマラシは行つた

「そんな小細工がきくか、ダークラッシュ！」

またもや、マグマラシにダークラッシュが襲い掛かる

しかし、ダークラッシュが当たったマグマラシは、幻影だった

「マグマラシ、でんこうせっかだ」

マグマラシは、でんこうせっかで相手のダークポケモンをやっつけた

「よし、よくやったぞマグマラシ」

そうよるこんでもいられなかった

まだ相手にはダークポケモンが5匹いたからである

「ダークラッシュ！」

相手がそう命令した。ダークラッシュは、マグマラシめがけてくる

「マグマラシあぶない！かわせ」

マグマラシは、体力に限界があり動くのもつらそうだった

「ハイドロポンプ！」

ダークラッシュをしてきたダークポケモンに、ハイドロポンプが当たった

「！？いったい誰が」

ゴールドは、驚いた

「何ぐずぐずやってんだ！ゴールド」

その声の方向を見るとラルドがいた

「ラルド！」

そうゴールドがいうとラルドは、ゴールドの隣に来た

「ラルドお前全滅させたのか」

「ああ、早くこいつらもやるぞ」

「でも、マグマラシが戦える状態じゃない」

「じゃあ、マグマラシをボールに戻してお前はヨルノズクを出せ」

「わかった」

ゴールドは言われた通りにマグマラシを戻し、ヨルノズクを出した

「おのれ、きさまも倒してやる」

相手はそう怒りながらいつてきた

「どっちが、倒されるかな」

ラルドが挑発的にいった

「ゴールド、ヨルノズクに相手を注目させるんだ」

「わかった、ヨルノズク上昇だ」

ヨルノズクは、うなずいて相手の上空あたりに飛んでいった

「おい、上空だ。上空のヨルノズクにダークラッシュ」

相手のダークポケモンは、ヨルノズクにダークラッシュを放った

「ヨルノズク！かわすんだ」

ヨルノズクは、さらに上空に行きかわした

「今だ！ラグ、れいとうビーム」

上空に飛んでいったポケモンは、全部で3匹だった

そして、全匹にれいとうビームが当たり一気に戦闘不能になった

「なんだと！」

上空に飛んでいったダークポケモンたちは、地面にたたきつけられた

「ラグ！のこりのポケモンにハイドロポンプ」

「ヨルノズク！そらをとぶだ」

ラグがハイドロポンプを相手ダークポケモンにヒットさせ、そらをとぶで一気に止めを刺した

そして、2匹のダークポケモンは一気に戦闘不能になった

「ちっ、覚えていやがれ」

ダークポケモン使いは、どこかに行ってしまった

「ふう、助かった」

ゴールドがいきをついた

「大丈夫か？ゴールド」

「ああ」

「無事で何よりだ。さあ、エメルのところに行こう」

「そうだな、ヨルノズク戻って来い」

ゴールドは、ヨルノズクを手元に戻した

ラルド達は、エメルのところに向かった

ラルド達が、エメルのところに向かっている最中エメルの第2戦が始まった

「がんばって、グラ」

エメルのポケモンは、グラ（トドゼルガ）だった

「グラ！れいとうビーム」

グラは、ダークカイリューにれいとうビームを放った

「カイリュー、だいもんじで押し返せ」

れいとうビームとだいもんじがぶつかり合った

そして2つのわざで爆風が起きた

「グラ！れいとうビーム」

そんな煙が漂っている中、エメルは、れいとうビームの命令をした

グラは、指示通りにれいとうビームを放った

そのとき、カイリユーのひめいが聞こえた

「なんだと！」

カイリユーのトレーナーがいった

けむりがはれるとカイリユーとグラの姿が見えた

「カイリユー！」

カイリユーは倒れていた。そして、カイリユーのおなかには、こおりがついていた

「グラ、ありがとう」

あのときのグラのれいとうビームが、ヒットしたのだ

「ちっ、覚えていやがれ」

そういつて、カイリユーのトレーナーはどこかに行ってしまった

「ふう、グラよくやったね」

エメルが、グラをほめている時

「確かにグラはやったよ」

エメルの耳に声が聞こえてきた

そして、その声の方向を見るとラルド達がいた

「ラルド！ゴールドさん」

エメルがそう言うラルド達が、エメルのもとにきた

「大丈夫かエメル？」

「ええ、大丈夫。あなた達は？」

「俺達は、このみためどうりたいしたことはない」

「じゃあ、早くこの山を下山しましょう」

エメルが、そう提案するとラルドが

「いや、まだ下山しない。あのライメイのなぞを解くんた」

「あのライメイは自然に出来たものじゃないのかよ」

「これは予測だけど、たぶんあのライメイはさっきのやつらが作り出したと思うんだ」

「なんでだよ？」

「わからない、でも調べるだけの価値はあると思うんだ」

「わかったわ、じゃあライメイが一番近いところに行きましょう」

「OK行こう！」

こうして、ラルド達は、ライメイが一番近くの場所に向かうのだった

第13話終了第14話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV70

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV45

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV73

グラ（トドゼルガ）LV65

ゴールドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ(マグマラシ) LV 50
ヨルノスク(ヨルノスク) LV 42
モココ(モココ) LV 36
ウパー(ウパー) LV 36

第13話 「ダークポケモンの脅威」(後書き)

あとがき

やっと13話完成しました。ライメイにどんな謎が隠れているのか、
お楽しみください

第14話 「ライメイの謎」(前書き)

ダークポケモン軍を倒したラルド達は、ライメイの謎を解くためにライメイに一番近いところに向かっていた

第14話 「ライメイの謎」

ラルド達は、ライメイに一番近いと思われる山頂にいた

「これがライメイか」

ラルドがいった

「特にこれと言った問題はないみたいだけど・・・」

エメルがそう観察しながら言った

「なあ、これになにがあるんだよ」

ゴールドが、ラルドにいった

「でも、何かあるような気がするんだけどな」

と、いったその時後ろからはっぱカッターがとんできた

「誰だ！」

そのはっぱカッターはラルドのほうに飛んでいったためラルドがそういった

「きさまらそこでなにをしている」

振り向いた先には、ベイリーフとベイリーフのトレーナーらしき人がいた

「お前こそ何者だ」

ゴールドが言い返す

「そんなのはこちらのセリフだ、きさまらとつとどっかに行け」

暴力的な言葉使いでいつてくる

「お前がどっかいけよ」

「どくきがないなら、叩き潰すまで」

相手が戦闘体制にはいったのをさっし、ラルド達は、ポケモンを出した

「行くんだ！ラグ」「行け！モココ」「行くのよ！グラ」

ラルドはラグ（ラグラージ）ゴールドはモココ、エメルはグラ（トドゼルガ）を出した

「ちっ、3対1か勝ちそうもないな」

相手がそうつぶやいたが、ラルドたちには聞こえなかった

「ラグ！れいとうビーム」

「グラもれいとうビームよ」

ラグとグラは同時にれいとうビームを発射しベイリーフをターゲット

トに飛んでいった

「ベイリーフ！ダークラッシュ」

ベイリーフは、れいとうビームにダークラッシュで立ち向かった

しかし、ダブルれいとうビームに勝てず、れいとうビームをもろに食らった

「ベイリーフ！」

ベイリーフは、一気に戦闘不能になってしまった

「どうした、もう終わりか」

ゴールドがいう

「こうなれば、予定は早いがあのお方に連絡してよんでもらおうか」
そういうと、そのトレーナーはどこかに行ってしまった

「あつ、こらまって」

ラルドはおいかけようとしたが、エメルにとめられた

「ラルド待ちなさい、あいつを追いかけるよりまずはこのライメイの謎を解くわよ」

「でも」

ラルドはためらったがゴールドに一言いわれライメイの謎を先にくことにした

「でも、このライメイなにかへんなんだけどな」

「さっきから思っただけど、このライメイはただのライメイだと思うんだけど」

エメルがそう言う

「いや絶対何かある」

そうラルドがいった時にライメイからさらに強い電気が流れ出した

「わっ何だ？」

ラルドが驚いたその時、ライメイの中から何かが出てきた

「あれは、サンダー！」

ゴールドは、そういった

「サンダー？何だそれ」

ラルドが、ゴールドに聞いた

しかし、ゴールドが説明しようとした時にエメルが口をはさんだ

「そんなことも知らないの、サンダーと言えばカントー地方に生息する伝説のポケモンの１匹じゃない」

「へーそうなんだ」

「でも、何でココにサンダーがいるのかしら」

エメルがそう疑問に思ったその時

「それは、サンダーをわれわれが、この山に呼んだからな」

その声の方向を見ると人がいた

そいつは、胸に【D】のマークをつけていたが、さっきまでの連中とは服が違っていた

「なんですって！？いったいどうして」

「それは、お前達を知る必要はない」

「なんだと！」

ゴールドが激怒した時相手は

「さあ、早くどこかへ行くんだ。さもないと、サンダーの電撃が飛んでくるぞ」

「へん、そんな脅しが効くかよ」

「それなら食らえ！サンダーかみなり」

サンダーは、ゴールドのところにかみなりをはなった

「なに！」

「ゴールドその場所から離れろ！！」

しかし、ゴールドは驚きで体が動かない

「うわああああああ」

かみなりは、ヒットした

「まずは一人だな」

相手がそういった

「それはどうかな」

ラルドがそう言い放った

かみなりで落ちてできた煙が晴れると

ゴールドの上にラグがいた

「なに！」

「ラグは地面タイプ。電撃なんかきかない」

「サンキューラグ」

ゴールドは、ラグにお礼を言った

「ちっ、しぶといやつらめ」

「さあ、これから勝負だ」

こうしてラルド達対サンダーの対決がはじまるのだった

第14話終了第15話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV72

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV45

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV73

グラ（トドゼルガ）LV66

ゴールドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ(マグマラシ) LV50
ヨルノスク(ヨルノスク) LV42
モココ(モココ) LV36
ウパー(ウパー) LV36

第14話 「ライメイの謎」(後書き)

あとがき

ライメイの謎を明かされました。次回はサンダーとの戦いです

第15話 「サンダーの脅威」(前書き)

ライメイがサンダーによって出来たとわかったラルドたち。しかし、そのサンダーと戦うことになった

第15話 「サンダーの脅威」

「行くぞ！サンダー」

最初にそういったのはラルドだった

「ラグ！れいとうビーム」

ラグ（ラグラージ）はれいとうビームをサンダーに放った

「サンダー！10万ボルト」

ラグのれいとうビームは、サンダーに当たったがあまりきいていないようだった

かわりに、サンダーの10万ボルトがグラ（トドゼルガ）を襲った

「グラ！」

グラは、水タイプのため効果は抜群でダメージが大きかった

「モココ、10万ボルト！」

「ラグ！れいとうビームだ」

モココの10万ボルトが先にサンダーに当たったがあまりきかず

ラグのれいとうビームもあまりきいていないようだった

「どうした、そんなしょぼい攻撃ではサンダーは倒せんぞ」

相手がそういつてから

「サンダー、あまごい」

サンダーはあまごいをして、雨を降らした

（しめた、あまごいをしていたぞ）

ラルドは、そう思った

「ラグ！ハイドロポンプ」

ラグはハイドロポンプをサンダーに放った

雨がふっているため、ハイドロポンプの威力が上がった

サンダーにハイドロポンプは当たった。少しはきいているようだ

「サンダー！ひるむな、かみなり」

サンダーは、またグラめがけてかみなりを落とした

「グラ！にげて！」

しかし、グラは動くことが出来ない

「！？もしかしてまひしているの」

エメルは動揺した

その瞬間グラにかみなりが落ちた・・・かのように見えた

「グラの上にはラグがいた」

「おのれ！またしても」

「ありがとうラルド」

エメルがラルドにいった

「ああ、それより次の手行くぞ」

「ええ」

「モココ！10万ボルト」

ゴールドはモココにそう命令した

10万ボルトは、ヒットしたがやはりきいていない

「くそ！いったいあいつは何なんだ」

ゴールドが悔しそうにいう

「ラグ！ハイドロポンプ」

まだ雨が降っていたので威力は増している

サンダーにハイドロポンプは当たった

「サンダー！かみなり」

かみなりはさっきのかみなりよりスピードが速い

かみなりの標的は、グラだった

「グラ！れいとうビームで対抗よ」

グラはまひしていて動けないためれいとうビームでかみなりを抑えた

しかし、れいとうビームはかみなりに押されている

（よし今だ）

ラルドはそう思って

「ラグ！れいとうビーム！」

サンダーがかみなりをはなっている今、急所にれいとうビームを当てて大ダメージを与えようというのだ

「いつけえええええ」

その時、押し負けていたグラのれいとうビームが、かみなりを押し切った

そのため、サンダーはダブルれいとうビームをもろに受けてしまった

「やったぜ！」

ラルドがそう喜んだ時サンダーの目が変わった

「お前達は復活さしてしまったようだな。ダークサンダーを！」

「ダークサンダー！？」

ラルド達は驚いた

サンダーの目は、さっきのダークポケモン軍と同じいや、さらに強力なものだった

「さあ、これでとどめだ！ダークラッシュ！」

ダークサンダーのダークラッシュがラグたちを襲う

「くっ、いったいどうすれば」

ラルドがそう思ったそのとき

サンダーが急に止まった

「なんだ？」

その瞬間、サンダーが暴れだした

「なに！サンダー落ち着け！」

相手は必死に落ち着かそうとするが落ち着く気配がない

「チャンスだ！みんな一斉攻撃だ」

「ラゲ！れいとうビーム」

「グラ！れいとうビームよ」

「モココ！10万ボルト」

3匹の攻撃はサンダーに当たった

しかし、その攻撃を受けたサンダーはさらに暴れだした

「なんだって！！」

「ラルド、もうこれ以上手がつけられないわ、いったん逃げましょ
う」

エメルがそう提案する

「でも、このままじゃサンダーが・・・」

「サンダーはしょうがないわ。でも、あの暴れているサンダーをあ
いつらも捕獲することが出来ないはず」

それならば、サンダーはうまく逃げる事が出来るわ」

エメルは必死に説得するがラルドは

「そうしたら、あのサンダーがどうなってもいいのか」

「だから、それは今の私達じゃなにもすることができないのよ」

「そんなことはない！まだ何かあるはずだ」

ラルドは必死になってエメルに抗議をする

「ゴールド、あなたから何かを言ってやって」

エメルはゴールドにふった

「えっ、そんなことをいわれたも」

ゴールドはためらう

そんな話をしているうちに【D】マークのやつらは消えていた

サンダーも少しはおとなしくなってきた

「ラルド見なさい、あいつらもいなくなっているし、サンダーも落ち着いてきている。これならサンダーも大丈夫よ」

ラルドは、そういわれてサンダーをみた

「・・・」

ラルドはなにもいうことはできなかった

「・・・本当にその言葉を信じていいんだな」

ラルドはそういった

「ええ」

「・・・わかったこの場はいったん去ろう」

ラルドは、そう言いつと走り出した

「ゴールド行きましょ」

「おう」

こうしてラルド達は、山を越えた

しかし、ラルドはサンダーのことが気になって仕方がなかった

そんなラルドの気持ちはとても複雑な状態で次の町クレセントシティに到着するのだった

一方ラルド達がクレセントシティに到着したころサンダーと戦った場所では

「薬が弱すぎたようだな」

胸に【D】のマークをつけた男が、倒れているサンダーを見ながら言った

「はい、伝説のポケモンに効く薬を新たに開発します」

「次失敗したらきさまの命がないと思え」

「はっ」

「あいつら、いったいわれらになにがあるというのだ」

この会話はいつたい。そしてサンダーはいつたいどうなるのだろうか

第15話終了第16話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV74

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV45

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV73

グラ（トドゼルガ）LV68

ゴールドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ(マグマラシ) LV 50
ヨルノスク(ヨルノスク) LV 42
モココ(モココ) LV 40
ウパー(ウパー) LV 36

第15話 「サンダーの脅威」(後書き)

あとがき

小説書いててわかったんですが、ラグとグラって反対から読むとまったく同じですね。別にこれを狙って名前をつけたわけじゃないんですけどね(笑)

あと、ラグとグラややこしいので、間違っているかもしれませんが間違っていたら、状況で判断してください

もしそういう間違いがあったら、ご報告をお願いします

第16話 「ラルドの行動」(前書き)

サンダーがダークポケモン化していたのを知るラルドたちだったが、
歯が立たなかった

サンダーがつかまらないのを願って次の町クレセントシティに来て
いた

第16話 「ラルドの行動」

クレセントシティについたラルド達は、最初にいつも通りにポケモンセンターに行っていた

そして、ジョーイさんにポケモンたちをわたした

そしてカギをもらい部屋に行った。もちろん、ラルドとゴールドが同じ部屋でエメルは別の部屋である

ラルドは、部屋に荷物を置いてベッドに飛び乗った

「ラルド、まだ気にしているのか」

ゴールドがラルドに問いかけた。もちろんサンダーについてである

「ああ」

ラルドは、あれいらい元気がなかった

「しょうがないだろ、あれはどうしようもなかったんだ」

「どうにかなったかもしれない」

ラルドは、わずかにていこうしている

「俺たちだけだとやっぱり力不足なのかな」

（力不足？そうか、俺が力不足だから、サンダーを助けられなかつ

たのか)

ラルドは、そう思うといきなり立ち上がった

「どうしたんだ？ラルド」

その声が聞こえないように、ラルドはとっとと部屋を出て行った

「どうしたんだ？あいつ」

ゴールドは、不思議に思った

ラルドは、まずジョーイさんのところに行った

「すみません、さっきポケモンたちを預けたラルドといいますが」

「どうしたんですか」

「俺のポケモンで完全に回復しているやついますか」

「コドラとオオスバメは完全に体調はいいみたいです」

「では、その2匹を返していただけますか」

「はあ、いいですけど」

ジョーイさんはそう言うのとロック（コドラ）とクイック（オオスバメ）が入っているボールを差し出した

「ありがとうございます」

そう言うと、ラルドはトレーニングルームに向かった

この街のトレーニングルームは、実践ができるようになっていた

実践と言うのは、トレーナー戦のことである

ラルドは、それに参加した

「それでは、シングルバトルを開始します。初め！」

「いっけー！ロック」

こうしてラルドは、ロックとクイックを特訓させるのだった

そして次の日、ラルドは昨日の夕食のときにこういていた

『明日は自由行動な』

自由行動、このことばのうらにはある秘密が隠されていた

エメルは午前中より外出し、ラルドはいつの間にかいなかった

「なんだおれだけかよ」

ゴールドはそう思いながらも、トレーニングルームで練習しようと思いついてトレーニングルームに行った

ゴールドも昨日ラルドがやった実践バトルを行った

一方エメルはクレセントジムの前に来ていた

（クレセントジム、いったいどういうジムなんだろう）

ジムの入り口は、まるで道場のような入り口だった

「すいませーん」

こうしてエメルは、クレセントジムのとびらをたたきジム戦を行っていたのだ

2人がそう言うことをしている時にラルドはというと

（相変わらずきついなこの山は）

サンダーと戦った山に来ていた。山には、ライメイはすでになくなっていた

そして1時間後、サンダーと激戦を繰り広げた山頂に来た

「ついた」

そこには、サンダーはいなかった

（サンダー無事だっただろうか？）

そう思いながら、山頂を見て回っていた時だった

後ろの草が「ガサガサ」とうごいたのだった

「だれだ！」

ラルドはゲイト（ワニノコ）を出した

「お前は」

草陰から出てきたのは、胸に【D】のマークをつけている

「きさまここでなにをやっている！」

「そうか、お前がわれらのじゃまをしているやつらの1人か」

そういうとそいつは、ポケモンを出してきた。そのポケモンは、レアコイルだった

「サンダーはどうした」

「そんなのは、俺を倒してからにしろ。もっとも俺を倒せるわけがないがな」

そいつは挑発的にいった

「ゲイト！かみつくだ」

ゲイトはレアコイルにかみついたが、鋼タイプのレアコイルにはかみつくはぜんぜんきかない

「レアコイル、10万ボルト」

レアコイルは10まんボルトを放ってきた

「ゲイト！あなをほる」

ゲイトはあなをほるで10万ボルトをかわした

「あなをほるでかわしたか」

「行け！ゲイトあなをほる攻撃！」

ゲイトは、レアコイルにあなをほる攻撃をしたがレアコイルは

「レアコイル上昇しろ」

レアコイルが上昇したため、あなをほるは当たらなかった

「なに！」

「レアコイル！10万ボルト」

あなをほるに失敗してしまったゲイトに思いっきり10まんボルトが当たった

「ゲイト！！」

ゲイトはひんしになっていた

「くっ、ゲイトもどれ」

ラルドはゲイトをボールに戻した

「いけ！ラグ」

ラルドはラグ（ラグレンジ）を出した

「ラグ！マッドショット」

ラルドは先制攻撃をくりだした

「ちっ、やっかいだな。レアコイル上昇だ」

レアコイルは上昇してマッドショットをかわした

「ラグ！マッドショットを連射だ！」

ラルドはラグにマッドショットを連射させた

「なんだと！レアコイルかわせ」

しかし、マッドショットの連射をかわし続けることは出来なかった

「レアコイル！」

レアコイルはマッドショットにヒットして、地上に落ちてきた

「ラグ、じしん！」

ここでラグの地震がレアコイルを襲った

そしてレアコイルはひんしになった

「レアコイル！もどれ」

相手はレアコイルを戻してたち去ろうとした

「あっ！まで」

ラルドはそいつを追いかけた

しかし、距離はどんどん広がっていく

「しかたないラグ、あいつにマッドショット！」

ラグはそう指示をつけるとマッドショットを相手に放って、相手の動きを止めた

動きが止まったためラルドは、相手に追いつくことが出来た

「さあ話してもらおうか、サンダーがどうなったのかを」

「しらねえ、俺は何にもしらねえんだ」

そいつはおびえたように言う

「うそつくな！」

「本当だ、信じてくれよ」

「わかった、話さないなら捕虜^{ほりよ}として連れて行ってやる」

「それだけはやめてくれよ」

「話さないなら連れて行ってやる、ラグこいつを抑えてくれ」

ラグは相手を抑えラルドはそいつを縄で縛った

「とつとと行くぞ」

ラルドが歩き出したその時、そいつがこう叫んだ

「851216!」

「なにいつてんだお前」

ラルドはそう聞いたが何にも反応を示さなかった

その叫び声がおこってから5分後、ラルドのほっぺに何かがかすれた

「痛!なんだ」

ほっぺからは、血がすこし流れていた

「ようやくきたか」

相手がそういう

「なに!」

ラルドが、まわりを見渡すとなにやら人影があった

「まさか!?!」

「そうそのまさかだよ、ラルドさんよ」

ラルドの回りには、胸に【D】のマークをつけている人がたくさんいた

ざっと30人はいるだろう

「これでお前もおしまいだな」

「くっ」

追い詰められたラルド、いったいラルドはどうなってしまっのか

第16話終了第17話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV74

クイック（オオスバメ）LV55

ゲイト（ワニノコ）LV46

ロック（コドラ）LV50

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV73

グラ（トドゼルガ）LV68

ゴルドのトレーナーカード

マーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV50

ヨルノズク（ヨルノズク）LV42

モココ（モココ）LV40

ウパー（ウパー）LV36

第16話 「ラルドの行動」(後書き)

あとがき

ラルドが追い詰められました。今後、どうなるのか、そしてサンダーがどうなっているのかをお楽しみに

第17話 「ラルドの無謀な賭け」 (前書き)

サンダーがいた山に一人で行ったラルドは、敵のわなに引っかかり、ピンチに追いやられるのだった

第17話 「ラルドの無謀な賭け」

「出て来い！みんな」

ラルドは、ざっと30人ほどのトレーナー達を退けるため

自分の手持ちのポケモンを、すべて出した

「何匹だそうが、勝ち目はないぜ。行くぞ！」

そう言うと、【D】のマークをつけているトレーナーのポケモンは一斉攻撃を始めた

「ラグは左、ロックは右、クイックは前、フライは後ろだ。俺を囲むようにしてくれ」

フライ（フライゴン）は、ラルドがこないだ捕まえたばかりのポケモンだったが

ラルドに結構なついていた

「行け！つばさでうつ」

「かえんほうしゃ」

「はっぱカッター」

さまざまに、わざがラルドのポケモンを襲う

「ラグ！ハイドロポンプ、ロック！がんせきふうじ、クイック！はいこうせん、フライ！りゅうのいぶき」

すべての攻撃を防げたものの、さすがにいつぺんに指示を出すのは大変だった

「食らえ！れいとうビーム」

相手のジュゴンのれいとうビームがクイックを襲った

「クイック！高速移動でかわすんだ」

クイックはいわれたとおりにかわした。しかし、れいとうビームはロックに当たってしまった

「ロック！」

ロックはそんなにダメージを受けなかったが、少し辛そうにしていた

（くそっ、このままじゃやばいな）

ラルドはそう思ったが、これだけの敵をどうにかすることは出来ない

「くらえ！ハイドロポンプ」

相手のカメックスが、ハイドロポンプをロックめがけてはなった

「ロック！てっぺき！」

ロックにそう指示したその時、フライにれいとうビームが当たって

いた

そのれいとうビームは、ジュゴンのれいとうビームのようだ

「フライ！くそっ、どうすればいいんだ」

そう思っているうちにも、クイックがライボルトの10万ボルトを受けていた

「クイック！くそ、戻るんだ」

クイックは、ひんしにはなっていなかったが、ラルドはボールに戻した

「ロック、フライも戻るんだ」

ラルドは、なにを思ったのかロックをフライも戻してしまった

「ついにあきらめたか」

相手のトレーナーの誰かが言った

「あきらめてなんかいない」

「強がっている余裕がどこにある」

「強がってなんかいない」

ラルドは、反論したが

「そういつていられるのも今のうちだ、そろそろとどめだ」

ラグ、くるぞ！気を抜くな

相手は、四方八方からいつぺんに攻撃をする体制に入っていた

「いっけ！攻撃だ！」

相手のリーダーらしきものがそういった

そうになると、ハイドロポンプやらいもんじやら、たくさんラルド
&ラグめがけて飛んできた

「ラグ！あなをほる」

ラグはそういわれると、一気にあなをほりだした

「ラグ！上に戻ってくるなよ」

そう言うと、ラルドはそのあなの中に入った

「何！」

あたらない、わざはすべて自分の仲間のポケモンに当たってしまった

「どうだ！ラグこのまま、クレセントシティ方面にあなをほってく
れ」

ラルドはラグの上に乗ってそう指示した。ラグは一気にほりだした

「逃がすな！追え！」

【D】のマークの人たちは、ラグがほったあなに入ってきた

「行け！フライ」

ラルドは、狭いあなの中に、フライを出した

「フライ！天井にはかいこうせん！」

はかいこうせんは、天井に当たり、道がふさがれた

「何！」

こうして相手たちは、通ることが出来なくなってしまった

「ちっ、おい地上に出るぞ」

そう言つと相手たちは外に出始めた

そのころラルドは

「よしフライ戻るんだ。ふう、これでまくことが出来たかな」

ラルドは一息ついた

（それにしても、サンダーはいったいどうなったんだろう・・・）

そう思っていたが、ラルドはあることを考えた

（あいつらの、アジトに行けば、サンダーを助けることができるかな）

ラルドはそう思っ一枚の紙を取り出し、文字を書いた

「よし、ラグちゃんとストップしてくれ」

ラルドは、ラグがあなをほるのをとめさし、ラグの上からおりた

「ラグ、この紙とロックたちのボールをエメルたちに渡してくれないか？」

ラルドは、そう言っロックたちの入ったボールと一枚の紙をわたした

「頼んだぞラグ、絶対渡してくれよ。それじゃあ、ラグどんどん進んでくれ」

ラグはわけがわからずにどんどん掘っていた

ラルドはその場に残った

（たのんだぞラグ）

ラルドはそう思っ、バックからげんきのかけらを取り出した

そのげんきのかけらを出して、ラグに渡さなかったゲイトに与えた

元気のかけらのおかげで、ゲイトは復活した

「ゲイト、上に向かってみずでっぽうだ。地上につながるようにしてくれ」

そういわれると、みずでっぽうを上放った

すると、地上が見えて、ラルドは地上にでた

「ゲイト、戻れ」

「おい！あそこにいるぞ」

そんな声が聞こえた

するとすぐさま、【D】のマークのやつらが来た

「さあ、ラルドかんにんするんだな」

「ああ、さつさと俺を捕まえてくれ」

ラルドは、そういつて相手に捕らえられてしまった

（これで、こいつらのアジトにつくことが出来る）

ラルドは、そのまま連れて行かれてしまった

一方そのころラグはクレセントシティの入り口まで来ていた

そのときに、ジム戦帰りのエメルとあった

「あれ、ラグじゃない？」

エメルはラグの方に行った

「あら？この紙は何」

エメルはラグの持っていた紙を取り上げた

「何ですって！？これはいつたい」

エメルはその紙を持って、ポケモンセンターに戻った

「ゴールドさん！」

エメルはそういつて部屋に入った

「あれどうしたの？」

ゴールドは休憩中のため、部屋に戻っていた

「ちょっとこれを見て」

エメルはラグが持っていた紙をゴールドに見せた。ラグもその後ろに来ていた

「何だって！？あいついつたいどうしてこんなことを」

その紙には、こう書かれていた

『エメルとゴールドへ

俺は、サンダーを助けるために【D】のマークのやつらのアジトに行ってきます

場所の位置はわからないけど、あいつらに捕まってアジトに潜入するつもりです

ラグに持たしたロックたちは預かっていてください。

俺の位置は、紙の右下にはってある。探知機でわかるようになっていきます

俺が3日以内に帰ってこない場合は助けてください

ラルドより『

「どうする？エメルさん」

「どうしようもないわ、この探知機が発しているのだと

今は、あいつらに連れて行かれている途中みたいね」

「この探知機の移動が小さくなったらその場所に行こう」

ゴールドはやる気満々に言ったがエメルは

「嫌よ、私達が危険な目にあう必要がないわ」

エメルはなにが何でもいかないみたいないかたをした

「それじゃあ、俺が1人で行くよ、探知機を貸して」

ゴールドが手を出すとエメルはすんなり渡した

「好きにきなさい」

そう言うとエメルは部屋から出て行ってしまった

「ラグ、お前のボールはどれだ」

ラグはロックたちのボールを静かに下ろして、自分のボールを差し出した

「ラグご苦労さん、戻って十分に休めよ」

そう言うとゴールドがラグをボールに戻した

「よし、この探知機の動きが少なくなったら、助けに行くか」

そう言うとゴールドは、ラグたちをジョーイさんに預けた

そうすると部屋に戻り、助けに行く準備をし始めた

こうして【D】のマークのやつらとの、戦いが再び始まるうとしていた

第17話終了第18話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV76

クイック（オオスバメ）LV60

ゲイト（ワニノコ）LV46

ロック（コドラ）LV60

フライ（フライゴン）LV62

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード

マール島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV54

ヨルノズク（ヨルノズク）LV45

デンリュウ（デンリュウ）LV43

ヌオー（ヌオー）LV43

第17話 「ラルドの無謀な賭け」 (後書き)

あとがき

ラルドの無謀な賭け。これがどうなるか、そしてラルドがどうなるかが注目です

第18話 「Dのマークの意味」(前書き)

サンダーがいた山で【D】のマークのやつらと戦ったラルド

逃げようと思えば逃げられたが、逃げずに【D】のマークのやつらのアジトの潜入を試みた

第18話 「Dのマークの意味」

そして、トラックに揺られること30分はたっただろう

トラックが止まりラルドは【D】のマークのやつらにアジト?と思われる場所に連れて行かれた

「ここに入ってる!」

ラルドはつかまれていたためなげられた

「痛!なにすんだよ!」

そう反抗したが、その男はどこかに行ってしまった

ラルドがほおり込まれた場所は、薄暗くじめじめしていて、2畳ほどの小さな牢屋だった

(よし、これで潜入できたな)

ラルドはそう思った

幸いにラルドのポケモンを取り上げる検査をしなかったため

ラグたちがいないのと、ゲイトを持っていることがばれなかった

(ここからどうやって脱出しようか・・・)

前の牢屋には誰もいなかったため、誰にもか気づかれず脱走をする

ことは出来た

しかし、窓など外に出る場所が、牢のあみを通り越すしかなかった

（まずいな・・・このままじゃ本当につかまっちまうぞ）

そう思つて5分後、【D】のマークの男がやってきた

「小僧こつちにこい、ボスがお待ちだ」

（ボスだと）

ラルドはそう思いながらも、男のほうへ向かった

牢屋を出て10分ほど歩いたところ、ある部屋に入らされた

手錠はかけておらず、部屋にはラルドとボスしかいなかった

「お前がラルドか・・・」

そのボスとやらは、イスの背もたれをこちらに向けて話していたため、顔が見えなかった

「そうだ・・・」

「お前、なかなかの実力を持っている・・・我が【ダーク団】に入らないか」

（ダーク団・・・これがあいつらの名前か）

そう思っているうちにボスがもう一度聞いてきた

「俺は、入るつもりはない」

ラルドはきっぱりと断った

「そうか・・・そう言っと思ったよ。ならばお前を帰すことはできないな」

「俺をどうするつもりだ」

「簡単なこと、ここでお前をこの世から消し去ると言っことだ」

ボスはなぜか、遠まわしに言った

「やるか」

ラルドは腰のボールに手をかけた

「そうあせるな、お前の相手は現在調整中だ。お前は牢屋で待っている」

そう言つと、部屋に団員が入ってきて、同じ牢屋にラルドは戻された

（いったいどうするつもりなんだ）

そう思つてもまずは牢屋から出ることを先決に考えた

そしてラルドはひとつの考えを出した

その考えが出来た時に、団員がやってきた

「こっちにこい、ボスのポケモンがお待ちだ」

ラルドはいわれるがままに、団員のほうへ向かった

そのときである、ラルドは団員に捕まれる前に、ゲイトを出した

「ゲイト！れいとうビーム！」

れいとうビームは団員に当たり、団員は凍ってしまった

「よし、行くぞゲイト」

ラルドはこうして脱走を始めた

ラルドは道を覚えるのがなぜか得意なため、つれてこられるときの道をまっすぐ戻っていった

「よし、もう少しで出口だ」

ラルドが出口の光を見つけてそういった

外にラルドが出た

「なに！」

ラルドは出たとたんに驚いた

そこにはあのサンダーがいたのだから

「やはり逃げ出してきたか・・・」

そこにはあのボスがいた

顔は少し四天王のキクコのような年齢の顔の男だった

「お前、いったいどうしてここに。それになぜサンダーが」

ラルドがそう聞くと

「サンダーなど簡単に捕まえられる。それよりラルド

約束したバトルを始めるぞ。サンダー！かみなり」

サンダーはボスの言うとおりにかみなりをしてきた

「くっ」

かみなりはラルドに向かってきたため、ラルドはかみなりをかわした

「こうなったらあのときの仕返しをしてやるぜ」

再びサンダーとの戦いが始まるのだった・・・

第18話終了第19話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV76
クイック（オオスバメ）LV60
ゲイト（ワニノコ）LV47
ロック（コドラ）LV60
フライ（フライゴン）LV62

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75
グラ（トドゼルガ）LV70

ゴルドのトレーナーカード

マール島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV54
ヨルノズク（ヨルノズク）LV45
デンリュウ（デンリュウ）LV43
ヌオー（ヌオー）LV43

第18話 「Dのマークの意味」(後書き)

あとがき

ラルドが道を覚えるのが得意だと言いましたが、実は私も道を覚えるのがなぜか得意なんですよね。何でだろう？

第19話 「一人の少年」(前書き)

【D】のマークの意味がダーク団ということを知ったラルド

アジト内から脱出しようとしたが入り口でダーク団ボスとサンダー
たちと戦うことになってしまった

注意：ポケモンXDの完全なネタバレがあります

第19話 「一人の少年」

「出て来い、ゲイト！」

ラルドはゲイト（ワニノコ）を出した

「ゲイト、れいとうビームだ」

ラルドは速攻でゲイトに指示を出した

しかし、れいとうビームが当たる直前にサンダーがかみなりを放ち
れいとうビームを消滅させた

「サンダー！とつととやってしまえ」

そうボスが言うとサンダーは10まんボルトを放った

「ゲイト、かわせ」

ラルドはそうゲイトに指示を出したがゲイトはかわすことが出来な
かった

そしてその10まんボルトはゲイトに当たってしまった

「ゲイト！」

ゲイトは一気に戦闘不能になってしまった

レベルの差がありすぎたようだ

「ラルドもう1度聞く、我が【ダーク団】に入る気はないか」

ボスがそう聞いてきた

「まだだ、俺にはまだポケモンが残っている！」

ラルドは威勢よく行った

しかし、ラルドの手持ちにはゲイト以外誰もいない

「強がるなラルド、きさまの手元にワニノコしかいないのはわかっている」

「!!」

ラルドは驚いてしまった。完璧に隠し通していたはずなのに見抜かれていたからである

「ラルド、質問のといに答えろ」

ボスは力強くいった

「前と同じだ、お前らの仲間になるつもりはない」

ラルドはきっぱりとはいえなかった

「そうか、ならばきさまをこの場でしとめるだけだ」

ボスはそう言うとサンダーに指示をした

「サンダー！かみなり」

サンダーは一気にでんきをためた

そしてそのでんきがはなたれた

（くっ、ここまでか）

ラルドがそう思い目をつぶった瞬間、でんげきが当たった音が聞こえた

しかし、ラルドは何も受けていなかった

「？いったいなにが・・・」

ラルドが目をつくりあけると目の前にはイワークがいた

「なんだと！いったい誰だ」

ボスはそう叫んだ、無論ラルドのイワークではない

「イワーク！いわなだれだ」

そう言う声がラルドの後ろから聞こえた

ラルドが後ろを見ると、一人の少年がいた

イワークはいわなだれをサンダーにヒットさせた

「サンダー！」

サンダーは一気にダメージを受けたようだ

それをみるとボスはサンダーをボールに戻した

イワークのトレーナーがラルドの元にやってきた

「大丈夫か」

その少年はぼうしをかぶっていた（FR・LG男主人公イメージ）

「はい大丈夫です。それよりあなたは」

ラルドはそう聞いたが、その少年は

「名乗るほどの者でもないさ」

そう言つとその少年はこうつぶやいた

「くそつ、あいついつたいなにを目的にこんなことを」

「ちつ、きさまがきたか・・・ここはいつたい手を引くか」

そう言つとボスはマタドガスを出して

「マタドガス！くろいきりだ」

そう言つとマタドガスは、くろいきりを放つてボスはさっそうと逃げ去って行ったらしい

「あつ、まて！デスゴールド」

そついうと少年はボスこと【デスゴールド】をおつていった

「まってください」

ラルドはそついったが少年は待たなかった

「行つてしまつた・・・」

ラルドは一人取り残されていた

なぜか団員が来ないのをラルドは不思議に思つていた

「よし、このままクレセントシティに戻るつ」

ラルドはあの少年が出て行つたほうの出口に行つた

そしてその出口を出ると、一気にもりに突入することになった

「これからどこに行けば戻れるんだろう？」

そうラルドは思いながら歩いていった

一方そのころラルドのもとへ向かつているゴールドは

「へんだな、ラルドの発信機がだんだんこつちに向かつているぞ」

ラルドの持つている発信機を受信する機械が

ゴールドのほうに動いているのである

「でも、このまま行けばラルドと合流できるぞ」

そうゴールドが思ってから30分歩いた時だった

ゴールドはラルドを発見することが出来た

「ラルド！こっちだ」

ゴールドはラルドに聞こえるほどの声で言った

「ゴールド、助けに来てくれたのか」

ラルドはそういいながらゴールドのもとに向かってきた

「ラルド、いったいどうやって脱走してきたんだ」

ゴールドがそうきくと

「詳しい話はまちについたらで頼む、俺はいま話せる状態じゃないんだ」

それもそのはずである。ラルドは1時間以上歩き、バトルまで行ったのだから

「わかった、まちはこっちに歩けばつくぞ」

そうゴールドがラルドを案内した

そして歩き出して1時間後、やっとクレセントシティに戻ってきた

「はぁはぁ」

ラルドは息があらくなっていた

「ラルドがんばれもう少しだぞ」

ゴールドがそう励ます

その後ポケモンセンターにつき、ラルドは休憩をした

ラルドが完全に休憩をした後、ゴールドは話をきりだした

「ラルドお前どうやって脱走してきたんだ」

「あいつらのボスと戦うことになったんだ」

それで、牢の扉をあいつらのしたつぱが開けた瞬間に

牢をあけたしたつぱをゲイトで氷づけにしたんだ。

それで、外に逃げてきたんだ」

「大変だったんだな」

「ああ、しかもそれだけじゃなくて、外に出た時にボスとサンダーがいて

俺はサンダーと戦うことになったんだ。それでサンダーには負けたんだけど

俺を助けてくれた人がいて、その人とあいつらのボスは逃げていったんだ。

あいつらのボスをその人は追っていつてしまつて、名前も聞けなかったんだ。

それで、俺は1人になつて団員も来なかったから逃げてきたんだ」

「それで、何か収穫があつたのか」

「あいつらのチーム名が【ダーク団】でボスの名前が【デスゴールド】と言ふことしか」

「それだけか？」

「ああ、アジト内をうるちよろする余裕がなかったからな」

「そうか、まあいいや。お前疲れただろ、ゆっくり休めよ」

ゴールドがそう提案するとラルドは

「そうさしてもらつよ」

そう言つとラルドはベッドに入った

こうしてラルドの大変な1日が終わったのだった

第19話終了第20話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV76

クイック（オオスバメ）LV60

ゲイト（ワニノコ）LV47

ロック（コドラ）LV60

フライ（フライゴン）LV62

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV54

ヨルノズク（ヨルノズク）LV45

デンリュウ（デンリュウ）LV43

ヌオー（ヌオー）LV43

第19話 「一人の少年」(後書き)

あとがき

なんか1日でアジトの潜入捜査が終わってしまいました。本当は3日ぐらいいさせる予定だったんですけどね

第20話 「押し返せ！クレセントジム」前編」（前書き）

サンダーと戦ったラルドだったが、ゲイトがやられどうしようもなくなった時に

一人の少年が助けてくれた。そしてラルドは街に戻る途中でゴールドと再会した

そして、クレセントシティのポケモンセンターで今までの話をゴールドに話すのだった

第20話 「押し返せ！クレセントジム」前編

ラルドがアジト内の話をゴールドにした次の日

ラルドはめずらしく遅く起きた

「今何時だ」

そう思いながらラルドが時計を見ると、午前11時だった

「げっ、もうお昼か」

ラルドはベッドからおき、着替えなど身支度をしてからジョーイさんのところに行った

「おはようございます、ジョーイさん」

「おはようございます」

ジョーイさんはにっこりしながら言い返してきた

「俺のポケモンたちは回復していますか？あつ俺はラルドって言います」

一応名前を言わないと、誰なのかジョーイさんもわからないらしい
それだけポケモンセンターは1日に多く利用されているのだ

「はい、ちょっとまっていてください」

そう言うとジョーイさんは奥に入っていた

数分後ジョーイさんが戻ってきた

「はい、あなたのポケモンはみんな元気になっていますよ」

そっぴいながらボールをラルドに渡した

「ありがとうございます」

そう言うと、まずはトレーニングルームに向かった

トレーニングルームでトレーニングをすること1時間後

まだ何も口していないラルドは、はらぺこだった

「そろそろお腹が減ったな」

そう思ったのでラルドは食堂に向かった

12時ぴったりのため、少し込んでいたが待たされるほど込むではなかった

ラルドが席に座ってメニューを見てなにを食べようか迷っていると誰かが話しかけてきた

「おいラルド」

その声のほうを見るとゴールドがいた

ラルドが座っているのはカウンターテーブルだったのでゴールドは隣に座った

「ゴールドがいままでどこにいたんだ？」

そうラルドが聞いたとき、ゴールドは注文をしていた

「お前も早くきめろよ」

ゴールドがラルドをせかす

ラルドはメニューをざっとみて注文した

「俺はさっきまで街中にいたんだ」

ゴールドがラルドの注文をし終わったのを見てすぐに行った

「街に？何しにいったんだ」

「ただ道具を買いに行っただけだよ。最近道具を補給してなかったからな」

それよりお前こそどこに行っていたんだ？」

「俺？俺はポケモンたちを引き取りに行つて、トレーニングルームにいったんだ」

「トレーニングルームにいたのか」

「ところで、今日の午後にジムに行かないか？」

そう提案したのはラルドである

「いいぜ、そしたら何時に行く？」

「そうだな、2時ごろにしようか」

「わかった」

その会話が終わった時に料理が運ばれてきた

2人は料理を食べているとゴールドが話をきりだした

「なあラルド」

「何だ？」

ラルドはチャーハンを食べている

「エメルさんがどこに行ったか知っているか？」

「エメル？部屋にいないの」

ラルドは不思議に思いながら行った

「それが部屋に行っても誰もいないんだよ」

「じゃあポケモンを捕まえにいったんだよ」

「そうか、それならいいんだけど」

その後2人は食事を済ませ、2時にジム前と言うことでいったん別れた

そして2時。ラルドはクレセントジムの前にいた

クレセントジムは道場のような入り口をしていて、和風だった

2時5分、ゴールドはまだこない

「遅いなあいつ」

そう思いながらもまっているとようやくゴールドが来た

「わりわり」

ゴールドはあやまった

「まあいいや、それより早くジム戦をするぞ」

ラルドがそう言うところ入り口のとびらを開けた

「すいませーん、誰かいませんか」

ラルドは大声で言った

するとおくの扉から誰かが出てきた

「誰だ！」

奥から出てきたのは1人の老人だった

しかも柔道着をきていた

「すいません、クレセントジムに挑戦したいんですけど」

またしてもラルドが行った。ゴールドはまだ息が荒い

「いいじゃろう、わしがこのジムのジムリーダー、
「ジュウベイ」じゃ」

「それじゃあはじめましょう」

ラルドがそう言うのとジュウベイは

「待て、今審判を呼んでくる」

そう言うのとジュウベイはおくの部屋に戻っていった

しばらくすると、ジュウベイと1人の少女がでてきた

「エ、エメル！？お前ここで何やってんだ」

そうその少女とはエメルのことだった

しかし、服装は普段どおりである

「このジムは負けると審判をやらされるのよ。私がこないだ負けたから今は私がやっているの」

エメルは少し機嫌がななめだった

「わかったそれじゃあはじめてくれ」

そうラルドがいうとジュウベイがまた口をはさんだ

「まて、その後ろの少年が誰なんだ」

「俺っすか、俺もジムに挑戦しに来たんですけど」

「そうかそれならいつぺんにやるがよい。2回もやるのはわしにとつてつらすぎる」

「わかりました、俺もやらさしてもらいます」

こうして、ゲンダイのときと同じバトル形式になった

マール島のジムには戦い形式など特にないらしい

「それでは、挑戦者ラルド・ゴールドペアとクレセントジムリーダージュウベイのジム戦を行います」

使用ポケモンは2匹、ラルド・ゴールドペアは1人1匹です」

「よし、行くぞゴールド」

「おう」

「試合開始!!」

エメルの合図で3人はボールを投げた

「いくんだ、フライ！」

「行け！デンリュウ」

ラルドはフライ（フライゴン）ゴールドはデンリュウを出した
対するジユウベイは

「行くんじゃ！カイリキー、カポエラー」

カイリキーとカポエラーを出してきた

「先手必勝だ！フライ、りゅうのいぶき」

「俺もだ！デンリュウ10まんボルト」

フライのりゅうのいぶきはカイリキーへ

デンリュウの10万ボルトはカポエラーに飛んでいった

「カイリキー！カポエラー！あなをほるじゃ」

カイリキーとカポエラーはあなをほるでわざをかわした

「そのままあなをほる攻撃じゃ」

あなをほるはデンリュウに向かっている

「デンリュウジャンプするんだ」

デンリュウにあなをほるをかわさせようとするゴールドに対してラルドは

「フライ！じしんだ」

フライのじしんにより地中にいる2匹にダメージを与えた

「フライ、デンリュウをお前の上に乗せるんだ」

フライは言われたとおりにジャンプしているデンリュウを上へのせた

「くっ、2匹とも出てくるんじゃない」

あなをほるはこれで当たらなくなったとわかったジユウベイは2匹を地上に戻した

「フライ！りゅうのいぶき」

「デンリュウ、10万ボルト」

りゅうのいぶきと10万ボルトはカイリキーにヒットした

「カポエラー！ジャンプをするんじゃない」

カポエラーはジャンプをしてきて、フライの目の前に現れた

「カポエラー！まわしげりじゃ」

カポエラーのまわしげりはデンリュウに当たった

そしてデンリュウは下に落ちていく

「フライ、デンリュウを拾うんだ」

フライをデンリュウの元にいかそうとしたが

「カポエラー、トリプルキック」

カポエラーのトリプルキックがフライに当たった

「フライ！カポエラーを地上に落とすんだ！りゅうのいぶき」

「カポエラーみきりじゃ」

りゅうのいぶきは、みきりによってかわされた

そのときにデンリュウは地上に落ちた

「デンリュウ！大丈夫か」

デンリュウはそんなに高いところから落ちたわけではないので

そんなにダメージは受けていなかった

「カイリキー！クロスチョップ」

その落ちてきたばかりのデンリュウに

カイリキーのクロスチョップがおいうちをかけてきた

「フライ！カイリキーにはかいこうせんだ」

「カイリキー、カウンター」

はかいこうせんはカイリキーのカウンターによって

フライが大ダメージを受けてしまった

「フライ！」

フライは反動で動けず、地上にゆっくり降りてきた

「くそつ、こいつ強い」

クレセントジムリーダージュウベイ、こいつの実力は本物だった

第20話終了第21話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV76

クイック（オオスバメ）LV60

ゲイト（ワニノコ）LV50

ロック（コドラ）LV60

フライ（フライゴン）LV62

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マール島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴルドのトレーナーカード

マール島バッジ：2個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV54

ヨルノズク（ヨルノズク）LV45

デンリュウ（デンリュウ）LV43

ヌオー（ヌオー）LV43

第20話 「押し返せ！クレセントジム」前編」（後書き）

あとがき

ジム戦はじまりました。それにしても最近はなしの趣旨がわからなくなってきた気がするんですけど気のせいでしょうか？

第21話 「押し返せ！クレセントジム」後編」（前書き）

クレセントジムに挑戦しにいたラルドたちだったが、

クレセントジムリーダーのジュウベイのかくとうポケモンにやられ
そうになるのだった

第21話 「押し返せ！クレセントジム」後編」

フライとデンリュウはジュウベいのポケモンのわざにより

大ダメージを受けていた

「フライ！がんばれ、りゅうのいぶき」

フライ（フライゴン）は必死にりゅうのいぶきを放つが、カイリキ
ーにかわされた

そして上空にいたカポエラーが地上に降りてきた

「お前達の実力はそんなものか」

ジュウベイが言ってきた

「それではとどめをさそうかの

カイリキー！はかいこうせん、カポエラー！いわなだれ

2つのわざがフライとデンリュウを襲う

「フライ！はかいこうせん」

「デンリュウ！ねむる」

フライは、はかいこうせんにはかいこうせんをぶつけ

はかいこうせんを消滅させた

一方いかなだれは、デンリユウに当たったが

ねむるをしていたため、耐え切ることが出来た

「カポエラー！じしん」

しかし、デンリユウは苦手なじめんタイプのわざを受け
ねむる状態にもかかわらず、戦闘不能になってしまった

「デンリユウ戦闘不能」

エメルがそう言うところ、ゴールドはおとなしくデンリユウをボールに戻
した

「よくやったな、デンリユウ」

ゴールドがボールの中のデンリユウに言う

「まかせろゴールド、お前のかたき俺が取ってやる」

「たのんだぜ！ラルド」

しかし状況はラルドが不利である

「フライー！じしん」

フライはじしんをした

「カイリキー、カポエラージャンプするんじゃ」

2匹はじしんをかわすためジャンプする

「いまだ、フライ！カイリキーにりゅうのいぶき」

そのりゅうのいぶきはカイリキーにヒットした

そして追加効果でカイリキーはまひ状態になった

「くっ、まひになってしまったか。」

カポエラー！こうそくいどうから高速スピンじゃ」

カポエラーは高速いどうですばやくなり、そこにすばやい高速スピンを加えてきた

「フライ！上空に飛ぶんだ」

上空と言っても屋根があるため、そんなに高いところまで行くことは出来ない

「カポエラー、ジャンプして高速スピンを与えるんじゃ」

カポエラーはフライのところまでジャンプしてきた

「フライ！りゅうのいぶきで返り討ちにするんだ」

そのりゅうのいぶきはヒットした

「カポエラー！高速スピン」

カポエラーは回転を起こし、着陸時のダメージを減らした

「フライ！上空からはかいこうせんをはなつんだ！」

上空からのはかいこうせんはカイリキーに当たり、カイリキーを戦闘不能にさせた

そしてカポエラーは

「カポエラー！あなをほるで地中に隠れるんじゃ」

カポエラーは地中に隠れた

「フライ！じしんをお見舞いしてやれ」

フライはじしんを起こし地中内のカポエラーに大ダメージを与えた

そして地中から出てきたカポエラーは戦闘不能になっていた

「カイリキー・カポエラー戦闘不能

よって勝者、ラルド・ゴールドペア」

エメルのその言葉がラルド達の耳に入った

そしてフライがラルドのところに戻ってきた

「フライ、よくがんばったな」

ラルドはフライの頭をなでながら言った

「やったなラルド」

「ああ、これもフライのおかげだよ」

そういつているときに、ジユウベイとエメルがきた

「ほれ、これがこのジムを勝ち抜いた証のクレセントバッジじゃ。受け取れ」

ジユウベイが2人にバッジをわたした

「「ありがとうございます」」

2人が口をあわせて言った

「じゃあ2人ともポケモンセンターに戻ろっか」

エメルがそう言うつとジユウベイが

「待て、お前にもこいつをやる」

ジユウベイがエメルにもクレセントバッジを差し出した

「えっ！でも、わたしまだ・・・」

「いいからもって行け、一生懸命仕事をした礼じゃ」

「わかりました、ありがとうございます」

エメルはバッジを受け取った

「よしじゃあ戻ろう」

ラルドが声をかけクレセントジムをあとにした

ポケモンセンターに戻った後はポケモンをジョーイさんに預け

自分達の部屋で休んだ

そしてジム戦の次の日

「えっ！エメルは一緒に来ないの」

次の町に向かおうとしたラルドたちにエメルは

一緒に行かないと言う

「ええ、あなた達と一緒にいると気が重くなるからね」

「むっ、どういう意味だよ」

ラルドが言うと

「気にしない気にしない、それよりあなた達早く行きなさいよ

次の町までは長いだよ」

「わかった、また今度どこかで」

「ええ」

こうしてラルド達はクレセントシティを後にし次の町を目指すのだ
った

第21話終了第22話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV76

クイック（オオスバメ）LV60

ゲイト（ワニノコ）LV50

ロック（コドラ）LV60

フライ（フライゴン）LV64

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマール島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード

マール島バッジ：3個

手持ちポケモン

マグマラシ	(マグマラシ)	LV 54
ヨルノズク	(ヨルノズク)	LV 45
デンリュウ	(デンリュウ)	LV 44
ヌオー	(ヌオー)	LV 43

第21話 「押し返せ！クレセントジム」後編」（後書き）

あとがき

クレセントジム戦終了です。次の町までの経過がどうなるかが見所です

第22話 「強風の謎」(前書き)

クレセントジムを制覇したラルドたち。

エメルとは別れ、クレセントシティを後にし次の町を目指すのだった。

第22話 「強風の謎」

次の町「エディシティ」を目指すラルドたち

そしてクレセントシティを後にし五日後のことだった

その日の夜は月あかりが出ていた

「ラルド。いつになったらエディシティに着くんだよ」

ゴールドが寝袋の上に乗っかりながら聞く

ラルドはその時寝袋に入って寝る状態になっていた

「もう五日もたってるんだ。そろそろ着くよ」

「そうだといいいけどな」

ゴールドがそういつて寝袋に入ろうとしたそのときだった

「ガン！ ガン！」

変な音がどこからか聞こえる

最初は二人とも気にしていなかったが

その音は大きく寝れなかった

「おい。この音を止めてこい」

ゴールドがラルドに言う

「やだ。ゴールドが行ってきて…」

二人ともとめに行く気がない

結局、そのまま音は続き眠れなかったので

二人で行くことにした

「…ねみ」

二人とも眠そうにしながらその音が聞こえる方向に向かう

「ん？ あれじゃないか」

ゴールドが最初にその音の発生源を見つけた

そこは川の近くだった

「あれは…」

「どうした？ ラルド」

「いや。あの人をどこかで見たことがあるような…」

そう思いながらもそこにいた人の近くまでラルドたちはいく

「すみません」

ラルドが声をかける

「なんだい？」

その人がこちらを振り向いた

そのときは暗くて誰だかわからなかった

「俺たちはこの辺で寝てるのもう少し音を下げてくださいか？」

ゴールドがそういった

「わかりました。じゃあ、大きな音を出さないようにすればいいんですね」

「お願いします」

その時、雲で覆いかぶさっていた月が出現し

その人に月明かりが当たる…

そして、ラルドはその人の顔を見て思い出した

「あなたは、確か…」

そうラルドが言つとその少年が

「君はダーク団のアジトにいた子か」

「やっぱり。あのときの…」

「ラルド。この人と知り合いか？」

ゴールドのその質問に対してラルドではなくその人が答えた

「こないだ、ダーク団のアジトであつたんだ」

「あの時はありがとございました」

ラルドはお礼の言葉を言う

「なに。たいしたことじゃないよ。僕はあいつを追いかけているんだからね」

「あいつつてもしかして。デスゴールドですか」

ラルドが聞く

「そうさ。僕はあいつを追ってるんだ」

おっと、そろそろ時間だ。僕はこれで失礼するよ」

その人はピジョットを出した

「まってください！　せめて。せめて名前を教えてください」

「……………僕はレッド」

そう言うとレッドはどこかにいってしまった

そうエディシティの方角に

「あいつは一体何者なんだ？」

ゴールドがラルドに聞くと

「わからない。でも、アジトに潜入した時に助けられてくれた人だ」

「あいつとは何か長い付き合いになりそうな気がするな……」

「そうだな」

ラルドたちは元の場所に帰り、この日はぐっすりと眠るのだった

そして翌日

二人はエディシティに今日中に到着するため

朝早くからおきエディシティに向かって歩いていた

そして、その途中

とある、木をラルドが発見した

「なあ。あの木、やたらと傷ついてないか？」

「どれどれ」

ゴールドはそう言うと木に近づいていった

「本当だ。これはいつたい？」

その木にはなにか強い風により削られた傷があった

しかし、昨日と今日では強い風など吹いていなかったため

二人は不思議に思っていた

しかし、その木に付き合っている暇はなかった

とつとエディシティに行きたかった二人は

その木をほっておきどんどんエディシティの方向に歩いていった

そして、数時間後

ついにエディシティにたどり着いた

「やっとなつたな」

「うん。早く、ポケモンセンターに行くか」

ラルドたちはエディシティにつくと、すぐにポケモンセンターに向かった

もちろん、今日の寝床とポケモンの回復のためである

ポケモンセンターにつくと二人はポケモンを預け、部屋の鍵を借りた

そして、その日は疲れたのか。すぐにベッドに入り眠り始めた

その日の夜

「がたがた」

突然、窓が揺れ音が鳴った

「…？　なんだ…？」

ラルドは窓をみた

ポケモンセンターのベッドは二段ベッドで

顔を上げ前を見るだけで窓がみえる場所にいた

「やたらと風が強いな…」

「ガタガタガタ」

まだ、窓は揺れ動いている

それは、風が強いかららしい

それがわかったラルドはもう一度ベッドに入ったが

その音がうるさすぎて眠れなかった

そして、ラルドはいっぱい水を飲み

ジョーイさんのいるであろう、フロントロビーにいった

「なんだ！ コレ…！」

フロントロビーにはガラスがちりばまれていた

どうやら、風の強さでガラスが割れてしまったらしい

「パリン…！」

すると、ガラスが割れるような音がした

すぐさま、ラルドはラルドたちの部屋に戻った

自分の部屋のガラスが割れたのか確認するために

ラルドが部屋に戻るとやはりガラスが割れていた

そして、そこで見てしまった。この風の原因を

「お前らか…」

ラルドはドアの前に立ちながらいった

「ん？ きさまは確かラルドとかいったな」

「なんのようだ！ ダーク団！」

そうそこにいたのはダーク団の団員だった

「それはこいつをいただくためだ」

そう言うとダーク団員はオオスバメに乗り移った

「ゴールド!？」

そう、オオスバメは二匹おり一匹にはゴールドが捕まっていた

ゴールドはどうやら麻酔銃でさらに眠らされているらしい

「じゃあな」

「まで!　ゴールドをどうするつもりだ」

しかし、ラルドのその言葉は届かずダーク団員は来た道とは逆の

ヨジノギタウンの方角へ飛んでいった

「くそ!」

ラルドは壁に向かって手をたたいた

ゴールドが連れ去られたことが悔しいのだろう

次の日の朝

ラルドはジョーイさんにガラスが割れた音がしたか聞いた

しかし、ジョーイさんの記憶にはその音が聞こえたと言ったものが残ってなかった

それを聞いたラルドは『ジョーイさんも麻酔銃を打たれたのだろっ』
と思った

そして、ゴールドのポケモンをかえしてもらい

ゴールドのバッグに入れた

そして、ゴールドのバッグを持ちながらダーク団員が向かった

ヨジノギタウンを目指すのだった

第22話終了第23話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV78

クイック（オオスバメ）LV63

ゲイト（ワニノコ）LV53

ロック（コドラ）LV62

フライ（フライゴン）LV65

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV75
グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード
マーレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV57
ヨルノズク（ヨルノズク）LV50
デンリュウ（デンリュウ）LV48
ヌオー（ヌオー）LV45

第22話 「強風の謎」(後書き)

あとがき

ゴールド連れ去られ事件ばっばつです。ゴールドが連れ去られた理由に注目です

第23話 「救出前夜」(前書き)

以前、ダーク団アジトでラルドが助けられた少年とあったラルドたち

その後、エディシティに到着するが、夜にダーク団にゴールドが捕まえられてしまい、ヨジノギタウンに向かいだすのだった

第23話 「救出前夜」

ラルドはエディシティとヨジノギタウンをつなぐ道を歩いていた

その道は回りに森林があり、エディシティに来る前の道のような場所だった

しかし、山道だったためラルドは相当疲れていた

「……」

ラルドはその間まったくしゃべらなかった。弱音もはかなかった

どうやら、ゴールドが連れて行かれどんな目にあっているかを考えれば弱音をはいている暇はないと思ったのだろう

そして、山頂

ここから階段になっている坂道を下れば、目的地ヨジノギタウンに到着する

「はあ、少し休憩してから行くか……」

ラルドは休憩するために山頂にある小屋の中に入った

「いらつしやい」

その小屋の中には店員一人。客一人とあまりいなかった。そして何より、静かだった

店内を見渡してから近くのイスに座った。隣には、同年齢程度の少年がいた

「……」

その間、小屋の中は静けさを保っていた

なんとなく息苦しく感じたラルドは店員に聞いた

「すみません。ここから、ヨジノギタウンまではどれくらいかかりますか？」

「だいたい三十分程度でつきますよ」

「そうですか。ありがとうございました」

そういつてラルドが小屋を出ようとしたときに店員が

「待ってください。いま、ヨジノギタウンでは事件が多発しているそうです。気をつけてください」

「わかりました。ご丁寧にありがとうございます」

ラルドは今度こそ小屋を出てヨジノギタウンに向かった

一方、そのころ連れ去られたゴールドはというと

「出せ！ 俺を閉じ込めてなにしようっていうんだ！」

そう、ゴールドは薄暗い牢の中に閉じ込められていた

見張りはだいたい十人ほどおり、相当厳重に警備がされているようだ

ゴールドは叫ぶのをやめ、牢の中にある古びたベッドに飛び乗った

（いったい俺を閉じ込めてなにをしようって言うんだ？ こんなところ、マグマラシがいたらすぐに抜け出せるのに…）

ゴールドはそんなことを考えながら牢のベッドに乗っていた

そう考えている時に誰かが牢の前にやってきた

「おい！ こっちにきやがれ！」

鎧をきた男がゴールドのいる牢の鍵を開け、こっちにくるように命じた

「へいへい」

ゴールドは牢の中から出た。鎧の男に縄で縛られ太陽の光が当たる場所に出てきた

そこはまるで城の中のような場所だった。いや、もしかしたら本当に城の中なのかもしれないとゴールドは思った。どっちにせよ、詳しいことはわからなかった

そしてしばらく歩くと、ある一室の中に入れられた

「ここは？」

ゴールドが小さな声で言った。すると鎧の男が

「ここで待っている！」

そう言うと鎧の男は外に出て行ってしまった。もちろん、カギをかけていった

「……なんだっていうんだ？」

その部屋はそんなに広くはなかったが、とてもきれいな部屋だった。ゴールドは近くにあったイスに座り、しばらく待っていた。そして、数分後。部屋の中に誰かが入ってきた

「君がゴールド君か……」

その入ってきた男は年寄りだった

「俺をこんなところに連れてきてどうするつもりだ？」

「お前、あのラルドとか言う男の連れだな？」

「そうだが。それがなんだっていうんだ？」

「そうか。おい！ あれをもってこい！」

ゴールドの回答に納得したのか後ろにいた別の男になにかを持ってくるように頼んだ

そして、その男が持ってきたのはただの水だった

「こいつを飲むとよい。これからじっくりと話しをしていただく。その間にノドが乾くだろう。それにさっきまで水を飲んでいなかったからノドがかわいているだろうしな」

確かに昨日の夜に連れ去られ、いまはもう昼である。しかも、起きたのが朝だったので、ゴールドはノドが乾いていた

そう思っていたゴールドは渡された水を手に取り一気にのみほした

「ふっ……」

老人の男がつぶやいた

「うっ！」

ゴールドは持っていた水の入っていたビンを落とし苦しそうになった

「い、いったいなにを……」

ゴールドが小さな声で言う

「お前がのんだ水は我がダーク団が開発したポケモンをダークポケモンにするための薬を入れたもの。お前が人体にこの薬を入れるのはお前が一人目だ」

老人の男はそう説明したがゴールドは聞いていなかった

胸に激しい痛み。頭には強力な頭痛。そこらじゅうの体に異常が起

こっついた

そして、水をのんでから三分後。ゴールドはその場に倒れてしまった
それを見た水を持ってきた男はゴールドの脈を確認した

「デスゴールド様。脈はあります」

「そうか。なら、さっきまで閉じ込めていた牢に入れておくんだ。
結果を待つ」

「わかりました」

そう言うとデスゴールドといわれた老人はその部屋を後にした

そして、ゴールドは牢の中に再度閉じ込められるのだった……

場所はかわりヨジノギタウン。ラルドはついにヨジノギタウンに到着した

「ここがヨジノギタウンか……」

その町はまるで西部劇に出てきそうな町並みだった

この日はすでに日が暮れかけていたのでポケモンセンターを探して
休むことにした

そして、ポケモンセンターを発見しジョーイさんからカギを受け取り
振り分けられた部屋に入った

部屋に入るとラルドは荷物をおき一階フロントロビーに言った

「すみません。こいつをどっかで見ませんでしたか？」

フロントロビーにきたラルドはゴールドの写真を片手に聞き込みを始めた

ゴールドの写真は、ゴールドのリュックに入っていたトレーナーカードを使った

しかし、聞いた人全員に「知らない」と言われ、全然手がかりがつかめなかった

そして、ロビーにいる全員の人に聞き終わっても一向に手がかりがつかめず、部屋に戻ろうとしたときだった

ポケモンセンターに誰かが入ってきた音がした

ラルドはその人にも聞いてみようと思い入り口のほうを振り向いた
すると、そこにいたのはあのレッドだった

「あれ？ レッドさんじゃないですか？」

ポケモンセンターに入ってきたばかりのレッドにラルドが言った

「君はこないだの。ここでなにをしてるんだい？」

「こいつを見ませんでしたか？」

ラルドはレッドにゴールドの写真を見せた

「この子はこないだとなり にいた子だね。でも、残念ながら見てないな」

「そうですか。わかりました、ありがとうございます」

そういつてラルドが二階に上がろうとした時にレッドが

「ちょっと待って！ 君、こっちに来て」

二階に行こうとしたラルドを引き止めた

「ジョーイさん。ポケモンたちをよろしくお願いします」

「わかりました。お部屋はどうしますか？」

「彼と一緒に部屋にする」

「わかりました」

そう言つとレッドはラルドのところに走つてきた

「なんですか？ レッドさん」

「いや、ちょっと君の部屋に泊めてもらつと思つてね」

「俺の部屋に？ 空き部屋はないんですか？」

「詳しいことは君の部屋で。さあ、案内してくれないか」

「わかりました」

ラルドはレッドを自分の部屋に連れて行った

そして、二人とも部屋に入ると

「で、なんですか？ 俺の部屋に泊まるのは？」

「さっきの少年のことで話があるんだ」

「ゴールドを見たんですか！？」

ラルドは声を張り上げた

「そんな大きな声じゃなくても聞こえるよ。彼はゴールドくんって言うんだね？」

「はい」

「ちなみに、君はなんていうんだい？」

「あれ、自己紹介しませんでしたっけ？ 俺はラルドって言います」

「ラルドくんか。まあ、よろしく頼むよ。で、ゴールドくんのことだけど詳しく教えてくれるかな？」

「わかりました。ゴールドは昨晚エディシティのポケモンセンターでダーク団の男に連れて行かれたんです。それで、ヨジノギタウンの方向に飛んで言ったのでこっちにいるだろうと思ってこっちの町

に来ました」

「ダーク団にさらわれたのか……そして、こっちにきたならばゴールドくんはあそこにいるな……」

「あそこ?」

「ああ。この町の校外にダーク団のアジトがあるんだ。もちろん支部だけだね。たぶん、そこにいると思う」

「ダーク団のアジト……よしならば」

そう言うとラルドは自分のリュックを持った

「ちょっと待って。ラルドくんはどこに行こうって言っただ?」

「もちろん、そのダーク団のアジトです。ゴールドを助けるために」

「待って。やつらのアジトの警備は厳重だ。侵入することはできない」

「やってみなければわからないでしょ」

ラルドが反発する

「いや、無理だ。僕がなんとか潜入しようとしたが警備が厳重だった。なにか作戦を考えなければ」

ラルドはレッドの目を見た。そのレッドの目はとても真剣な目だった

それを見たラルドはリュックを置いた

「わかりました。でも、それじゃいったいどうすれば……」

「僕に考えはある。だが、コレにはラルドくんの手伝いが必要だ」

「俺の手伝い？ ゴールドを助けられるならできる限りなんでもします！」

その言葉を聞いたレッドは

「わかった。じゃあ、まずは僕がこの部屋に宿泊することを認めてくれるね？」

「はい」

「よし、じゃあ、ジョーイさんについてくるから少し待っていてくれ」

そう言うとレッドは部屋を出て行った

そして、この夜にレッドとラルドはゴールドを救出する作戦を実行する準備を進めるのだった

第23話終了第24話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マールレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV78

クイック（オオスバメ）LV63

ゲイト（ワニノコ）LV53

ロック（コドラ）LV62

フライ（フライゴン）LV65

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マールレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード

マールレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV57

ヨルノズク（ヨルノズク）LV50

デンリュウ（デンリュウ）LV48

ヌオー（ヌオー）LV45

第23話 「救出前夜」(後書き)

あとがき

レッド登場です。言っておきますが、レッドは最初からヨジノギタウンに来ていたんですよ。ヨジノギタウンはエディシティから見てもラルドたちが来たほうから逆にあります。そして、レッドはエディシティの方向に飛んでいったのでヨジノギタウンに飛んで言ったとも考えられるんですよわかりました？

第24話 「地底での襲来」(前書き)

ゴールドを助けるためにヨジノギタウンに来たラルド。ヨジノギタウンのポケモンセンターでレッドと会いゴールドを助ける作戦を考えるのであった

第24話 「地底での襲来」

曇り空の朝。早めに起床したラルドは洗面所に行き顔をあらった

そして、昨晚レッドと一緒に考えた作戦を実行するための準備をしていた

レッドはまだ寝ていたため、おこさないようにそつと物事をすましていた

そして、ラルドはフロントロビーに行き、ジョーイさんに預けていたポケモンたちを返してもらった

その後、部屋に戻ったらレッドはおきていた

「おはようございます」

ラルドがレッドにいった

「おはよう。おきるの早いんだね？ 昨日、おそくに寝たからまだ寝ていると思ったよ」

「なんだか寝付けなくて」

ラルドはそう言うボールをゴールドのバッグの中に入れた。もちろん、ゴールドのポケモンたちである。自分のボールはすでに腰に巻いているホルダーにつけていた

「いまからでも寝ていおいたほうがいい。眠くては戦えないからね」

「大丈夫です。いまは全然眠気はありませんから」

「そうか。じゃあ、僕もボールをとってくるね」

そう言うと、レッドは部屋を出た

レッドが戻ってきたら二人は早い朝食を取り、ダーク団のアジトに向かう準備を済まし、アジトに向かった

その途中。ダーク団の団員だと思われる者がいた

「ふせて！」

さいわい、あたりは草木がおい茂っており隠れる場所はたくさんあった

「どうやら、見張りのようだな」

「ここで、倒しますか？」

「それは危険だ。ここはうまく見張りの目を盗んでアジト内に潜入しよう」

そう言うと、二人は草木にうまく隠れながらアジトに向かった

そして、隠れながら歩いて数分後

やたらとダーク団員がいる場所にたどり着いた

そこにはなにやら門らしきものがあり、それをまもっているようにも見えた

「あれですか？」

「そうだ。あれがダーク団のアジトの入り口に門だ」

「じゃあ、昨日考えた作戦で潜入しましょう」

「そうだな。早いほうがいいからな。では、もう少し団員が少ないところに行こう」

レッドがそう言うのとアジトの入り口がある場所から少しはなれた場所に向かった

そして、団員がいないところにたどり着くと、ラルドのラグ（ラグラージ）を出し、あなをほりはじめた

ラルドたちはそのあなに入り、アジト内に潜入しようと言うのだ

そして、あなに入りどんどん掘り進めて行く中。レッドは目になにやらスコープをつけて歩いていた

「ちょっと待って。ラグはそのままあなをほりすすめていてくれ。ラルドくんはちょっとこっちに」

レッドがそう言うのとラグはそのまま掘り進め、ラルドを自分のところまでこさせた

「どうしたんですか？」

「赤外線が引いてあるみたいだ」

「赤外線？」

「そうだ。その赤外線にふれたら警報機がなりやつらにおそわれるというものだよ。もっとも、ポケモンにたいしては発しないものようだけだね」

「じゃあ、ここは通れないじゃないですか。どうしますか、レッドさん？」

「どうやら赤外線は三本ほどしか設置していないようだ。なら、僕に策がある。行け！ フーデイン」

レッドはそういつとフーデインを出した

「僕のフーデインのレポートでこの赤外線エリアを突破する。フーデイン、ラルドくんをラグラージのところまで運ぶんだ」

レッドがフーデインにそう指示すると、ラルドがラグのところにてレポートされた

警報機もなっていない。どうやら、大丈夫だったようだ

「よし、フーデイン。僕もあっちに運んでくれ」

そついつとレッドもラルドのところにやってきた

「フーデイン、そのままこっちにくるんだ」

レッドはフリーディンを自分のところまで歩かせてからボールに戻した

「よし。じゃあ、行こう」

こうしてラルドたちは地下を歩き進んだ

その途中

「ねえ、レッドさん。どうして、あの時フリーディンをすぐにボールに戻さなかったんですか？」

「さっきのことだね。あれは、ボールに戻す時の光で赤外線センサーにあたるといけないと思ったからだよ。もしかしたら、センサーに感知されるかもしれないからね」

ラルドはその言葉を聞き驚いた。まさか、さっきの行動がそこまで計算していたのだから。その時ラルドは思った。この人はただものではないと。いったい、どんな人なんだろうかと――と

そして、歩くこと数分後。一つの光がラルドたちの目に輝いた

そこには地下とは思えない白い城が建っていた

その地下には照明がついていて、城がかがやいていた

「ここがダーク団のアジトだ」

「ここが……。まるで、地底人の城みたいだ」

「地下に存在させて地上にいる人たちにばれないようにしているんだろうね」

「いったい、なにをしようって言うんだ、ダーク団は」

「ともかく、早くゴールドくんを助けに行こう」

レッドはそう言うのと城の監視員がいるかどうかを確認した。しかし、監視員は誰もいなかった。どうやら、地上の警備と先ほどの赤外線センサーがあるから大丈夫だと思っているのだろう

そう考えたレッドとラルドは城の後ろにまわり、フーディンのテレポートで城の敷地内に入った。そして、城の裏口から城内に潜入した

城内は外の白い城とは対照的にまっかに染まっていた

ラルドたちは城内にいますと思われる監視員を見ながら奥に進んでいったが、監視員らしき人がまったくいなかった

「おかしいな」

「なにがですか？ レッドさん」

「いくら外の警備が厳重だからといって城内がこんなに警備に無関心なはずがない。なにかあるのかもしれない」

そうレッドがいった瞬間だった

とつぜん、近くにあった階段の下からひめいが聞こえたのである

「なんだ！」

「いってみよう！　ラルドくん」

ラルドたちはそのひめいが聞こえた先に向かった。すると、そこにはダーク団の制服を着ているものがたくさん倒れていた

そこは真っ暗であたり一面に牢がある。そして、その奥に一人たっているものがいた

「誰だ！　お前！」

ラルドが大きな声でいった

「デンリユウ！　十万ボルト！」

すると十万ボルトがラルドの足元に当たった

「な、なんだ！？」

「ラルドくん、あいつを外に出すんだ！　ここからではどこからこうげきがとんでくるかわからない」

「わかりました」

そう言うレッドとラルドはもと来た道に戻った

戻っているとこうげきをしてきたものが追いかけてきた

そして、ラルドたちが潜入した敷地に戻ってきた。ここから先はフ

ーデインの力がないと戻ることができない

「ここまで来るだろうか……」

ラルドが考えた

そのとき、城から誰かが出てきた

顔は青ざめており、服もところどころ破けている。そして、肌の色までもが青ざめていた

その人はラルドとレッドが共に知っている人物であった

「いったい、どうしたんだ！ ゴールド！」

そう、それこそまぎれもなくラルドとレッドが探していた人間。ゴールドであった

しかし、ゴールドはラルドの言葉になにも返事をしなかった

「どうやら彼は正気ではないようだ。正気にもどす必要がある」

「正気でない？」

「そうだ。なにかダーク団によってやられたみたいだ」

「おい！ ゴールド、どうしたっていうんだ」

ラルドがゴールドに呼びかけたがゴールドには返事がない

「ラルドくん。僕は城内から彼がどうなったかを探り解決策を探してくる。君は彼を安静な状態にしておいてくれないか？」

「わかりました。ゴールドは俺がなんとかしておきます」

ラルドの言葉を聞いたレッドはゴールドに気づかれないように城内に入ってしまった

「俺のじゃまをするやつはここでぶつたおす！！！」

ゴールドが大きな声で言った

ラルドはゴールドがレッドに気がついたのかと思ったが、デンリユウでラルドをこうげきしてきたところを見るとそうでないことがわかった

「なあ、ゴールド。いったいどうしたっていうんだよ。なあ」

ラルドは必死にゴールドがどうなったかを聞きだそうとするがゴールドに返事はない

その間にもゴールドはこうげきを仕掛けてくる

「くそ。説得できる状態じゃないようだな。ならば……」

ラルドはホルダーのボールに手をかけた

いったい、ゴールドはどうなってしまうのだろうか……

第24話終了第25話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マール島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV78

クイック（オオスバメ）LV63

ゲイト（ワニノコ）LV53

ロック（コドラ）LV62

フライ（フライゴン）LV65

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個^{ホウエン}マール島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

ゴールドのトレーナーカード

バッジ：マール島バッジ：3個

手持ちポケモン

マグマラシ（マグマラシ）LV57

ヨルノズク（ヨルノズク）LV50

デンリュウ（デンリュウ）LV48

ヌオー（ヌオー）LV45

第25話 「ゴルドの救出」(前書き)

地底にあるダーク団のアジトにたどりついたラルドとレッド。しかし、そこでかわっていたゴルドと会いラルドはゴルドを助けるために戦う決意をするのだった

第25話 「ゴルドの救出」

「行け！ フライ」

ラルドはフライ（フライゴン）を出した。ゴルドが出しているデンリュウと相性がいいから出したのであろう

「俺とやるっていうか！！ ならばきさまをたおしてやる！ デンリュウ！ 十万ボルト」

ゴルドはデンリュウに十万ボルトを命じた。しかし、当然ながらもフライにでんきわざは効かない

「どうした！ そんな攻撃はフライにはきかない！ フライ！ じんだ」

「デンリュウ！ まもる」

デンリュウはまもるでじしんから身をまもった

「デンリュウ！ はかいこうせん」

「フライ！ はかいこうせんで対抗するんだ」

二つのはかいこうせんがぶつかり合った。しかし、フライのはかいこうせんのほうがパワーが高かったためフライのはかいこうせんがデンリュウに当たった

「ちっ！ デンリュウ！ のしかかりだ」

ゴールドはデンリユウに指示を出したが、デンリユウはのしかりをしない。それもそのはず、はかいこうせんの次は攻撃ができないのだ

どうやら、ゴールドはバトルに対する知力がなくなってしまうているらしい

「どうしたゴールド！ フライ！　じしんでデンリユウを倒すんだ！」

フライははかいこうせんの反動からたちなおりじしんを発動した

「かわせ！　デンリユウ！」

しかし、その指示がすこし遅かったためデンリユウはじしんをかわすことができなかった

そしてデンリユウは一気に戦闘不能になってしまった

「どうだ！」

ラルドがそういった

「ちっ。デンリユウもどれ」

ゴールドはデンリユウを戻した

「どうした、お前の力はそんなじゃないはずだ」

「うるせえ！ やれ！ ヨルノズク」

ゴールドはヨルノズクを出してきた

「まだ、やるっていうのか。ならば受けて立つぜ！ いくぞフライ！」

ラルドとゴールドは第二戦目を開始するのだった

一方、ゴールドの救出法を探し出しにいったレッドは城内をめぐっていた。もちろん、ゴールドの救出法を探し出すために

しかし、城内は広くなかなか救出法を発見することができなかった
探すこと数分後。なにやら怪しげな研究室をレッドは発見した

「ここか……」

レッドは研究室に入った。そして、レッドは室内にゴールドの救出法がないかどうかを調べていると、机の引き出しの中に一つのノートがあった

レッドがそれを見ると中にはとんでもないことが書かれていた

「これは、ダークポケモンの製造過程図か。なになに」

レッドがそれを読んでいくとダークポケモンを元に戻す方法が記載されていた

「『ダークポケモンはリライブというものを行われていくと普通の

ポケモンに戻ってしまう。しかし、普通のポケモンに戻すには特別な儀式が必要である。その儀式はオーレ地方にある場所で行われな
いといけない。そのため、マーレ島でダークポケモンを繁殖させれば我々がマーレ島を支配できるだろう』か」

レッドはそれを閉じ、ラルドのところに戻った。その間、レッドは思った

（ポケモンがこういう過程でなるならば人間もこういう過程でなおすことができるだろう）

そのころ、ラルドとゴールドは

「行け、フライ！　じしんだ」

「マグマラシ！　かえんほうしゃでじしんをはなたさせるな！」

フライがじしんを起こす前にかえんほうしゃがフライにあたりじしんを起こすことができなかった

「くっ、フライ！　りゅうのいぶき―」

「マグマラシ！　かえんほうしゃ！」

りゅうのいぶきとかえんほうしゃがぶつかり合い、破裂した

あたりには煙がまう

「マグマラシ！　かえんほうしゃ！」

その煙の中でかえんほうしゃがフライに当たった

「フライ！　がんばれ！　すなおこしで煙をはらうんだ」

フライはすなおこしをおこし煙を払った。そして、煙が晴れた

ラルドがゴールドをふつと見ると、ゴールドの息は荒々しかった

どうやら、相当疲れているのだろう

「くっ、ゴールドのやつ自分の体を制御できないのか」

「ラルドくん！」

ラルドがそう思ったときにレッドの声が聞こえた

「レッドさん！」

ラルドがレッドを見ていった。そのとき

「マグマラシ！　かえんほうしゃ！」

ゴールドがマグマラシにかえんほうしゃを指示した

そのかえんほうしゃはラルドに向かって飛んでくる

「しまった！　フライ！　かえんほうしゃにはかいこうせんで吹き飛ばせ」

フライは必死ではかいこうせんをかえんほうしゃにあてた。そして、

その衝撃により爆風がおこった

「くっ、うわっ」

爆風が起こったのはラルドの近くで起きたためラルドのダメージが大きかった

「ラルドくん！」

爆風が晴れるとラルドが倒れていた。それをみたレッドはラルドに話しかけた

「大丈夫か？ ラルドくん」

「は……はい。なんとか……」

「よかった。ゴールドくんは？」

レッドはそういつてゴールドを見るとゴールドは倒れていた

「ゴールドくん！」

「ゴールド！」

レッドはゴールドのところに向かった。ラルドも向かおうとしたがダメージが大きいくことができなかった

それをみたレッドはゴールドに声をかけてからラルドのところに戻ってきた

「だめだ、ゴールドくんは相当ダメージを受けている。これは医者にみせる必要があるな」

「なんだって！　じゃあ、早く医者に診てもらわないと」

「そうだな。いったん、このアジトから脱出しよう。出て来い、フリーデイン」

レッドはフリーデインを出した

「フリーデイン、ラルドくんとゴールドくんをサイコネシスで運ぶんだ」

レッドがそう指示するとラルドとゴールドが宙に浮かんだ

「よし、そのまま僕についてくるんだ」

こうしてラルドたちのダーク団のアジト潜入とゴールドの救出は幕を閉じるのだった

そして、ラルドたちはヨジノギタウンに戻るのだった

ヨジノギタウンについてから医者にラルドとゴールドを診てもらった

そして、数日後。ラルドとゴールドは同じ病室にいた。そして、レッドも

ラルドはすぐに直ったためすでに歩けるが、ゴールドはまだ意識がなかった

「ラルドくん。ゴールドくんは僕が助けよう」

「助ける方法がわかったんですか!？」

「ああ。ラルドくんがベッドの上にいたときに説明したとおりだ。ゴールドくんをリライブと言うものにつけ、そして儀式を行う。そうすれば彼は元に戻るだろう」

「でも、その方法はダークポケモンを普通のポケモンにする方法ですよね？ それで大丈夫なんですか？」

「わからない。しかし、それしかいまは手がかりがないんだ。それにつけるしかないよ」

「そうですね……。そういえば、ダーク団のアジトにまだ手がかりが残っているんじゃないですか？」

「そうだろうと思って僕も行ってみたよ。そしたら、城ごとなくなっていた」

「なんだって!？ いったい、あんなでかい城をどうやって!？」

「わからない。とにかく、僕はゴールドくんを連れてオーレ地方に向かう。そこで、ラルドくんに頼みたいことがある」

「なんですか？」

「僕のかわりにダーク団を消滅させて欲しいんだ。僕の役割を君にまわしたい。そのかわり、ゴールドくんは僕が責任を持って助ける」

「わかりました、俺がダーク団を倒してみせます」

「頼んだよ。それじゃ、僕はオーレ地方に向かう」

「ゴールドをお願いします」

こうして、レッドはマーレ島を後にしてオーレ地方に向かうのだった

そして、ラルドもゴールドの回復を祈りながらダーク団を倒す決意を決めるのだった

第25話終了第二十六話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV78

クイック（オオスバメ）LV63

ゲイト（ワニノコ）LV53

ロック（コドラ）LV62

フライ（フライゴン）LV67

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ホウエンマーレ島バッジ：2個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV75

グラ（トドゼルガ）LV70

第26話 「黒幕の影」（前書き）

ゴールドを救出することに成功したラルドたちだったが、ゴールドはオーレ地方というところに行くことになった。また、レッドもオーレ地方に行くことになった

そして、ラルドはレッドにきせられた役割のダーク団を壊滅させるということを引き受けるのだった

第26話 「黒幕の影」

ゴールドたちがオーレ地方に向かった次の日

ラルドは病院を退院しエディシティに戻ることにした

「ダーク団を消滅させるって言ったって特にどこにいたかっていうあてもないし」

レッドから与えられた役割をこなすのにはまず、ダーク団がどこにいるかを調べる必要があった

しかし、ラルドにそこまでの情報収集力はないため手がかりを持っていなかった

「ま、ジム戦でもしながら探すことにするか。どうせ、エディシティに戻ってるんだしな」

ラルドはそう決めることにした。探す当てがないのならいろんな街に行き情報収集するのが一番だと思ったのだらう

エディシティにはジムがある。しかし、エディシティについた日の夜にゴールドがつれさらわれたためまだジム戦はしていないのである

そして、ヨジノギタウンを出発した日のうちにエディシティに到着をした

だが、その日はすでに暗くなってしまったためポケモンセンターで休むことにしたのである

ラルドはいつも通り部屋に荷物をおくとポケモンたちをジョーイさんに預け、部屋にベッドの上になっところがあった

「そうだ。エメルはどうしてるんだろう」

ふっとそう思ったゴールドはポケギアを手からはずし、手でもってポケギアを操作した

電話をかけてから五秒後ぐらいにエメルが電話に出た

「なに、ラルド？」

ポケギアは誰からの電話かが表示されるため、誰が電話をしてきたかがすぐわかる

「久しぶりだな、エメル」

「久しぶりだけどいったいなんのよう？」

「お前、いまだこの街にいるんだ？」

「私は、ステイルシティに来てるわ。明日、五つ目のバッジを手に入れるつもりよ」

「じゃあ、エディシティのバッジはもう取ったんだ」

「そうよ。そういうあなたはどしたの？」

「俺はエディシティのバッジを明日取りに行くつもりさ」

「そう。まあ、せいぜいがんばって」

「ああ。それと、お前に報告したいことがあるんだ」

「報告したいこと？」

「ああ。ゴールドを知っていると思うが、あいつはオーレ地方というところに向かってこの地方から姿を消した」

「オーレ地方？ いったい、なんでそんなところに」

「ゴールドがダークポケモンみたいな行動を取ったのさ。ダーク団の手によってね」

「なんですって！？　じゃあ、ゴールドはダークポケモンにされたって言うの！？」

「正確にはダーク人間だな。オーレ地方には俺の知り合いが行ってくれている」

「そう。ラルドも気をつけなさいよ」

「ああ」

「それじゃ私はこれで。じゃあね」

エメルはそういうと電話を切った

ラルドも電話を切りポケギアを腕につけた

「もう、寝るとするか」

ラルドは電話をきるとベッドの中に入り眠りにつくのだった

翌朝

ラルドはいつも通りに起床し朝食をとって、ポケモンたちの練習を始めた

昼まで練習をし、昼食を取った後、エディシティに向かった

こうして、ラルドのジム戦が始まろうとしていた……

一方エメルはというと

午前中にステイルジム戦を終え昼食を取っていた

この日、エメルはステイルシティで一日を過ごすことに決めていたためポケモンセンター内にいた

昼食後はポケモンセンターにある練習場で練習をしていた

練習場で練習をして数時間がたったころ。エメルはロビーに行つて休んでいたときだった

ふと、テレビでやってたニュースを見ると、このようなニュースをやっていた

『現在、各地に謎のポケモンが出現をしています。そのポケモンは

アーボックやサンドパン、トドグラーなど普通のポケモンなのですが、全部のポケモン共通ではじめてみる攻撃で人間を襲うというものです。現在、警察でこのポケモンたちの捕獲作業をしています」

「もしかして、謎のポケモンっていうのはダークポケモン……？」

「そうだよ」

エメルがつぶやくと、エメルの後ろから声が聞こえた。それを聞き取ったエメルが後ろを向くとそこには一人の少年がいた

十一歳程度の少年で、左手に何かの機械を装着している。そして、彼の足元にはサンダースがいた

「君は？」

「オレはリュウトっていうんだ。君はダークポケモンについてなにか知ってるの？」

「詳しくは知らないけど、一回何回かダークポケモンと戦ったことがあるの」

「そう」

「そういうあなたはなにか知ってるの？」

「オレも詳しいことはわからないが裏に潜む悪の姿は知っている」

「なんですって！？ いったい、黒幕は誰なの？」

「それは企業秘密って言うやつさ。君に言うわけにはいかないよ」

「お願い！ 私の知り合いがあぶない状態なの」

「君の知り合いが？ それはまたどうということだい？」

「なんでも、ダークポケモンみたいな行動を取ったらしいの。それでその人はオーレ地方に……」

「なるほどね。オーレ地方に行きリライブをして、セレモニーを受けさせると言うことが」

「リライブ？ セレモニー？ なんのこと？」

「なんでもないさ。君も気をつけなよ。ダークポケモンにはあまりかわらないほうがいい」

そついうとリュウトと名乗る少年はポケモンセンターを後にした

「なんだったんだろう？ 彼は」

エメルはそう思った

一方、リュウトはポケギアを取り出し電話をしていた

「こちらリュウト」

『どうした？』

「いま、ダークポケモンについて少しばかり知っている少女と会い

ました」

『ほう。いったい、どうしたというんだ？』

「その少女の知り合いがダークポケモンのような行動を取り、リライプをするためにオーレ地方に向かったそうです。少女自身も何回かダークポケモンと戦ったようです」

『それはダーク団のダークポケモンか？ それともロケット団か？』

「わかりません」

『わかった』

「そういえばダーク団のアジトに潜入した彼はどうになりましたか？」

『彼はオーレ地方に向かった』

「オーレ地方に……いったい、なにをするために？」

『その辺は詳しく聞かなかったからわからん。だが、一人の少年にその任務を託したらしい』

「一人の少年？」

『そうだ。なかなかのトレーナーらしい』

「そうですか。では、オレは自分の任務に戻ります」

『待て、リュウト。お前に新しい任務を与える』

「なんですか？」

『その少女を監視するんだ。どんな方法でもかまわない』

「なるほど、監視し敵のトレーナーかどうかを見極めると言うことですね」

『そうだ』

「わかりました。その任務を遂行させていただきます」

『よし。けんとうを祈る』

そう言うとその電話の相手は電話をきった

リュウトも電話をきると、ポケモンセンターに向かった

そして、ロビーを見渡しエメルを見つけるとエメルのところへむかった

「すみません」

リュウトが声をかける

「なに？」

エメルが振り向くとそこにはまたリュウトがいた

「あれ、あなたはさっきの」

「リユウトです。あなたにご相談がありまして」

「相談？」

「はい。さっき言いましたが、オレは黒幕を知っている。オレはその黒幕を倒すのを目的としています。だから、ダークポケモンと戦ったあなたの力を借りたいのです」

「でも、さっき『ダークポケモンにかかわらないほうがいい』っていったのは誰でしたっけ？」

「確かにそういいましたが、よくよく考えると経験があるあなたの力を借りたいんです」

「ふん。じゃあ、二つ条件があるわ」

「なんですか？」

「私は各地のジムに挑戦してるの。だから、旅の順路は私が決めるというのが一つ。もう一つは、あなたが知っている黒幕を教えること」

「わかりました。その条件をみます」

「決まりね。じゃあ、その黒幕とやらを教えてくださいませんか」

「いいでしょう。だけど、ここだと話しづらいので別のところに行ってください」

「なにか問題でもあるの？ その話しには」

「あります。この情報は企業秘密みたいなものです。他の人に知られることはさけないといけません。あなたには特別に教えるんです」

「わかったわ。じゃあ、私の部屋でいい？」

「はい」

「じゃあ、私の部屋に行きましょうか」

エメルはそう言うのと立ち上がり、リュウトを招きながら自分の部屋に向かった

部屋に二人とも入るとリュウトは口を開いた

「黒幕の正体。それは『ダーク団』という連中です」

「ダーク団？ そういえばそんなことってたわね……」

「誰が言ってたんですか？」

「さっきいった知り合いの人よ。ダークポケモンの行動を取ったのは知り合いのたびに同行してる人なの」

「そうですか」

「で、そのダーク団っていうのはどんな組織なのかしら？」

「昔。といっても数年前のことですが、オーレ地方には『シャドー』というダークポケモンを最初に作り出した組織がありました。そのシャドーの生き残りがダーク団といわれています」

「じゃあ、ダーク団はシャドーという組織と同一のものなの？」

「そう言うことになります」

「そうなの。ダーク団にはダークポケモンを作り出す最先端の技術があるっていうことね」

「そうです。だから、ダークポケモンはダーク団によって作り出されています」

「そう。ありがとう、教えてくれて。じゃあ、後は旅ね。あなたは部屋を取ってるの？」

「まだですけど」

「じゃあ、部屋をとっておきなさいよ。私はあした出発する予定だから、今日はこの街にいることになるから」

「わかりました。じゃあ、とってきます」

リュウトは部屋をでてフロントに向かった

そして、この日の夜を迎えるのだった

次の日の朝

リュウトはフロントにむかい預けていたサンダースと他のポケモンを返してもらった

部屋に戻ろうとしたときにエメルがやってきた

「おはよう」

「おはようございます」

「ちょっと、待ってて」

エメルはリュウトをそこで引き止めた

エメルはポケモンをかえしてもらった

そして、リュウトのところに戻ってきた

「今日は十時にこの街をでるから、それまでにこのロビーで待ってて」

「わかりました」

「それじゃ、また後で」

エメルはそういうと部屋に戻っていった

「なんだっ たんだ？」

リュウトはそう思ながら部屋に戻った

そして、約束の十時

二人とも十時にはロビーにおりスティルシティを後にし、次の街に向かうのだった

リュウトの目的は一体何なのだろうか？　そして、あの電話の会話の意味は……

第二十六話終了第二十七話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：8個ハウエンマーレ島バッジ：3個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV64

ゲイト（ワニノコ）LV60

ロック（コドラ）LV64

フライ（フライゴン）LV68

エメルのトレーナーカード

バッジ：8個ハウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76

グラ（トドゼルガ）LV72

第27話 「水のエディジム」(前書き)

リュウトという少年に会ったエメル。そして、リュウトの頼みでリュウトと一緒に旅をすることになった

一方、ラルドはエディジムに挑戦をするのだった

第27話 「水のエディジム」

ラルドはエディジムを勝ち抜くためにエディジム前にやってきてた

そう、力をつけダーク団を倒すために

「すいません」

ラルドがジムの扉を開けながら言った

ジム内の中には巨大プールがあった。どうやら、それがバトルフィールドらしい

（どうやら水タイプを得意とするジムリーダーみたいだな）

ラルドがそう思うとジムの奥にあるドアが開き誰かが出てきた

「あなたなんのよう？」

そういつてきたのは女性であった

「このジムに挑戦しに来ました」

「挑戦者ということね。いいわ、ジム戦をやりましょう。私はアクレス、よろしく」

「俺はラルドって言います」

「じゃあ、始めるとしますか。審判！ 早く来なさい！」

アクリスが奥のドアにむかって大きな声で言った

すると奥のドアから出てきたのは一人の少女だった。少女といってもラルドよりかは年齢は高い

「ジム戦をするの？」

「ええ。審判をお願い」

「あの男の子の名前は？」

「ラルドくんよ」

「わかったわ」

そう言うとその少女は審判台へ向かった

「コレよりエディジムのジムリーダー戦を開始します。挑戦者はラルド。ジムリーダーはアクリスです。ルールは二対二のダブルバトルです。それではバトル開始」

「がんばれよ二匹とも！ 行け！ ゲイトとフライ」

「いくのよ！ パルシェン！ スターミー！」

ラルドはゲイト（ワニノコ）とフライ（フライゴン）を出した

一方、アクリスはパルシェンとスターミーである

「フライ！ パルシェンにりゅうのいぶき！ ゲイトもパルシェンにかみつくだ」

「パルシェン！ まもる」

パルシェンはまもるでりゅうのいぶきとかみつくを防いだ

「スターミー！ ワニノコに十まんボルト！」

パルシェンの近くに居たワニノコに十万ボルトが飛んでくる

「フライ！ カバーするんだ！」

フライはゲイトに十まんボルトが当たる前にゲイトのところへ向かい十まんボルトを自分が受けた

「パルシェン！ れいとうビーム」

しかし、パルシェンに近づいたせいでれいとうビームをもろに受けてしまった

「フライ！」

フライはなんとか無事だった

「フライ！ ゲイトを乗せて。いったんこっちに戻ってくるんだ。ゲイトはパルシェンにハイドロポンプ！」

フライトゲイトは指示通りに動いた。そして、ハイドロポンプはパルシェンに当たったが全然きいていない

「無駄よ、両方とも水タイプ。水タイプのわざを受けてもびくともしないわ」

「ゲイト！ もう一度パルシェンにハイドロポンプだ！」

「無駄よ！ パルシェン、まもるを使いなさい」

パルシェンのまもるでハイドロポンプは打ち消された

だが、打ち消されたと同時にスターミーがふっとんでしまった

「なんですって！？」

「よし！ ナイスだフライ！」

「くっ、だましうちか」

「フライ！ スターミーにかみくだくだ」

「スターミー！ れいとうビームでフライゴンを打ち落としなさい」

「フライ！ かげぶんしんでかわせ！」

フライはれいとうビームをかわした。そして、かみくだくをスターミーにあてた

「いまよパルシェン！ れいとうビーム！」

スターミーに攻撃を与えたフライにパルシェンのれいとうビームが

襲う

「ゲイト！ パルシエンにきあいパンチ！」

ゲイトは水中にもぐっていて浮いているパルシエンの下からきあいパンチを入れた

「なんですって！」

れいとうビームのしてんがずれたせいでれいとうビームはフライに当たらなかった

「いまだ！ フライはかみくだく！ ゲイトはきあいパンチだ！」

二匹のわざはパルシエンとスターミーに当たった。両者ともこうかはばつぐんである

そして、パルシエンとスターミーは倒れてしまった

「パルシエン！ スターミー！」

「パルシエンとスターミー戦闘不能。よって、挑戦者ラルドの勝ち」

「やったぜ！」

「パルシエン、スターミーご苦労様。戻って」

アクレスはそう言うとパスシエンとスターミーをボールに戻した。戻し終わるとラルドのところへ行った

「なかなか強いね」

「いえ、それほどでも……」

「コレがこのジムを勝ち抜いた証のエディバッジよ。受け取って」

「ありがとうございます」

ラルドはお礼をいながらバッジを受け取り、バッジをケースの中に入れた

「じゃあ、俺はそろそろ行きます」

「ええ、気をつけて」

「はい、ありがとうございました」

ラルドはそういいエディジムを後にした

エディジムを後にしたラルドはポケモンセンターに戻り、ポケモンたちを回復した

ポケモンたちを回復させている間に部屋に置いていた荷物を整理し次の街スティルシティに向かう準備をするのだった

そして、荷物の整理も終わりポケモンたちを返してもらいエディシティを後にするのだった

エディジムからスティルシティまでは複雑な道ではなくほぼ一直線であったが、山を二つ越える必要があった

その日はすでに正午であつたため、この日だけでは到底スティルシティに着くことはできない

しかし、ラルドはスティルシティに向かって歩き続けた

夜はもちろん、野宿である

そして、バッジを手に入れた日の夜

ジム戦で多少疲れていたラルドは早めに休んだ

次の日。天気はいい日だった

その日、ラルドは早めに出発しスティルシティを目指した

そして、その日の夕方にラルドは無事スティルシティに到着をした

到着するといつも通りポケモンセンターに向かい部屋をかりた

そして、その晩はその部屋で休むのであった

第二十七話終了第二十八話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV64

ゲイト（ワニノコ）LV65

ロック（コドラ）LV64

フライ（フライゴン）LV70

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76

グラ（トドゼルガ）LV72

第28話 「レオという少年」(前書き)

エディジムで見事勝利したラルド。その日のうちにエディシティを出てステイルシティに向かい到着したのである

第28話 「レオという少年」

スティルシティに到着した次の日

ラルドはいつもより遅めに起床したのである。おそらく、疲れがたまっていたからだろう

起床後は朝食をとったあとにトレーニングルームに向かった

午前中はトレーニングルームでポケモンたちの練習をして時間をすごした

そして、トレーニングを終えた後。ポケモンたちをジョーイさんに預け昼食を取った

昼食後。ポケモンたちはまだ回復していなかったためラルドは部屋でヒマをしていた

するとラルドは腕につけているポケギアを取り外して電話をかけた

「もしもし、ラルドですけど。レッドさんですか？」

「そうだよ。どうしたんだい？」

「ゴールドはいまどうしてますか？」

「ゴールドくんはまだ意識がない」

「そうですか。いまはどこにいるんですか？」

「いまはフェリーに乗ってオーレ地方に向かっているよ。あと、数日でつく」

「わかりました。ゴールドをよろしくお願いします」

「ああ。それとどうだい？　ダーク団についての情報はなにか入ったかい？」

「いえ、いまのところは何も」

「そうか」

すると少しちんもくが続いた

「よし。じゃあ、ラルドくんにダーク団の情報が入るようにしよう」

「ダーク団の情報を入れるようにするってどうということですか？」

「実は僕以外にもダーク団を追っている人たちが何人かいるんだ。その人たちが情報を手に入れたらラルドくんに行くようにしよう」

「でも、情報をくれるでしょうか？」

「大丈夫だ。僕が頼んでおくよ」

「そうですか。じゃあ、お願いします」

「わかった。じゃあ、後々その人から電話が来るはずだから待っていてくれ」

「はい」

そう言うとレッドから電話を切った

ラルドは電話が来るのを部屋で待った

すると十分ぐらいでポケギアに電話がかかってきた

ポケギアのディスプレイには身の覚えのない電話番号が書かれていた

「はい？」

「もしもし、お前がラルドっていう人か？」

「そうです」

「よしつながつたな。オレはレオっていう。レッドから言われていると思うが情報が手に入り次第、お前に情報を送る」

「はい。お願いします」

「お前もポケギアを使ってるんだよな？」

「ポケギアですけど、それがどうかしたんですか？」

「レッドと同じか。いや、情報を送るにはメールの方が楽なんだが、ポケギアではメール着信ができないからな」

「レオさんもポケギアを使ってるんじゃないですか？」

「オレはP D Aっていうのを使っている。メール着信をすることができる機械だ。改造してもらって電話機能もつけた」

「すごい機械があるんですね」

「まあな。そういえばお前はいまどこの街にいらんだ？」

「ステイルシティです」

「ステイルか。じゃあ、合流はできないな」

「そういう、レオさんはいまどこにいるんですか？」

「オレはドロップシティにいる」

「あの港町ですね」

「そうだ。それじゃ、情報が入り次第、お前に連絡を入れる」

「お願いします」

「じゃあな」

そついうとレオは電話を切った

電話がきれたらラルドは電話番号を登録した

登録し終わったらポケギアを腕につけジョーイさんのところへ向かった

そして、ポケモンたちを返してもらった

返してもらった後は街に出て道具の買い足しや情報探しをした

しかし、情報はまったく得られなかった

その日はポケモンセンターに戻りこの日をすごした

そして、次の日

スティルジムに挑戦するために午前中は練習という形を取っていた

そして、昼食中のこと

テレビが移っていたのでなにげなくテレビを見ていた

『ニュースの時間です。本日、マーレ島ポケモン協会の発表により
まずと各地の謎のポケモンは人間を襲うという報告があります。ポ
ケモン協会ではこのポケモンたちの保護をするという方針です』

「保護か。でも、本当に保護できるのか？」

ラルドはそう考えた

そして、昼食後。ラルドはスティルジムに向かった

「すみません」

ラルドはそうついいながらジムの扉を開けた

扉を開けると、あたり一面に草木がおい茂っていた

「草タイプのジムか……」

ラルドがそう思ったときにおくから誰かが出てきた

「君は挑戦者かい？」

そういつて出てきたのは身長が低い男だった

「はい。ジム戦をやりに来ました」

「そうか。でも、今日はジム戦はでないんだよ」

「どうしてですか？」

「ポケモン協会からジムリーダーの一斉召集がかかちゃってね。これからポケモン協会に行かないといけないんだ」

「わかりました。いつごろ帰ってきますか？」

「わからない。協会の話を聞かないとね」

「そうですか。じゃあ、また今度来ます」

「そうして下さい」

ラルドはスティルジムを後にした

ポケモンセンターに戻る際にラルドは考えた

ポケモン協会からの召集というのはだいたい大きなことがおきたとか重要な発表がある時なのだ。ラルドの父のセンリも一斉召集にかけられたことがあり、実際に大きな出来事がおきていたという

今回も先ほどのニュースからしてダークポケモンの保護とジムリーダーの召集に関係があるのかもしれない

そう考えるとラルドはどれくらいの日数がかかるのだろうかと考えたのである

そして、その日の夜

ラルドが部屋にいとポケギアに電話がかかってきたので電話に出た

「もしもし」

「ラルドか？」

「あ、レオさん」

「ああ。お前はテレビを見たか？」

「テレビ？ 昼に見ましたけど」

「ダークポケモンの保護に関してのニュースはみたか？」

「そのニュースなら見ましたよ」

「なら話しは早い。協会がダーク団のアジトを発見したらしい」

「本当ですか!?!」

「ああ。それで、お前にもポケモン協会に来てほしい」

「俺が協会に? いったい、どうしてですか?」

「いろいろ事情があるんだ。頼む、きてくれ」

「わかりました。行きます」

「よし。頼んだぜ」

「ところで、ポケモン協会はどこにあるんですか?」

「協会の場所知らないのか?」

「はい」

「じゃあ、俺が送ってやる。いまはまだスティルシティにいるのか?」

「はい」

「わかった。じゃあ、お前のところに俺が行くからスティルシティのポケモンセンターで待っていてくれ」

「わかりました」

レオはそう言うのと電話を切った

いったい、ラルドがポケモン協会に行く必要になったのはなぜか？
そして、レオとポケモン協会の関係とは

第二十八話終了第二十九話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV70

ゲイト（ワニノコ）LV70

ロック（コドラ）LV70

フライ（フライゴン）LV71

エメルのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76

グラ（トドゼルガ）LV72

第29話 「迷宮の謎と三つの力」(前書き)

レッドから情報提供人としてレオという少年を紹介してもらった。
そして、レオからポケモン協会に来るように言われるのだった

第29話 「迷宮の謎と三つの力」

最後のレオとの電話から一時間ほどたったころ

スティルシティのポケモンセンターに一人の少年がやってきた。青いマントらしきものをつけていて左腕には何らかの装置をつけている

その少年はジョーイさんになにかを聞いた後、ポケモンセンターで休んでいる人たちの部屋がある場所へ向かった

部屋のドアにつけられているなまえを見ながら部屋街を歩いていると知っているなまえの部屋があったため、その部屋のドアをたたいた

「はい？」

その部屋の人物がドアを開けるとそこには知らない人がいた

「お前がラルドか？」

「そうですけど。もしかして、レオさんですか？」

「そうだ。さあ、早く街を出る準備をしてくれ」

「はい」

ラルドはそう言うと部屋の中に戻りバッグを持った

「じゃあ、行きましょう」

ラルドがそう言うとレオは歩き出し外に出た

外に出るとそこには変わった乗り物があり、サイドカーにエーフィとブラッキーが乗っていた

「戻れ、エーフィ。ブラッキー」

レオはエーフィとブラッキーを戻した

「お前はサイドカーに乗れ」

「わかりました」

ラルドはそういわれるとサイドカーに乗った

一方のレオもその乗り物に乗った

「かつ飛ばしていくぜ！」

レオはアクセルを思いっきりふみ乗り物を動かした

ラルドは動き出してから少しの間、そのスピードに戸惑ったが少したつとなれてしまった

なれたラルドは運転中のレオに質問をした

「レオさん」

「なんだ？」

「ポケモン協会はどこにあるんですか？」

「協会の場所か。協会はリッグルシティにある」

「リッグルシティ？」

「なんだ、リッグルシティも知らないのか。リッグルシティはマーレ島で二番目に大きい街でマーレ島の漁港とも言われている街さ」

「そうなんですか。じゃあ、その一番大きい街はどこなんですか？」

「ロイヤルシティさ。あの街が一番大きい」

「そうなんですか」

それから少し間があいてから今度はレオがラルドにたずねた

「そっぴゃあ、お前は どうしてこの島に来たんだ？」

「俺はポケモン図鑑を完成させるためにマーレ島に来ました。でも、最近はいろいろあって図鑑のほうは進歩なしですけど」

「そうか」

「あと、ジムにも挑戦してます」

「ジムに？　じゃあ、ステイルジムには挑戦したのか？」

「いえ、挑戦しようとしたんですけど、召集があるからって言われて結局はできませんでした」

「なるほど。他のジムには挑戦したんだろ。いま何個持つてるんだ？」

「今は四つです。ロイヤルジム。アフトジム。クレセントジム。エディジムのバッジです」

「結構、バトルの腕はあるということだな」

「いえ、まだそれほどでも」

「今度、オレとバトルでもするか？」

「いいんですか？」

「ああ、いいぜ」

「じゃあ、喜んで」

「よっしゃ。決まりな」

「ところで、ダーク団のアジトが見つかったという話なんですけど」

「ああ、その話か。協会もダークポケモンについていろいろ調べているんだ。その調べている途中でダーク団のアジトを発見したらしい」

「でも、どうして俺が協会に行かないといけないんですか？」

「そりゃあ、お前はレッドのかわりだからな。当然のことだろ」

「レッドさんのかわり？　ダーク団を倒すって言う役割のことですか？」

「そう言うことだ」

「でも、どうしてポケモン協会とレッドさんが関係をしてるんですか？」

「なに？　お前知らないのか？」

「なにをですか？」

「レッドの奴、なにも教えなかったのか……」

レオがそうつぶやいた。すると、レオはそのことについて説明をはじめた

「レッドはポケモン協会からダーク団を倒すように言われているんだ」

「ポケモン協会から？　これまたどうして？」

「ポケモン協会としてもダークポケモンのようなポケモンを野放しにはしておけない。だから、レッドのような実力者を呼んだんだ。そして、オレもその一人」

「じゃあ、レッドさんもレオさんもポケモン協会に呼ばれたんですね」

「そう言うことになる。そして、オレとレッド。そして、後二人協会から呼ばれている」

「その人たちもダーク団を倒すために？」

「そうだ。そいつらもかなりの実力者だから呼ばれたんだろうな」

「そうなんですか」

「ああ。お、そろそろリッグルシティに到着だぜ。ここからはもっとスピードを出すからつかまってるよ」

レオはそう言う乗り物のスピードを上げた

そして、スピードを上げてから五分ほどたったところ。リッグルシティ、ポケモン協会マール島支部の前に到着した

「ここがポケモン協会……」

ポケモン協会となっている部分は大きなビルとなっており、一番上に大きな模型のモンスターボールがつけられていた

「行くぞ」

レオはそう言う協会ビルの入り口に向かった。ラルドもレオについていく

協会の中に入るとそこには一人の中年の男性がいた。身長は百六十？ほどだった

「待っていたぞ、レオくん」

「お久しぶりです、会長」

「そっちの少年がレッドくんのかわりかね？」

「そうです。ラルドというなまえです」

「初めまして、ラルドです」

「うむ。では、会議室に向かおう」

会長はそう言うのと近くにあったエレベーターに入った

レオとラルドも同じくエレベーター内に入るのであった

そして、二十階に着いた

エレベーターを出て少し歩くと目的の会議室へとやってきた

会議室内に入るとそこには一人の少女がいた

「こっちだ」

会長はレオとラルドを座るべきイスに誘導した

そして、イスに座ると会長は真ん中にあつたイスに座った

「事情があり、一人ぬけているがはじめたいと思う」

「はい」

「そのレオくんの隣にいるのがラルドくんだ。よろしく頼むぞ、クリスくん」

「はい。わたしはクリス。よろしくね」

「俺はラルド。よろしく」

ラルドとクリスがそういい合つと会長が話し始めた

「君たちを今日、呼び出したのは他でもない。ダーク団についてだ。君たちに連絡をしたときにダーク団のアジトが見つかったと連絡したように召集した。そのダーク団のアジトとはどうやら本拠基地らしくそこをたたけばダーク団は壊滅するということが予想される」

「そこにオレたちが行つてダーク団を壊滅させるということですね」

「そうだ。だが、ここで大きな壁がある」

「大きな壁？」

「そう。ダーク団のアジトの場所がマイティラビリンスにあるのだ」

「マイティラビリンスですって!？」

「マイティラビリンスって？」

ラルドが質問をした。すると、クリスが答えた

「マイティラビリンスはマーレ島にある謎の巨大迷路。そこは火、水、電の巨大な力を持っていないと突破できないといわれている場所」

「クリスくんの言うとおりだ。しかも、マイティラビリン스에 다크团的アジトがあるということは三つの巨大な力を手に入れているということになる」

「その火、水、電の力っていったい？」

「エンテイ、スイクン、ライコウの力だ」

レオがそう答えた

「その三匹はジョウト地方にまつわれている伝説のポケモンたちよ」

「そう。だから、その三匹をダーク団は手に入れているのだ、ラルドくん」

「じゃあ、どうすれば？」

「そのことは今日席をはずしている彼がなんとかしてくれている」

「じゃあ、彼が戻ってきたらマイティラビリンスにいくことになるんですね？」

「そう言うことだ。では、今日はこの辺にしよう。彼がいたほうがなにかと話しもしやすいし、今日はもう夜遅いからな」

「はい」

「三人の部屋は十階にある。そこで休むといい」

「わかりました」

そう言うラルドたち一行は十階に向かい個々の部屋に入っていくのだった

マイティラビリス……。この難関をラルドたちは突破することができるのだろうか……

第二十九話終了第三十話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV70

ゲイト（ワニノコ）LV70

ロック（コドラ）LV70

フライ（フライゴン）LV71

エメルのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76
グラ（トドゼルガ）LV72

第30話 「氷の力、水の関門」 (前書き)

ポケモン協会とレッド、レオたちの関係を知ったラルド。そして、クリスという少女にポケモン協会で出会ったのであった。そして、マイティラビリンズにダーク団のアジトがあることを知った

第30話 「氷の力、水の関門」

マイティラビリスについて知った次の日

ラルドはいつも通りの時間に目覚めた

部屋はとてもきれいな部屋でまるでホテルの部屋のようなだった

ラルドは戸惑った。いつもはポケモンセンターの部屋で寝ているため、起きたまずポケモンたちを引き取りに行くのだが、今日はそれができない。なにをしていいのかわからないからだ

一応、顔を洗うなどポケモンたちを返してもらってからの行動に移った

それから三十分ほどたったころ、誰かがラルドの部屋にやってきた

「はい？」

ラルドがそついいながら入り口の扉を開けた

すると、そこにいたのは会長であった

「おはよう、ラルドくん」

「おはようございます」

「いまは時間はあるかね？」

「ありますが。なにかお話しでも？」

「そんなところだ。中に入って問題はないかね？」

「どうぞ」

ラルドはそういわれたため会長を部屋に入れた。そして、会長は部屋にあったソファーに座った

ラルドは扉を閉め、会長と反対のソファーに座った

「ところでどんな話でしょうか？」

ラルドが会長にそう尋ねた

「うむ。ラルドくんはなにか経歴があるのかね？」

「経歴？」

「そうだ。レッドくんやレオくん、クリスくん全員が何かしらの経歴を持っている。そう、バトルの強さを示す経歴をね」

「ハウエンリーグのチャンピオンって言うのだけです」

「ほう。ということは、ハウエンのジムを全部勝ち抜いたのか。他にはないかないのか？」

「他にはないです。ただ、ジム戦という観点から見ればマーレ島のバッジも四つ集めました」

「半分か。なるほど、わかった。すまなかったな、こんな朝早くに」
会長はそういうと立ち上がった

「いえいえ。どうせ、ヒマをしていましたので」

「では、私はコレで失礼するよ。今日は九時に昨日の会議室に来たまえ」

そういうと会長は入り口に向かった。しかし、ラルドがそれを引き止めた

「待ってください、会長。一つお伺いしたいことがあります」

「なんだね？」

「レッドさんやレオさん、クリスさんの経歴って言うのはなんなんですか？」

「なぜ知りたい？」

「僕が本当にレッドさんの代わりの力になれるかどうかを知りたいんです。それに、他の二人の実力だって知っておきたいですし」

「いいだろう。レッドくんは、カントーリーグの優勝者でポケモン研究の第一人者として知られるオーキド博士からも認められている。レオくんはオーレ地方出身でバトル山というバトル施設で百人抜きをしたことのある実力者、以前、シャドーという悪の組織を倒したこともある。クリスくんはジョウトリーグで準優勝でポケモンを捕まえるのが得意という経歴をそれぞれ持っている」

「……。皆さん、すごい経歴を持っているんですね」

「そうだ。私がこのマーレ島に迫っている危機を防ぐために集めたスペシャリストたちだ」

「そんななかに僕が入っていいんでしょうか？」

「確かにレッドくんよりかは実力は劣っている。だが、君はレッドくんに指名されたんだ。がんばりたまえ」

会長はそういうと部屋を後にした

それからラルドは少し考えた。自分の実力について

それから時間はすぎ八時五十分ごろ

ラルドの部屋に誰かがやってきた

「はい？」

ラルドはそういつて扉を開けた。すると、そこにはレオがいた

「おはよう、ラルド」

「おはようございます」

「九時から会議室だろ。一緒に行こうぜ」

「はい」

ラルドはそう言うつと部屋に戻りバッグを持った

「バッグはいらないと思うぞ」

「一応、持ってきます」

ラルドはそういつて部屋を後にした

それからエレベーターにのり二十階の会議室に向かった

会議室に着くと、そこに一人の少年がイスにすわっていた。右手にリストバンドをしている

「久しぶりだな、レオ」

「久しぶり」

「そっちのやつは誰だ？」

「こいつはラルド。レッドの代わりだ」

「初めまして」

「レッドの代わり？ レッドのやつどうかしたのか？」

「オレは詳しくは知らないから会長に聞くといい」

「そうか。ラルドとかいったな」

「はい」

「俺はグリーンだ。よろしくな」

「よろしくお願いします」

ラルドがそういつてイスに座ろうとした時に後ろからクリスがやってきた

「あれ？ グリーンさんじゃないですか。お久しぶりです」

「久しぶりだな、クリス」

「カントー地方に戻ったってきいたから驚きましたよ。なにやってたんですか？」

「まあいろいろとな」

「ふ〜ん」

クリスがそう言つと後ろから会長が現れた

「お、集まってるな」

会長が着たのでクリスは昨日と同じ席に座った。会長も昨日と同じ席である

「では、これからマイティラビリスに突入の件について説明しよう」

「はい」

「昨日、話したとおりマイティラビリスを突破するには火、水、電の巨大な力が必要だ。グリーンくんにも今日、そのことは伝えた。そこで、もともとはダーク団を倒す切り札としてグリーンくんにカントー地方ににいるといわれている伝説の鳥ポケモンたちを捕まえてもらった」

「伝説の鳥ポケモンを？」

「ファイヤー、フリーザー、サンダーですね」

「そうだ。ファイヤーとサンダーの力でマイティラビリスの火と電の関門を突破することができるようになった。しかし、問題なのが」

「水の関門……」

グリーンがそうつぶやいた

「そう、フリーザーはこおりタイプ。水の関門をフリーザーで突破することはできないのだ」

「その水の関門は一匹の巨大な力じゃなきゃダメなんですか？」

ラルドがそう言うところグリーンが言った

「必ずしも一匹じゃなくてもいい。だが、そんなにたくさんの水ポケモンは俺たちは持っていない」

「だから、伝説のポケモン、スイクンが必要となるのよ、ラルドくん」

「しかし、スイクンは数が少ない。いまから探したらとてつもなく遅くなってしまう」

「でも、伝説の水ポケモンならもう一体いますよ」

ラルドがそう言う与会議室内がシーンとなった

そして、最初に口をあけたのはクリスだった

「もしかして、ホウエン地方に生息しているといわれるカイオーガのこと？」

「そうですよ」

「しかし、カイオーガの数もたかが知れているぞ」

「でも、そしたら他には……」

「一つ考えがある」

「どんな案だ？ グリーン？」

「しよせんフリーザーはこおりタイプで使えない。だが、氷の原型は水。フリーザーの冷気をほのおタイプのわざで溶かせば水になる。それを利用すればいい」

「いい考えだね、グリーンくん。よし、それでいこう」

会長がそういった

「でも、それじゃあ威力は落ちるんじゃない？」

「その辺は他のみずタイプのポケモンと応用すればなんとかなるだろう」

「そうね」

「よし。では、明日。マイティラビンスに向かう。今日はポケモンたちの練習や休憩をするといい。トレーニングルームが十三階にあるからそれを使うといい。それでは解散」

会長はそう言う与会議室を後にした

「じゃあ、俺は失礼する。俺はまだやることがあるからな」

グリーンはそう言う立ち上がり会議室を出て行った

「わたしたちはどうする？」

「そうだな。なにをするか」

「じゃあ、レオさん。俺とバトルしましょう」

「そうだな。どうせ、考えても決まらないだろうからやるか」

「じゃあ、十三階にいきましょ。わたしが審判をしてあげる」

「頼んだぜ、クリス」

三人は十三階のバトル場へと向かった

バトル場はジムのフィールドのように特徴はなかったが、シンプルでバトルのしやすいフィールドであった

「ルールは一对一のシングルバトルでいいわよね？」

「ああ」

「それじゃあ、バトル開始！」

「行くんだ！ ロック！」

「行け！ メタグロス！」

ラルドはコドラが進化したボスゴドラ。レオはメタグロスだった

「先制攻撃だ！ ロック！ かえんほうしゃ！」

「メタグロス！ こうそくいどうからかげぶんしんだ」

メタグロスはかえんほうしゃを軽々とかわした

「コメットパンチ！」

「ロック！ 受け止める！」

コメットパンチはロックに当たりダメージを受けたがメタグロスは

つかまってしまった

「そこからだいもんじ!」

「メタグロス! サイコネシスだ!」

近距離からのだいもんじだったためメタグロスは普通にだいもんじを受けるよりダメージを受けたと思われたがサイコネシスでダメージを軽減した

そして、メタグロスはロックから離れた

「なに!」

「メタグロス! もう一度コメットパンチだ!」

「ロック! もう一回受け止めるんだ!」

さっきと同じくコメットパンチのダメージをロックは受けた。メタグロスも再度ロックにつかまってしまった

「だいもんじ!」

「させるか! かわらわりだ!」

だいもんじが発射される前にかわらわりが先にロックに当たった

「ロック!」

こうかはばつぐんのかくとうタイプのわざを受けたロックは戦闘不

能になつてしまった

「ボスゴドラ戦闘不能！ 勝者レオ」

「戻れ！ メタグロス」

レオはメタグロスを戻した

「なかなかだったな」

「いえ、まだまだ未熟です」

「確かにレッドよりかは未熟かもしれないがいいせんしてる。さて、練習でもするか」

「はい。ロツク、戻つて」

こうしてラルドたちはトレーニングルームでポケモンたちの練習を始めたのだつた

第三十話終了第三十一話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV72

ロック（ボスゴドラ）LV72
フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード
バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76
グラ（トドゼルガ）LV72

第31話 「ジムリーダー達の想い」(前書き)

レッドやレオの経歴を知り、グリーンという新しい仲間と会ったラルド。そして、グリーンが捕まえたというファイヤー、フリーザー、サンダーによってマイティラビンスの突破口が開かれると予測されるのだった

第31話 「ジムリーダー達の想い」

ラルドやレオがトレーニングルームで練習をしていたところ二十階にあるラルドたちとは別の会議室で会長が八名の人たちと話しをしていた

「会長。どういことですか？ 私たちがあの少年たちの護衛だなんて」

そういったのはロイヤルジムのジムリーダーであるアズリノであった。そして、今度口を開いたのはアフトジムのゲンダイだった

「そうだ。普通は俺たちジムリーダーが先頭で行くべきだろ。なのに、なぜあんなやつらを先頭に」

「それは彼らが優秀な力を持っているからだ。リーグ制覇者やリーグ準優勝者など、ジムリーダーたちを倒してリーグに参加した実力者たちだ。先頭にしても問題はないだろう」

「でも、知識では私たちの方が上よ」

そういったのはエディジムのジムリーダーアクレスである

「確かに知識では君らジムリーダーの方が上だろう。だが、戦いには第一に実力が必要だ」

「その言葉は聞きすてならんぞ。わしらジムリーダーも実力はあるんじゃないかな」

そういったのはクレセントジムのジムリーダージュウベイであった

「そうでしょうか。先ほども言ったとおり先頭に立つものたちは全員リーグで上位成績を収めたものばかりです。それに、今回、あなた方ジムリーダーのうち四人を倒した少年も参加しています」

「わしらを四人も倒したものとじゃと？」

「はい。なまえはラルドという少年です」

「彼ね……」

アクレスはそうつぶやいた

「ともかく、ジムリーダーの諸君たちには彼ら四人の護衛及びサポートを頼む」

「わかりました」

会長のその発言に全員がそう答えたかと思っただがそうではなかった。反論者が一人いたのである

「待ってください、会長」

「なんだね、リッグルシティジムリーダーのグッグルくん？」

「ぼくはその案は賛成できません」

「なぜだね？」

「相手はダーク団。しょせん、子供などダーク団の恐怖によってバトルなどできなくなる状態になる場合があります」

「だが、彼らのうち二人はダーク団と遭遇しその困難を乗り切っている」

「ですが、二人ということは残りの二人は足手まとい。足手まといになるならば連れて行かないほうがいいと思う」

「だが」

会長がそう言うのとグッグルが口を挟んだ

「わかりました。会長がそのような考え方ならばくはこの戦いから離脱させていただきます」

グッグルはそう言うのと会議室を出て行ってしまった

「……」

「どうするんじゃ、会長？ あやつはマーレ島ジムリーダーの中で一番優秀なやつですじゃぞ」

「しかし、彼があのような考え方では参加してくれないでしょう。しかたありません。では、今日はこの辺で終了する。出発は明日だ。体調管理などはしっかりしておいてくれたまえ。以上、解散」

会長がそう言うのとジムリーダーたちは席を後にした

会議室内には静けさが訪れた

そんなころトレーニングルームにいるラルドたちはバトルをしていた

「メガニウム！ はっぱカッターよ」

「ゲイト！ かげぶんしんでかわすんだ」

ゲイト（ワニノコ）ははっぱカッターをかげぶんしんでかわした

「ゲイト！ れいとうビーム！」

「メガニウム！ ソーラービームよ」

れいとうビームとソーラービームはぶつかり合った。普通に考えればソーラービームはすぐに発射されないのだが、前にほんばれをしていたためすぐにソーラービームは発射された

そして、そのわざのぶつかりあいでは両者互角ということだろうか。両者のわざともにはじけて消えたのである。ルーム内には煙がまった

「いまだ！ ゲイト！ れいとうビーム！」

「ソーラービームよメガニウム！」

またぶつかり合いになると思いきや、煙でにほんばれの日差しがさえぎられソーラービームはすぐには発射されなかった

チャージをしているメガニウムには容赦なくれいとうビームが当たった

そして、メガニウムは戦闘不能になった

「メガニウム戦闘不能！」

審判を勤めていたレオが言った

「戻って、メガニウム」

「戻るんだ、ゲイト」

二人ともポケモンを戻した

「なかなか強いよね」

「それほどでも」

「ラルドの実力には驚かせられるよ。クリスはオレに勝ち越しているのに、オレに負けたお前がクリスにかつんだもんな」

「たまたまですよ」

「そうかな？ わたしはラルドくんは将来優秀なトレーナーになると思うな」

「それはクリスさんやレオさんも一緒ですよ」

「そうね。がんばりましょう」

「そろそろ昼時だな。なにか飯でも食うか？」

「食べる食べる。でも、協会内に食堂みたいところなんてあるんですか？」

「街に出るんだよ。街なら店はたくさんそろってるからな」

「じゃあ、街に行きましょう」

「わたしはパスするわ」

「なんだ？ 用事でもあるのか？」

「用事っていうほどのものじゃないけど」

「そうか。じゃあ、オレたちだけでいくか」

「はい。クリスさん、また後で」

「ええ」

そう言うとラルドたちはトレーニングルームを後にした

そして、ラルドとレオは協会からでてリッゲルシティの店に向かった

「この街は魚が豊富だからな。魚料理がうまいぞ」

「魚か。食べるのは久しぶりかも」

「いままで食べてなかったのか？」

「はい。ポケモンセンターは基本的に魚は出しませんから」

「そうか。それじゃあ、久しぶりになるな」

ラルドたちは協会からさほど遠くない魚料理の店に入り昼食を取った

そして、昼食後はレオの案内でリッグルシティ内を歩くことにした

さすがマーレ島二番目に大きい街といわれ漁港としても有名なリッグルシティは広く活気あふれていた

そして、歩くこと一時間。ラルドはあるものを発見した

「レオさん。あれってジムじゃないですか？」

ラルドは一軒の建物を指差した

「ああ、あれはリッグルジムだな」

「やっぱり、ジムか。挑戦しようかな……」

「いまは挑戦できないって。それに、リッグルジムのジムリーダーのグッグルさんはマーレ島で一番強いジムリーダーって言われてるんだ。お前じゃまだ勝てないよ」

「マーレ島で一番強いジムリーダーか。戦ってみたいな」

「ま、ジムリーダーの召集が解除されるまでお預けだな」

「そうですね。早くジム戦をしたいな」

ジムを発見してから十分後。合計一時間十分ほど歩いてラルドたちは協会に戻ってきた

協会に戻ったラルドは疲れたのか部屋で休憩をした

休憩後はトレーニングルームで練習をした

そして、その日の夜を向かえ一日を終えるのだった

明日はマイティラビリスに向かう日。一体、どんなことがラルドたちを待っているのだろうか……

第三十一話終了第三十二話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76

グラ(トドゼルガ) L V 7 2

第32話 「迷宮への挑戦」(前書き)

ジムリーダーたちが召集され、マイティラビリンス突破のサポートをすることになったジムリーダーたち。しかし、グッグルのみがその作戦からはずれるのだった

第32話 「迷宮への挑戦」

ジムリーダーたちの会議があった翌日

二十階の会議室に四名のトレーナーと七名のジムリーダーが集まった
合計十一名のトレーナーたちが集まったら会長が話しを始めた

「ではこれよりマイティラビリンスに向かう」

「はい」

「マイティラビリンスの場所は知らないものがあると思うので説明しておこう。マイティラビリンスはドロップシティから見える孤島にある。そのため、リッグルシティから船に乗りドロップシティ方面へ向かい、マイティラビリンスのある孤島に向かう」

「わかりました」

「よし、では出発だ！」

こうして、会議室を出てリッグルシティに止まっていた船に十一名のトレーナーと会長が乗った。マイティラビリンスに向かうために船内ではポケモンバトルなどポケモンに負担のかかること以外なら好きなことをしてもいいと言うことで、ラルドは部屋で眠ろうとしていた

しかし、なかなか寝付けなかったため寝ることはあきらめた

それからやることなくったラルドはポケギアで電話をかけた

「はい？」

「あ、レッドさんですか？ ラルドです」

「やあ、ラルドくん。レオからは情報は送られてきたかい？」

「送られてきたといえば送られてきてます」

「そうか。それはよかった。今日はなんのようだい？」

「いま、俺とレオさん、クリスさん、グリーンさんとジムリーダーの皆さんとマイティラビリンスに向かっています」

「マイティラビリンスに？ なんでそんなところに？」

「マイティラビリンスにダーク団の本拠基地があるからです」

「ダーク団の本拠基地が！？ まさか、マイティラビリンスにあるとは……」

「それで、俺たちはダーク団を倒すためにマイティラビリンスに向かってる途中です」

「そうか。まさか、こんなに早くダーク団のアジトが見つかるとは思ってなかったな」

「どうしてですか？」

「僕はダーク団のアジトはそう簡単に見つからないと思って君に役割を託したんだ。ダーク団自身は僕が倒すことになると思っていたんだ」

「でも、早く見つかってしまい倒せなくなってしまったって言うことですね」

「そういうことだね」

「なんか俺、悪いことした感じ……」

「そんなことはないよ」

「そうですか。じゃあ、レッドさんの分もがんばりますね」

「うん、頼むよ」

「ところでいまどこにいるんですか？」

「いまはフェナスシティという街にいるよ。砂漠の中なのに水が豊富にある街だ。ゴールドくんを助けるにはもう少しだ」

「そうですか。ゴールドをお願いしますね」

「わかってるよ。それじゃあ、僕はこれで」

「はい」

そついうとレッドは電話をきった

ラルドも電話をきった

それから数時間後に船はドロップシティに到着した

出発前に会長から『この船はドロップシティまでだからドロップシティに到着したら一回船を下りるんだ』といわれていたため、ラルドは荷物を持って船から出た

船から出るとそこにはレオ、グリーン、クリス、会長の四人がいた

「あれ？ ジムリーダーたちは？」

「彼らは次の街アクアマリンに行ってもらうことにした」

「アクアマリン？」

「マーレ島で一番美しいといわれているきれいな街さ。郊外には遺跡があつて遺跡マニアも多くいる街さ」

レオがそう説明した

「でも、どうしてそこに？」

「いろいろと事情があつてな。詳しいことはここでは話せないが」

「そうですか」

「では、マイティラビリンスに向かうぞ」

「はい」

「でも、会長。どうやって行くんですか？」

「それに関しては大丈夫だ。こちらにきなさい」

会長はそう言うラルドたちをつれて別のところにむかった

すると、そこには一台のクルーザーが止まっていた。船には『ポケモン協会』の文字がある

「協会のクルーザーだ。こちらに乗りたまえ」

会長はそういつてクルーザーに乗った

そして、ラルドたちが乗り込もうとしたとき、グリーンが待ったをかけた

「待て、ラルド。クリス。レオ。その船には乗るな」

「え？ どうして？」

「いいからこっちへ来い」

グリーンがそういうので三人ともグリーンのところに行った

「おいおい、どうしたんだよグリーン？ 早く行こうぜ」

「あせるな、レオ」

「どうしたんだ？ 四人とも。早く乗りたまえ」

会長がそうせかした

「それくらいにしたらどうなんだ、会長。いや、ダーク団の首領デスゴールド！」

「冗談はよしたまえ、グリーンくん。私がダーク団の首領であるわけはない」

「もう、バレてるんだよデスゴールド。会長はいつもスニーカーをはいているんだ。なのにお前は革靴をはいている。これはれっきとした証拠だ」

「靴が違っぐらいで私をダーク団の首領とよぶのは変なんじゃないのかね」

「俺たちはダーク団のアジトに行くんだ。そんなところにいつもはかない革靴で行くやつはいない。お前は会長という身分だから革靴にしたんだろうが、会長はあいにく革靴ははかない」

「いい加減にしたまえ！ グリーンくん！ いくら君といってもいい加減にしないと私は怒るぞ」

「海洋。その後ろの人物は誰だ」

グリーンは会長の後ろでかじを握っている人物を指差しながら言った

「彼はクルーザーの操縦士だ」

「会長はどこかおけがされてますか？」

「どこもけがなどしてないが」

「それは残念だな。会長はクルーザーは自分で操縦するんだ。なのに、けがをしてないのに操縦しないというのはどういうことだ」

「それは、私がいろいろと忙しいからだ」

「忙しい？ そんなことはないはずだ。会長は昨日から徹夜をされて今日はゆっくりとクルーザーを操縦するといっていた」

「なに？」

「さあ、化けの皮をはがせ！」

そついうと会長は突然笑い出した

「なかなかの推理力だな。グリーン。そう、私こそダーク団の首領デスゴールドである」

デスゴールドは化けの皮をはがしながら言った

「デスゴールド！」

そついったのはラルドであった

「久しぶりだな、ラルドよ」

「知ってるの？ ラルドくん」

「一回、別のアジトでやつと戦ったことがある」

「きさまらをマイティラビリンスにやっても問題はないのだが、危険な芽は早めに摘んでおかねばならないからな。おい、こいつらを倒すんだ」

デスゴールドがそう言うその後ろから青い服をきて、サングラスをかけた身長の高い男が出てきた

「わかりました」

そいつはそういうと船をおりた。すると、クルーザーは動き出しどこかにいってしまった

「誰だお前！」

ラルドがそう言うとその男がこういった

「私はアルドス。ダーク団の幹部だ」

「幹部……」

「そうだ、デスゴールド様のためにきさまらを倒す。行け！ ケンタロス！ ゲンガー！」

そういうとアルドスはケンタロスとゲンガーを出してきた

「くっ、行くんだ！ ロック！」

「頼んだわよ！ メガニウム！」

「行け！ エーフィ！」

「行け！ リザードン！」

ラルドはロック（ボスゴドラ）クリスはメガニウム。レオはエーフィ。グリーンはリザードンを出した

結果、ケンタロス・ゲンガー対ロック・メガニウム・エーフィ・リザードンという二対四のバトルになった

こうして、ダーク団幹部のアルドスとラルド、クリス、レオ、グリーンの戦いになったのである

いったい、この戦いはどうなるんだろうか

第三十二話終了第三十三話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラゲ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV76

グラ（トドゼルガ）LV72

第33話 「急襲、アルドス」(前書き)

マイティラビリンスに向かったラルドたち。ドロップシティで船を下りたのはよかったのだが、会長が偽者だとグリーンが気づき正体を暴く。そして、ダーク団幹部のアルドスと戦うことになった

第33話 「急襲、アルドス」

「ロック！ いわなだれ」

「メガニウム！ にほんばれよ」

「エーフィ！ ゲンガーにサイコキネシス」

「リザードン！ かえんほうしゃ」

ラルドのロック（ボスゴドラ）はいわなだれ。クリスのメガニウムはにほんばれ。レオのエーフィはサイコキネシス。グリーンのリザードンはかえんほうしゃでアルドスのポケモンを攻撃した

ロックのいわなだれはゲンガーにはかわされたがエーフィのサイコキネシスが当たった。ケンタロスにはにほんばれでパワーアップしたかえんほうしゃといわなだれが当たった

「なめるな！ ゲンガー！ エーフィにシャドーボール！ ケンタロス！ じしんだ！」

シャドーボールはエーフィに当たりこうかはばつぐんだった。ケンタロスはロックにあたりこうかはばつぐん。メガニウムにはたいしてきかなかった

「リザードン！ ケンタロスにかえんほうしゃだ！」

リザードンは空を飛んでいたためじしんのダメージは受けなかった。ケンタロスがじしんをしている間にかえんほうしゃを放ち、ケンタ

ロスにあてた

「ロック！ アイアンテールだ！」

「エーフィ！ もう一発サイコキネシス！」

「ゲンガー！ シャドーボール！ ケンタロス！ なみのり！」

ロックのアイアンテールはケンタロスに当たった。しかし、ケンタロスはなみのりを使いロックに大ダメージを受けさせた

ゲンガーのシャドーボールとエーフィのサイコキネシスは両者共にあたり大ダメージを受けた

「メガニウム！ どのこなよ」

「リザードン！ だいもんじでケンタロスに止めをさすんだ！」

「エーフィ！ あさのひざしで回復だ」

「ケンタロス！ なみのりでかわせ！ ゲンガー！ エーフィにシヤドーボール！」

「ゲンガーに攻撃をさせるな！ アイアンテールをお見舞いしてやるんだ！ ロック！」

ケンタロスは波にのって高い高さまで上がり、どくのこなとかえんほうしやをかわした。そして、四匹になみのりのダメージを与えたのである

ゲンガーはシャドーボールを放った後にアイアンテールを受けた。
エーフィはにほんばれの効果で多めに回復したため、たえることができた

「ゲンガー！　さいみんじゅつ！　ケンタロス！　なみのりだ！」

ゲンガーはエーフィにさいみんじゅつをかけ眠らせてしまった。リザードンとロックはなみのりで大ダメージを受け、ひんしに近い状態になった

「くっ、ロック！　ケンタロスにはかいこうせん！」

「リザードン！　ブラストバーンだ！」

「ケンタロス！　なみのりでかわすんだ」

「メガニウム！　ソーラービームよ」

ケンタロスはロックとリザードンのわざをかわしたがメガニウムのソーラービームを受けてしまい、戦闘不能になった

しかし、なみのりは残っており、ロックとリザードンはダメージを受けてしまったため戦闘不能になった

「戻るんだ！　ロック」

「リザードン！　戻れ」

「戻れ、ケンタロス！」

三人はそついい各自のポケモンを戻した

こうして、エーフィ・メガニウム対ゲンガーになった

しかし、エーフィは依然としてねむり状態である

「メガニウム！ こうこうせい！」

「ゲンガー！ ヘドロばくだんだ」

メガニウムはこうこうせいでも回復したがゲンガーのヘドロばくだんを受け、回復前より大きなダメージを受けてしまった

「メガニウム！ ソーラービームよ」

ソーラービームはほんばれの効果ですぐに発射された

「ゲンガー！ だいはくはつ！」

「なんだと！」

グリーンは声を上げた。その瞬間、ゲンガーはだいはくはつを起こした

あたり一面に煙がおこる

そして、煙が晴れたと思うとそこにはアルドスとゲンガーはいなくなっていた

メガニウムとエーフィは戦闘不能になって倒れていた

「戻れ！ エーフィ」

「戻って！ メガニウム」

二匹が倒れているのに気がついた二人はボールに戻した

「大丈夫か？」

グリーンがみんなに聞いた

「ああなんとか大丈夫だ」

「わたしも大丈夫よ」

「俺もぎりぎりで」

「そうか。それはよかった」

「そういう、グリーンさんは大丈夫？」

「大丈夫だ」

「ところで、これからどうします？」

ラルドがそうきいた。マイティラビンスに行くためのクルーザーはデスゴルドに取られてしまった。そして、会長の現在の安否もわからない。こんな状況でどうすればいいのだろうかと考えたのだ

「とりあえずジムリーダーたちに連絡を入れる」

グリーンはそう言うとポケギアを取り出し、電話をかけた

電話をかけてから三分ほどで電話をきったグリーンはラルドたちにジムリーダーたちが船内を探すように言っておいたということをきいた

「あとはマイティラビリスに行く方法だな」

レオがそういった

「船は俺が手配しよう。だが、今日中に手配しても今日には手配はできない。お前達はポケモンセンターでやるんじゃない」とい

「わたしも手伝うわよ？」

「大丈夫だ。俺一人で十分だ」

「わかりました。じゃあ、俺たちはポケモンセンターに行ってますね」

ラルドはそういうとポケモンセンターの方向に向かって歩いた。以前、来た街なのでどこにポケモンセンターがあるかは知っている

それを見たレオとクリスはグリーンに一言いいラルドを追った

その夜のポケモンセンター内

この日は、カントーとハウエンからの連絡船が共に一回ずつきたため、ポケモンセンター内は混雑していた

そのため、ラルドとレオは同じ部屋に。クリスはグリーンと同じ部屋になった

ラルドとレオの室内では、さまざまな話しが飛びかった。ポケモンのこと。バトルのこと。レオの今までのこと。ダーク団のこと。他にもまだあった

そして、この日は話しのネタが尽きないまま就寝するのである

次の日の昼

グリーンに全員呼び出され四人一緒に昼食をとっていた

「なあ、グリーン。ジムリーダーたちからは連絡がきたのか？」

レオがグリーンにそうたずねた

「ああ。会長はいなかったそうだ。おそらく、デスゴルドにさらわれマイティラビリンズに連れて行かれたんだろう」

「会長を助けるためにもダーク団を倒すためにもマイティラビリンズには行く必要があるってことね」

「そう言うことだな」

「ところで、ジムリーダーたちはなんでアクアマリンにいったんですか？」

「ラルド。アクアマリンにつれていかれたのはデスゴルドの変装の

会長が言ったことだろ。意味なんてないさ」

「いや、アクアマリンには本物の会長から言われたみたいだ」

「そうなのか？　じゃあ、なんでアクアマリンに？」

「その辺は教えてくれなかったのだからない」

「そうか」

会話が途絶えた時、ラルドが食べ終えたのでラルドたちは食堂を後にした

部屋に戻る途中にグリーンが話しを始めた

「荷物を整理し終わったらロビーに集合だ。マイティラビリンスに向かうぞ」

「わかった」

「わかったわ」

「わかりました」

「じゃあ、そう言うことで」

グリーンはそう言うと分かれ道でラルドたちと別れた。クリスマスもグリーンが行った道に行った

部屋に戻ったラルドは部屋に出したものをリュックに入れた

そして、リュックを背負いレオと共にロビーへ向かった

それから数分後

右の頬が赤くなっているグリーンがきた

「あれ？ クリスはどうしたんだ？」

「荷物の整理をしてたらクリスに『邪魔だから外にでていて』と言われてここにきた」

「荷物はまとめたのか？」

「ああ」

「ところで、その頬はどうしたんだ？」

「別になんでもない」

「なんでもないわけないだろ」

「気にするな」

そういつているとクリスがきた

「お待たせ。じゃあ、行きましようか」

「そうですね、行きましよう」

ラルドがそう言うつとグリーンとレオを先頭にしてポケモンセンターを後にした

こうして、ラルドたちはマイティラビリンスに向かうのだった……

第三十三話終了第三十四話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV76

グラ（トドゼルガ）LV72

第34話 「闇を統率する者」

マイティラビンスにラルドたちが向かっている一方で、エメルとリュウトは共に旅を続けて、アクアマリンにやってきていた。

「やっとついたわね」

「はい。ポケモンセンターに行って部屋を取ってから街を回りますよう」

リュウトのその提案で、二人はポケモンセンターで今晚泊まる部屋を取ってから、街を歩いていた。

「でも本当なの？ この街に奴らがいるなんて」

「詳しいことはわかりませんが、情報によるとこの街に奴らのアジトがあるそうです」

「でも、そのアジトはどこにあるかはわからないんでしょう？」

「はい……。まあ、情報収集をわかるかと思います」

「あれ？ リュウトじゃないか？」

エメルとリュウトが会話をしていると後ろからリュウトに話しかけてきた人がいた。

リュウトとエメルが後ろを振り向くと、そこには、大人七人で、その中にエメルが知っている人物が五人いた。

「あなた達はジムリーダーの皆さんじゃないですか！」

彼らを見てエメルが言った。

「あれ？ あなたは確かエメルさんじゃないですか？」

エメルを見て最初にそう言ったのは、アズリノだった。

「お久しぶりです。一体こんな所でなにをしているんですか？」

「ジムリーダー全員。いや、七名も集まってこんな所でなにをしているんですか？」

エメルが言った後に、リュウトも続けていった。

「まあ、ここで立ち話もなんだからポケモンセンターで話してもいいんじゃないか」

ポケモンセンターに戻った、エメルたちとジムリーダーたちは、エメルたちの部屋に全員集まり、ジムリーダーたちから話を聞いた。

「リュウトは俺たち全員を知っていると思うから、いいと思うがエメルは知らないようだから自己紹介をしておこう。俺はファーツ」

「うちは、ハールや。よろしく頼むで」

「よろしくお願ひします」

「ところであなたは僕を覚えていますか？」

そう言ったのは、小柄な男だった。

「覚えてますよ。スティルジムのジムリーダーのグリーズさんですよね」

「はい。覚えてもらっていて光栄です」

「余談はいい。とつとと、本題に入ろう」

そう言ったのは、ファーツだった。

「俺たちがこのアクアマリンに来たのは、会長から指示を出されてな。郊外にあるアクア遺跡に行けというものだったんだ」

「会長に？」

「ああ。何でも、ダーク団のポケモンを盗もうとしている奴らがいるらしい」

「奴らって、ロケット団ですよね？」

「そうだ。それで、俺たちはアクアマリン港で下船をし、遺跡に向かおうとしていたらリュウトたちがいたというわけだ」

「そうだったんだ。じゃあ、私たちも遺跡に連れて行ってくれませんか？」

「君たちを？」

「そうだね、それがいいだろう。ファーツさん。僕たちもロケット団がこの街にいるという情報仕入れたんでここに来たんです」

「会長の指示か？」

「そうです」

「ねえ、リュウト。さっきから気になっていたことがあるんだけど、エメルとはファーツとリュウトの会話を止め、リュウトにたずねた。

「なんで、あなたはジムリーダーたちと知り合いなの？　そして、会長の指示ってどういうこと？」

「リュウト。お前まさか、黙っていたのか？」

「うん……。オレはね。ポケモン協会マール島支部の収集部員なんだ」

「収集部員？」

「うん。マール島には今、ダーク団とロケット団という二つの悪が存在している。その二つの悪を倒すために集められたのが、収集部員さ

オレに他にも四人招集されているのさ」

「そうだったんだ」

「黙っていてごめんね。できる限り、このことを外部に漏らさないように言われていたから」

「いいえ、大丈夫」

「そういえばリュウト。ダーク団のアジトには、彼ら四人が向かった」

「そうか。じゃあ、オレたちはロケット団を倒すだけだな」

「そう言うことになるな」

「じゃあ、早速アクア遺跡に行こう」

「ああ」

こうして、エメルとジムリーダーたちはアクアマリンの郊外にあるアクア遺跡へと向かったのである。

遺跡には警官がいたが、ジムリーダーであることの証明と会長からのサインにより、入ることができるようになった。

「よし。アズリノとゲンダイとグリーズは後ろを。ジュウベイさんとアクレスとエメルは真ん中を。俺とリュウトとハールは前という隊列で中に入るぞ」

アクア遺跡の前でファーツがそう言った。

隊列を作ったエメルたちはアクア遺跡の中に入った。アクア遺跡は、水がぼたぼたと音を立て、遺跡のイメージを崩さない壁作りだった。

エメルたちは着々と奥に進んでいった。ファーツはトラップがあるかないかを気にしていたが、トラップなどまったくなかった。

すると、二つに分かれた分かれ道が現れた。

「分かれ道だ……」

ファーツはそうつぶやいた。

「どうするんじゃ？　ここは二手に分かれるか？」

「そうしましょう。では、後ろの三人と中のエメルをのぞいた二人は左の道。エメルと前列の俺たちは右の道に行く」

ファーツがそう指示し、アズリノ。ゲンダイ。グリーズ。ジュウベイ。アクレスは左の道。エメル。リュウト。ハール。ファーツは右の道に行った。

左の道に行ったジムリーダーたち。

彼らが奥に進んでいくと、そこにはなにやら古代の文字が書かれていた。

「なにが書かれているのでしょうか？」

「わからないわね。ジュウベイさんは読めます？」

「うむ。読むことはできそうじゃ」

すると、ジユウベイはその文字を読み始めた。

「ムッ。これは……」

一方、右通路に行った、エメルたち。

彼女らもどんだん奥に進んで行った。

すると、彼女らがついたのは大広間だった。

「……は……?」

エメルがそうつぶやいた。

「おい誰かがいるぞ!」

そう言ったのは、ファーツだった。

「ふふ。ここに来たとはおろかなもの……。我らにたてつくというのか」

大広間にいた黒いコートの大柄の男が言った。顔は後ろを向いているのでわからない。

「あんたは誰や!」

「オレの名はサカキ。ロケット団首領だ」

サカキと名乗る人物はそう言いこちらを向いた。

「お前がロケット団首領か。悪いがここでお前を倒しロケット団は解散してもらう」

「そんなことができるかな。行け！ ニドキング！ ニドクイン！」

「行け！ ジュカイン！」

「行くんや！ ハガネール！」

「行け！ トドゼルガ！」

「頼むわよ！ サート！」

サカキはニドキング。ニドクイン。ファーツはジュカイン。ハールはハガネール。リュウトはトドゼルガ。エメルはサート（サーナイト）を出した。

「四対二や！ 圧倒的にうちの有利やで！」

「どうかな」

こうして、エメルたち対ロケット団首領サカキのバトルが始まるのだった。

第三十四話終了第三十五話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード
ハウエン
バッジ：八個
マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV81

グラ（トドゼルガ）LV80

第35話 「野望と絶望」

「いくんや！ アイアンテール！」

「サート！ サイコネシス！」

「トドゼルガ！ れいとうビーム！」

「ジュカイン！ リーフブレード！」

エメル。リュウト。ファーツ。ハールの四人はポケモンたちに指令を出しサカキのポケモンたちに向かって攻撃をしていた。

ジュカインとサートの攻撃はニドキング。他の二匹の攻撃はニドクインに向かっていった。

「ニドキング！ ニドクイン！ アイアンテール！」

二匹は地面に向かってアイアンテールを放った。それにより、床の石がニドキングとニドクインを守る盾となった。

それにより飛びわざは防がれてしまった。だが、ハガネールはアイアンテールで盾を無理やり壊しジュカインはジャンプして上空から攻撃した。

「かえんほうしゃ！」

だが、それは予測されていたかのようにサカキの手持ちは盾を破られたと同時にかえんほうしゃを発射させ接近していた二匹に

ダメージを与えた。

「ニドキング！ メガホーン！ ニドクイン！ ばかじから！」

接近してきている二匹に対し攻撃を緩めない。ニドキングとニドクインは畳み掛けるように攻撃を仕掛けた。

「サート！ ニドキングにサイケこうせん！」

「トドゼルガ！ ニドクインにれいとうビームだ！」

ひるんでいるジムリーダーのポケモンたちを守るため接近していない二匹は飛びわざで二匹を守ろうとした。

しかし、ニドキングとニドクインは軽々とそれをかわし、ジムリーダーのポケモンに攻撃を加えた。

「手を緩めるな！ ニドクイン！ かわらわり！ ニドキング！ ふぶき！」

ニドキングとニドキングは止めの一発をハガネールとジュカインにあて。二匹を戦闘不能とさせた。

「戻るんや！ ハガネール！」

「戻れ！ ジュカイン！」

ジムリーダーノ二人は手持ちを戻した。

「くっなんて奴だ。我らジムリーダー二人を倒すとは……」

ファーツがつぶやいた。

「しょせんきさまらジムリーダーなどのレベルはその程度。さて、残りのガキも始末する。かえんほうしゃ！」

サカキの手持ちは一気にかえんほうしゃを放ってきた。それをサートはサイコキネシスで。トドゼルガはあついしぼうでわざをくいとめた。

「サート！ サイケこうせん！」

「トドゼルガ！ れいとうビームだ！」

二匹はそれぞれ異なったポケモンに対しわざを発射させた。しかし、そのわざは先ほどと同じく簡単にかわされてしまった。

「どうやら同じわざは効かないみたいだな……」

「そうみたいね……。なら別のわざで攻撃するまで！ サート！ シャドーボール！」

「トドゼルガ！ アイスボールだ！」

二匹は再度攻撃を始めた。

「アイアンテール！」

二匹はアイアンテールで先ほどと同じく盾を作り二つのわざから身を守った。

「サート！ サイコネシスで岩の盾をどかすのよ！」

「トドゼルガ！ どかされたらアイスボールだ！」

サーとはサイコネシスでニドキングとニドクインを守っている盾をどかした。

そして、岩がどいた瞬間にトドゼルガはアイスボールを放った。

「かえんほうしゃ！」

だが、アイスボールは二匹のかえんほうしゃにより、溶かされてしまったうえ、トドゼルガにダメージを与えた。

「くっ……。なんて奴だ。アイスボールを溶かしたうえトドゼルガにダメージを与えるなんて」

「リュウト！ 来るわよ！」

リュウトが少し考えているとニドキングがトドゼルガに向かって来ている。

「トドゼルガ！ れいとうビーム！」

「サート！ サイコネシスよ！」

「かわせニドキング！ ニドクイン！ シャドーボール！」

ニドキングはれいとうビームだけをかわした。サートのサイコキ

ネシスはシャドーボールに当たってしまい、ニドキングには届かなかった。

「きあいパンチ！」

そして、接近してきていたニドキングはトドゼルガにきあいパンチを入れた。

「トドゼルガ！」

「十万ボルト！ ニドクインはシャドーボール！」

ニドキングは近距離の十万ボルトをトドゼルガに当てた。

ニドクインのシャドーボールはサートに向かっていった。だが、それはサートのサイケこうせんによりとめられてしまった。

「くっ戻れ！ トドゼルガ！」

トドゼルガはニドキングのきあいパンチと十万ボルトにより戦闘不能となってしまうため、リュウトはトドゼルガをボールに戻した。

「エメルさん。わかっているとは思いますが気をつけてください」

「ええ」

そのときだった。エメルたちが来た道から左の道に行ったジムリーダーたちがやってきた。なにやらあわてている。

「どうした？」

「この遺跡に伝説のポケモンが住んでいたらしい！」

「なんだと！？」

ゲンダイがそう言ったときサカキが突然笑い出した。

「なにがおかしい！」

「そんなことも知らずここに来たとはおろかなものたちめ。その伝説のポケモンを取り返しに来たと思ったがオレの勘違いだったようだ」

「まさか伝説のポケモンを捕まえたって言うのか？」

「そうだ。伝説のポケモン『ラティオス』と『ラティアス』こいつらがいればダーク団など簡単に滅ぼすことができる。そして、このことを知ったお前達もな！」

サカキはそう言うのと新たに腰につけているボールに触れ投げた。そこからは、似通ったポケモンが二匹出てきた。違いといえば目と赤と青の違いだけである。

「あれが、ラティオスとラティアス……」

「撤退だ！ 撤退するぞ！」

ラティオスとラティアスが出てきたとき、リュウトはそう大声でいた。

それ聞いたファーツはリュウトと同じことをいい、この場から撤退を始めた。

だが、その場からエメルは動かなかった。

「エメルさん！」

「リュウトたちは先に行つて。私が足止めをするわ」

「でも……」

「いいから！」

「おろかな小娘め！ ラティオス！ ラスターパージ！ ラティアス！ ミストボール！」

「サート！ サイコネシス！」

サートは二つのわざにサイコネシスで対抗した。だが、その差は一目瞭然でサートは大ダメージをおった。

「サート！ 戻つて！」

「さあ、早く行こう！」

リュウトはそう言うときエメルの手を引っ張りながらその場から逃げていった。

エメルは抵抗をするが、男のリュウトの力からは逃れられなかつ

た。

「ふう。とりあえず全員無事のようだな」

エメルとリュウトが遺跡から出てきてからあたりを見回しながらファーツが言った。

「会長がここに行けといったのは伝説のポケモンをあの方へ渡さないためだったのですね」

アズリノが言った。

「そのようだ。とりあえず会長の安否が現在どうなってるかをグリーンたちに聞こう。それと、このことも伝えておかねばな」

ファーツはそう言うのとポケギアを取り出し、電話をかけた。その時、アクア遺跡から一つの光が飛び出していった。

「今何かが飛んでいったようじゃな」

「ええ。どうやら、さっきの悪党がこの遺跡から離れたのでしょう」

「そして、目的地はおそらく……」

「このこともグリーンに連絡をしておくでしょう。お、グリーンか。知らせがある」

ファーツが電話をしている途中、エメルはリュウトに言った。

「どうして！ どうして私に戦わせてくれなかったの！」

「どうしてって言われたって……。あの場面では逃げるしか手はなかったんだよ。エメルさんだってそれはわかっていただろ？」

「でも……。でも、このままあの二匹をサカキの手においておくなんて……」

「それはこれから何とかしよう。サカキの向かった場所は、マイティラビリンスのはず。そこへ行けばサカキと再度会うことはできる。だけど、サカキのあの強さ。そして、あの二匹の強さに勝つことができればけど」

「これからマイティラビリンスに行くって言っの？」

「ああ。どうやらこの後は行くことになりそうだから。ん？ どうやら、ファーツの電話が終わったみたいだ」

リュウトはファーツがポケギアをしまったのをみてそういった。そして、ファーツは言った。

「これからグリーンたちの手助けをするため、マイティラビリンスへと向かう。港へ向かい船を借りるぞ」

ジムリーダーたちとエメルとリュウトはアクアマリンの港へと急いだ。

彼らもマイティラビリンスに向かうことになったのだった。

第三十五話終了第三十六話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個^{ホウエン}マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個^{ホウエン}マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV81

グラ（トドゼルガ）LV80

サート（サーナイト）LV79

第36話 「迷宮の壁」

「わかった。俺らか？ 俺らは今マイティラビリンスの入り口に来ている。わかった。こっちは先に進んでおくからお前達は後から追いかけてくれ」

グリーンはそう言うのとポケギアをしまった。

「誰からだ？」

「ファーツだ。ジムリーダーたちが向かっていた場所はアクアマリンにあるアクア遺跡だった。そこで、ロケット団首領のサカキと出会ったそうだ」

「ロケット団首領！」

「ああ。サカキの奴はラティオスとラティアスの二匹を捕まえこのマイティラビリンスにやってきたようだ」

「ラティオスとラティアス？」

ラルドはそう復調しつぶやいた。

「ラルドくんどうしたの？」

「いや、ちょっとこれを見てください」

ラルドはそう言うとりュックから紙切れ（第五話を参照）を一枚取り出した。そして、それをクリスに渡した。

「ここにラティオスとラティオスとラティアスという文字が書かれていますよね」

「本当だわ……」

「これをどこで手に入れた？」

「ドロップシティとロイヤルシティの間にある森に落ちていました」

「……。この文の内容からしてこれはダーク団が書いたものだな。どうやら、奴らは先に越されたということか」

「だな。それより早く行こうぜ。こんな薄気味悪いところにずっといたくないからな」

レオがそう言うのと他の三人は再度辺りを見回した。

上が見えない岩山。おそらく上から見ればそこは断崖絶壁だろう。空は暗く雷雲が漂っている。奥の洞窟はまっくらで何も見えない。

「そうね。行きましょう、グリーンさん」

「わかった。出て来い！ ゴルダック！ フラッシュだ！」

グリーンは承諾するとゴルダックを出し、フラッシュを指示した。

ゴルダックのフラッシュにより暗かったあたりは明るくなった。

ラルドたちはその光を頼りに奥へと進んでいった。

洞窟はしとしとしており、時々水が落ちる音がした。

「ん？ なにをやってるんですか？ レオさん？」

歩いている時ラルドはレオにたずねた。なにやら壁に跡をつけながら歩いている。

「ここはラビリンスという名の迷宮だぜ。後をつけておくにこしたことはないと思うぜ」

「レオの言うとおりだ。迷った時にはその跡を頼りにするしかない」
それから歩いていくこと数十分。前には巨大な壁が現れた。

「でっけえ！」

レオは壁を見てそう言った。

「ねえ、壁に炎のようなマークが付いているわよ」

「本当だ。ということはここが最初の壁……炎の関門！」

「そのようだな。ならば突破する！ 行け！ ファイヤー！」

グリーンはファイヤーを出した。すると、あたりはフラッシュをしているときよりも明るくなった。

「これがファイヤー……」

「そうだ。さて、ファイヤー。あの壁に向かってだいもんじだ！」

ファイヤーはそう指示されると壁に向かいだいもんじを放った。通常のだいもんじよりも数倍大きく、威力も数倍強い。

だいもんじが壁に当たってからだいもんじを続けていると、壁に記されていた炎のマークの色が消えた。

それを見たグリーンはファイヤーに攻撃を止めるように指示しポールに戻した。

「さあ行くぞ！」

グリーンはそう言う壁に向かって走り出した。それに続き、ラルド、クリス、レオの順番でついていく。

すると、壁の下に小さな道ができており、そこに入ると天井が低くなったが、さらに奥に行くと天井は高くなった。

「どうやら炎の関門は突破できたようだな」

レオがそう言った。

「そのようだ。だが、このまますんなりと奥には進ませてくれそうもないぜ」

グリーンはそう言う奥の道をフラッシュで照らした。それによりラルドたちのいる場所は暗くなった。

奥の道を見ると、そこにはアルドスが立っていた。

「よくわかったな。私がここにいるということが」

「そりゃそうさ。お前は息を殺していたみたいだが完全は殺せてなかったからな」

「なるほど。まあそんなことなどどうでもいい。お前達にはここでお引取り願おう」

アルドスはそう言うと言いつつライトをつけジュカインとプテラを出してきた。

「面倒なまねを……」

「やるしかないようだな。ならばやってやるぜ！」

「待って！」

レオがボールを出そうとしたのをクリスはとめた。そして他の二人のもの。

「アルドスは私がひきつけるわ。あなた達は奥に進んで」

「でも、クリスさん一人じゃ……」

「大丈夫。一回戦った相手なんだしね。それよりあなた達は早く奥に」

「わかった。頼んだぞ、クリス。さあ、行くぞ」

「ええ。行くのよ！ ムウマとキリンリキ！」

クリスはムウマとキリンリキを出した。そして、ジュカインとプテラをひきつけるために攻撃を始めた。

「今だ！」

グリーンは通り抜けられるタイミングを見計らうとそう言い走り出した。ラルドとレオはそれに続く。

「なに！？ 奥に行かれてたまるものか！」

それに気づいたアルドスはラルドたちに攻撃のターゲットを移したが、クリスの攻撃によりそれを阻まれた。

「そんなことはさせないわ！ あなたの相手は私よ」

「くっ。ならばお前を倒すまでだ！ 行け！ ジュカイン！ プテラ！」

「させるもんですか！」

エメルとアルドスの本気の戦いが始まったころ、ラルドたちは奥へ奥へと向かっていた。

あたりはフラッシュで明るくはなっているが、フラッシュの範囲が消えてしまうとまったく見えない状況なので、走ることはできず、歩いていた。

「クリスさんは大丈夫かな？」

「大丈夫さ。あれでもなかなかの実力を持つてるんだから」

「でも、相手はアルドスですよ。俺たちがいつぺんに戦ったのに倒すことができなかった」

「それでも今はクリスを信じるしかないさ。オレたちは一刻も早く奥に行かないとな」

「そうですね」

ラルドたちは奥へとどんどん進んでいった。次は一体なにが待ち構えているのだろうか。

第三十六話終了第三十七話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV80

クイック（オオスバメ）LV71

ゲイト（ワニノコ）LV74

ロック（ボスゴドラ）LV72

フライ（フライゴン）LV73

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV85

グラ（トドゼルガ）LV82

サート（サーナイト）LV82

第37話 「はなればなれ」

「これが雷の関門……」

ラルドはそうつぶやいた。そう、ラルドたちの前には雷のマークが付いた巨大な壁の前に来ていたのだった。

「そのようだな。よし、出て来い！ サンダー！」

グリーンはボールを取り出しそれを投げた。すると、急にあたりが明るくなり、伝説のポケモンと呼ばれるサンダーがラルドたちの目の前に現れた。

「これがサンダーか……」

「始めてみたな」

「だろうな。そんなことなどどうでもいい。サンダー！ かみなりでその壁に攻撃だ！」

サンダーは壁に攻撃をした。すると、炎の関門の時と同じように壁の下に小さな道が現れそこを通っていった。

そして、道を通り過ぎてからレオは言った。

「これで第二の関門はクリアだな。次は問題の水の関門だな」

「ああ。こいつの力をそのまま使えないのが痛いかな」

グリーンは一個のボールを持ちながらそういった。

「次の関門などにはいかせん」

すると、そのような声が聞こえた。グリーンはゴルダックのフラッシュを奥まで照らすようにさせるとそこには、赤い服をまとったアルドスに似た者がいた。

「誰だ！」

「私はエルデス。ダーク団幹部だ。ここから先はお前らなどに行かせるわけにはいかん。ここで始末する」

そういうとエルデスと名乗るダーク団幹部は、バシャーモとニョロトノを出してきた。

それに対抗しラルドがボールを手にしようとしたときにレオはそれをとめた。

「待て。あいつはオレが引き受ける」

「レオさん？　なにを言ってるんですか？」

「いいから。奴はオレの手で倒してやる。だから、グリーンとラルドは先に行け」

「いいだろう。ここはお前に任せた。行くぞ、ラルド」

「でも……」

「いいからとつと行きな！　ラルド！」

「レオさん……。わかった、でも負けないでね」

「ああ。さあ行け！」

レオのその一言でラルドとグリーンは奥へと走って行った。

エルデスはその姿をじっと見つめているだけで何の手出しでもしなかった。

それから奥へとどんどん走っていった二人。そして、ついに第三の壁である水の関門へと到着した。

「これが水の関門か……」

「こいつをどうにかするのが俺たちの役目。行け！　フリーザー！」

グリーンはフリーザーを出した。フリーザーが出ると、あたりは少し冷え込んだ。

それだけフリーザーの冷気が強いのだろう。

「出て来い！　リザードン！　サイドン！」

グリーンはさらにリザードンとサイドンを出した。

「さあ、お前もほのおタイプの攻撃を出せるポケモンを出せ」

「わかった。頼んだぜ！　フライとロック！」

ラルドはフライ（フライゴン）とロック（ボスゴドラ）を出した。

「ほのおタイプのポケモンはいないのか？」

「うん。あいにく手持ちにはいない。でもこいつらはほのおタイプの攻撃は出すことができますよ」

「それはいいが、これだけで火力は足りるだろうか……。まあいい。フリーザーのふぶきと同時に攻撃をするんだ。いいな？」

「わかりました」

「よし、フリーザー！ ふぶき！ リザードンとサイドン！ だいまんじだ！」

「フライ！ ロック！ だいまんじ！」

フリーザーのふぶきに四匹のだいまんじが当たる。それによりふぶきは徐々に液体化し始めた。

しかし、それほどこの関門を越えるのはあまくなかった。

液体化したはいいが、肝心の威力が落ちてしまった。威力が足りなければ関門を突破することなどできない。

「くつ。無理なのか……」

「まだまだ！ あきらめないぞ！ ハイドロポンプだ！ ラグ！ ゲイト！」

ラルドはそう言いながらラグ（ラグラージ）とゲイト（ワニノコ）をくりだした。

そして、その二匹はフリーザーの勢いのない水に対してハイドロポンプを放った。

「なんだと!？」

グリーンは驚いた。それにより、勢いのない水が一気に威力を増したのだ。

そして、その威力のある水が壁へとぶつかる。強力な水圧が壁にかかった。

すると壁に小さな道が現れた。

「よし！ 道ができたぜ！ よくやったぞ！ みんな！」

ラルドは手持ちと一緒に喜んだ。

「まさかあれで突破できるなんて……。まあいい、戻れ、フリーザー、リザードン、サイドン。さあ、ラルド行くぞ！」

グリーンは手持ちのポケモンを戻すと道に入っていった。

ラルドもボールに戻し、グリーンの後を追った。

そして道を出るとまたしても敵が現れた。

「よく水の関門を突破することができたな」

「誰だ！」

「おれはわかるだろう？ グリーン。この声を聞けばな」

「……」

「どういことですか？ グリーンさん？」

「……。ゴルダック、フラッシュで照らせ」

ゴルダックは先ほどと同じように奥のほうを照らした。すると、そこには一人の身長が高く体がつちりしている男がいた。

「もういい。こいつを使えばこの辺など照らせる。ゴルダックを戻しな」

その男はそう言つとその場を明るくさせた。

すると、グリーンは指示通りゴルダックをボールに収めた。

「久しぶりだな、グリーン」

「……」

「おや？ だんまりか。寂しい奴だな。五年ぶりの再会だというのにな」

「お前などと再会はしたくない」

「そんなことをいつていいのかなグリーン」

「お前は一体誰なんだ！」

ラルドはグリーンと男の会話の途中に入りそうだった。

「おれはブレック。グリーンの知り合いでありライバルでもある。そして、このダーク団の幹部」

「ダーク団……幹部」

「お前などに興味はない。さあ、グリーン。おれとバトルをしようじゃないか！ お前との対決に決着をつけてやる！」

「させるか！ お前の相手は俺だ！」

ラルドはグリーンの間に入った。

「言っただろう。お前に興味はない。そこをどけ」

「嫌だね。グリーンさん。早く奥へ行ってください。ここは俺が…

…」

「奴の相手は俺じゃなければ務まらない。奴は俺が倒す」

「でも……。デスゴールドを倒すのはグリーンさんしか」

「お前がいるだろ、ラルド。お前が奴を倒して来い」

「しかし……」

「俺のいうことを聞け。お前はレッドに認められた。ならば奴を倒すことだってできるはずだ。さあ行け！」

グリーンはそう言うつとラルドを押し分け、サイドンを出した。

「グリーンさん！」

「……」

グリーンはバトルに集中し始めた。ラルドの声はもう届かないらしい。

「……。わかりました。俺はデスゴールドを倒してきます！ だから、グリーンさんも奴を倒してくれ！」

ラルドはそう言うつと奥へと走っていった。それをブレックはとめようとしなかった。

そう、グリーンとのバトルに集中しているのだ。

それからラルドは必死に走った。三つの関門が終わった今。デスゴールドがいる場所は近いのだ。

そして、ラルドは巨大な部屋へと到着した。

あたりは暗くじめじめしている。光は壁につけられた電気の光しかない。

その中央には誰かがいる。

「ようやく来たか……」

「デスゴールド！ お前もここで終わりだ！」

「そういつてきた奴が何人もいた。だが、私にかなうものは一人と
していなかった」

「なにを言っている！」

「そう、私にかなうものなどいないのだよ。そして、お前も私には
かなわん！」

デスゴールドはそう言うのと、サイドンとエレブーを出してきた。

「行け！ ラグとロック！」

ラルドはラグとロックを出した。

「俺は絶対に負けない！ お前なんかには！」

ラルドとデスゴールドの戦いの火蓋が切って落とされた。

乗り込んだ四人のバトルの結末は一体どうなってしまうのか……。

第三十七話終了第三十八話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個^{ホウエン}マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラゲ（ラグラージ）LV81

クイック（オオスバメ）LV73

ゲイト（ワニノコ）LV75

ロック（ボスゴドラ）LV75

フライ（フライゴン）LV75

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個^{ホウエン}マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV85

グラ（トドゼルガ）LV82

サート（サーナイト）LV82

第38話 「因縁」

「ラグ！ ハイドロポンプ！ ロック！ いわなだれ！」

ラグ（ラグラージ）はハイドロポンプでサイドンを。ロック（ボスゴドラ）はいわなだれでエレブーを攻撃した。

しかし、サイドンはサイドンと思えぬすばやさであなをほるをしてハイドロポンプをかわし、エレブーはかみなりパンチで岩をすべて打ち砕いた。

「なに！？」

「そんなものきかん！ サイドン！ メガホーン！ エレブー！ 十万ボルト！」

メガホーンはラグへ。十万ボルトはロックへとヒットした。

「なっ！」

「ロックブラスト！」

ラグはメガホーンによって空へと放り投げられた。そして、ロックブラストによる攻撃のダメージも受けた。

「ロック！ アイアンテール！」

ロックブラストでラグに攻撃を集中させているサイドンにアイアンテールで攻撃をした。

それは当たったが、ロック自身もダメージを受けてしまった。フリーになっっているエレブーからの十万ボルトを受けたのだ。

「負けるな！ ラグ！ みずのはどう！」

落ちてきたラグは何とか体勢を整えみずのはどうでエレブーを攻撃した。

そして、いったんポケモンたちはトレーナーの前に戻るのだった。

「くっ、ラグ！ ロック！ じしんだ！」

「サイドン！ いわなだれ！ エレブー！ みがわり！」

ラグとロックのじしんは巨大なものへと変貌した。二匹の間でじしんのエネルギーがぶつかり合い、お互いをじしんから守った。

そして、相手に向かっていったじしんのエネルギーは重なり合い巨大なものとなったのだ。

だが、いわなだれで起こされた岩の上に乗ったサイドンはそれらのダメージを岩に受けさせ、エレブーはぶんしんにダメージを受けさせたため、ダメージを与えることができなかった。

「その程度なら私には勝てん！ サイドン！ アイアンテール！ エレブー！ かみなりパンチ！」

サイドンは乗っていた岩に向かっていアイアンテールをした。そして、砕けた岩をエレブーがかみなりパンチで飛ばした。

それらの岩はラグとロックへと飛んでいった。まさに、横から来るいわなだれだ。

「ラグ！ ロック！ あなをほるで回避だ！」

ラルドはラグとロックを地中へと回避させた。すると、それを見たデスゴルドはサイドンに自身の指示を出した。

それにより地中にいる二匹は大ダメージを受けてしまった。エレブーはみがわりによるあまっていたぶんしんでそれを乗り切った。

そして、地中に戻ってきた二匹のうちロックは戦闘不能となってしまった。

「戻れ！ ロック！ 頼んだぜ！ フライ！」

ラルドは次のポケモンであるフライ（フライゴン）を出した。

「フライ！ りゅうのいぶき！ ラグ！ ハイドロポンプ！」

「いわなだれ！」

サイドンはいわなだれで盾を作り出し、二つのわざを防いだ。

「くっ！」

「サイドン！ つのドリル！ エレブーは砕けた岩をかみなりパンチ！」

サイドンは落とした岩をつのドリルで破壊し始めて、砕けた岩をエレブーのかみなりパンチでラグたちへと攻撃した。

「フライ！ 地面にはかいこうせん！ ラグはサイドンにれいとうビームだ！」

フライが地面にはかいこうせんを放つ前にラグはサイドンにれいとうビームで攻撃した。サイドンは残っている岩でかわそうとしたが、岩がほとんど崩れてしまっており、かわすことはできなかった。

フライのはかいこうせんで地面のものが上へと押しあがりそれによる一瞬ばかりの盾を作り出して、横からのいわなだれを防いだ。

「ラグ！ ハイドロポンプ！」

上へと押し上げた盾が崩れる少し前にラグは一気にハイドロポンプを放った。

予想はしていたが、予想外に早く攻撃されたためデスゴールドはサイドンに指示をすることができず、ハイドロポンプをともに受けてしまった。そして、サイドンは戦闘不能となってしまった。

「戻れサイドン。ふん！ あのとよりかは強くなったようだな」

「あの時はゲイトだけだ！ 俺の本当の實力じゃなかったんだ！」

「ならばこれがお前の本当の實力とでも言うのか」

「そうだ」

「その程度の実力だったというわけか。ならば私にはかなわん」

「なんだと!？」

「私には巨大なる力があるのだ。伝説のポケモンと呼ばれる、ライコウ、エンテイ、スイクン、サンダーは我が手中にある。お前などにこいつらを倒すことができるわけがない」

「そんなのはやってみなければわからない!」

「ほう、ならばやってみるか？ 戻れエレブー」

デスゴルドはエレブーを戻すと、二つのボールを取り出した。そして、それを投げるとそこからはエンテイとスイクンが現れた。

「あれがエンテイとスイクン……」

「そう。ジョウト地方に伝わる三匹のポケモンのうちの二匹だ。さあ、行けエンテイ！ スイクン！」

すると、エンテイとスイクンはラグとフライめがけて走り出してきた。

「ラグ！ みずのはどう！ フライ！ ドラゴンクロー！」

「エンテイ！ ダークラッシュ！ スイクン！ れいとうビーム！」

エンテイはみずのはどうをかわし、ラグにダークラッシュをくらわせた。

スイクンはフライのドラゴンクローをかわしてれいとうビームをくらわせた。ラグとフライ。共に攻撃を当てることができなかった。

「ダークポケモンか！　ラグ！　もう一発みずのはどう！　フライもだ！」

ラグはのしかかれたエンティに対してみずのはどうを放った。それはあたりエンティはラグとの距離を少しばかり空けた。

フライはスイクンに近づいてドラゴンクローで攻撃をしたが、あっさりとかわされてしまい再度れいとうビームを受けてしまった。

それにより、フライは戦闘不能となってしまった。

「フライ！　くそ戻れ！」

「伝説の力に加えダークポケモンと化したこいつらには到底及ぶまい。もつとも、エンティのダークラッシュを受け前の戦いからいたそのラグラージだけは及ぶかもしれんがな」

「ラグ……」

改めてラルドがラグを見ると、ラグは疲れていた。デスゴールドが言ったとおり敵との最初の戦いからいるのだから無理はないだろう。

「さあ、ここでそのラグラージにも止めをさすか。エンティ！　スイクン！　ダークラッシュだ！」

エンティとスイクンはラグラージめがけて攻撃をしてくる！

「ラグ！ あなをほるだ！」

ラグはあなをほり地中に隠れた。

「無駄だ！ エンテイ！ かえんほうしゃ！ スイクン！ ハイドロポンプ！」

「頼んだ！ クイック！ つばめがえしで注意を向けさせるんだ！」

ラルドは二匹が穴に来る前にクイック（オオスバメ）を出し、つばめがえしで攻撃した。

そのうちにラグは地中から戻り、みずのはどうで攻撃をした。

「ごさかしいわ！ スイクン！ ふぶき！ エンテイ！ かえんほうしゃ」

エンテイはみずのはどうによるダメージを受けたが、それをもろともせずクイックにかえんほうしゃを放った。

そして、スイクンによるふぶきで、クイックの翼は凍ってしまい地上へと落ちてきた。

「クイック戻るんだ！」

ラルドは急いでクイックをボールに戻した。そのうちにエンテイとスイクンは攻撃をしかけてきている。

「ラグ！ じしんだ！ 頼んだ！ ゲイト！」

ラグはじしんを起こしエンティとスイクンにダメージを与えた。しかし、それをもろともせずラグのところへと向かってきている。

しかし、ここはゲイト（ワニノコ）によるハイドロポンプとラグのはかいこうせんで彼らの動きをとめさせた。

「まだワニノコとはたいしたことがないんだな」

「うるさい！ ラグ！ じしんだ！ ゲイトはラグの上に乗れ！」

ラグはじしんをおこした。ゲイトはラグの上に乗りそれから身を守った。

一方のエンティとスイクンはじしんから身を守ろうとせずただじしんを受け流した。

「なに！？」

「そんなものなど聞かんわ！」

「本当はきいているのだろう？」

デスゴールドが大声を放つと室内にそのような声が聞こえた。

「ダークポケモンと化したポケモンはダメージを受けても表情に出さない。だから、聞いていないだけだというのだろう？」

「チッ！ きさまが来るとはな！ とつとと姿を現せ！」

デスゴールドがそう言うと、ラルドとデスゴールドの間に一人の男が

現れた。

その男は黒いコートを来ていて、デスゴルドのほうへと向いているため顔ははっきりと見えない。

「だれだ！ 邪魔をするな！」

ラルドがそういった。すると、その男はこちらを向いた。胸の辺りにRのマークが付いている。

「お前は邪魔だ。ニドキング！ いわなだれだ！」

その男はニドキングを出し、いわなだれをした。その岩によってラルドは閉じ込められてしまった。

「さて、デスゴルドよ。ここで決着をつけさせてもらうぞ」

「そんなことなどできるのかなサカキ。私を倒すことなどできんぞ」

デスゴルドはそういった。一体、この二人の関係は一体なんなのだろうか……。

第三十八話終了第三十九話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV82

クイック（オオスバメ）LV73

ゲイト（ワニノコ）LV75

ロック（ボスゴドラ）LV75

フライ（フライゴン）LV75

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV85

グラ（トドゼルガ）LV82

サート（サーナイト）LV82

第39話 「謎がつれてきた復活」

「ニドキング！ ニドクイン！ ヘドロばくだん！」

サカキはニドクインをさらにだし、エンテイとスイクンに立ち向かっていった。二つ分のヘドロばくだんをエンテイとスイクンはあっさりとかわした。

ラルドはその光景を岩から脱出しようとしながらそれを見ていた。外にいるラグ（ラグラージ）とゲイト（ワニノコ）はそれを手伝っている。

だが、そんなのをしているうちにサカキとデスゴルドは戦いを続けている。サカキと呼ばれた男はなかなかの実力だということがラルドは知った。だが、その実力を有しているものでさえエンテイとスイクンに圧倒されている。

「スイクン！ ハイドロポンプ！」

ハイドロポンプがニドキングとニドクインに当たった。すると、サカキはその二匹を戻した。

「私の力に恐れ入ったか！」

デスゴルドがそう大声で言うと、サカキは笑い出した。

「恐れ入っただと？ 笑わせるな。オレにはこいつらがいるのさ」

そう言うとサカキは二つのボールを空へと投げた。すると、似通

ったポケモンが二匹出てきた。違っている場所は目と赤と青の違いだけである

「き、きさまそいつをどこで……」

「そんなことを知る必要はないだろう？ このラティオスとラティアスをお前達より先に手に入れた。それだけでいいだろう。さあ、行けラティオス！ ラティアス！」

ラティオスとラティアスと呼ばれたポケモンをラルドは知っていた。以前、森で拾ったあの紙に書かれていた名前だ。あの文書はダーク団が作成したものだったらしいが、ロケット団の手に入ってしまったのだ。

二匹は、サカキに指示されるとエンテイとスイクンに向かって攻撃を放った。ラスターパージとミストボールというわざで攻撃をしている。

だが、エンテイとスイクンも負けてはいない。かえんほうしゃやハイドロポンプ、れいとうビームなどで確実にサカキの二匹攻撃をしかけている。

「ダークラッシュ！ ラティオス！ ラティアス！」

だが、サカキの二匹も負けてはいなかった。サカキの二匹のポケモンもダークポケモンだったのだ。

「きさま、ダークポケモンにどこで……。我らダーク団の技術を……」

「そんなのは簡単だ。きさまのアジトからデータを盗めば簡単にできる」

そう言うと、ラティオスとラティアスはなおもダークラッシュで攻撃をしている。それに対してエンティとスイクンはダークラッシュで攻撃はせず通常攻撃で攻撃していた。

その様子だと一見サカキが優勢だと思われた。しかし、現状は違った。それどころか攻撃をしているラティオスとラティアスの方がダメージをおっていた。

「エンティ！ かえんほうしゃ！ スイクン！ れいとうビーム！」

「ラティオス！ ラスターパージ！ ラティアス！ ミストボール！」

デスゴルドのダークポケモンとサカキのダークポケモンの通常攻撃どうしがぶつかり合った。すると、エンティとスイクンの攻撃がラティオスとラティアスのわざを押し切り二匹にダメージを与えた。

「なんだと！」

「スイクン！ れいとうビームでとどめをさせ！」

スイクンは二匹にれいとうビームを与えた。それにより二匹は戦闘不能になってしまった。

「くっ、戻れ」

「かかか。お前は知らぬのだな。ダークラッシュは自分自身を傷つ

けること。ダークポケモンに対してダークラッシュはほとんど聞かないことをな！」

「行け！ サイドンとダグトリオ！」

サカキはサイドンとダグトリオを出してきた。

「まださかるといっか。ならばここできさまを葬ってやる」

「たわけことをいうな。サイドン！ 行け！」

サイドンはエンテイとスイクンに向かっていった。

「一体どうすれば……！ 後はこいつしか……」

ラルドは先ほどから閉じ込められた岩の檻から出ようとしてと試みているのだが、脱出することができなかった。そして、ラルドは一つのボールを手にした。だが、それを投げポケモンを出す勇気がなかった。

そんなときだった。聞き覚えのある女の子の声が聞こえたのだ。

「大丈夫？ 今助けてあげるわ。クーチ！ かわらわりからはかいこうせんよ！」

クーチと呼ばれたクーチトは、かわらわりをしてひびを作り出しそこをはかいこうせんで打った。

すると、一気にそこが崩れた。後は手で岩さえどかせればいいというところまで来たので、ラグたちで作業を行った。

そうして、ラルドは閉じ込められた岩の中から脱出することができたのだった。

「ありがとう、エメル。一体どうやってここまで？」

「ジムリーダーのみんなに手伝ってもらったわ。来るまでに、戦っている人たちがいたからその人たちのサポートとして私以外の人は残っているわ」

「そうか。それより俺らに課せられた使命をやり遂げよう、エメル！」

「ええ！ わかったわ！」

そう言うラルドはラグをいったんボールに戻した。疲れているラグをこのまま戦わせるわけにはいかないのだろう。

「ゲイト！ ハイドロポンプだ！」

「クーチ！ げんしのちからよ！」

ゲイトのハイドロポンプはエンティに。クーチのげんしのちからはスイクンに当たった。

「邪魔をするな！」

それに気づいたサカキは、サイドンとダグトリオによるいわなだれで攻撃を仕掛けてきた。

「同じ手なんてくらうもんか！」

ラルドはそう言いながらいわなだれをよけた。そして、エメルも「俺らはお前らを倒す！　そして、ロケット団もダーク団も倒してやるぜ！」

「そして、この地上からダークポケモンをなくすわ！」

ラルドとエメルがそういった。すると、サカキとデスゴルドは笑い始めた。

「私らを倒すだと。そんなことが一体できるものかね。だが、どうやらお前らは危険な芽のようだ。危険な芽は排除してやろう」

すると、デスゴルドはエンテイとスイクンを戻した。そして、新たなボールを一個取り出した。

それを見たサカキもサイドンをボールに戻して新たなボールを一個取り出した。

「デスゴルド。お前との決着はこのガキどもを倒してからにするとする」

「いいだろう。それまでは一時休戦だな」

サカキとデスゴルドはそのような会話をしてから、手にとっているボールを空へと投げた。すると、サカキのボールからは白の生命体。デスゴルドのボールからはオレンジ色の生命体が飛び出してきた。

「あ、あれは一体……」

「『データナシ。ミカクニンノポケモンデス』ですって!? まさか図鑑に何のデータも入っていないなんて……」

「それはそうだろう。私のポケモンは宇宙から来た」

「オレのポケモンは人工的に作り出したポケモン。そんなちんけな機械などにデータがあるはずがない。サイコネシスだ! ミュウツー!」

「デオキシス! サイコネシスだ!」

二匹の謎のポケモンたちはサイコネシスで攻撃を仕掛けてきた。それをかわそうとした、ゲイトとクーチだったが、あまりの速さにかわすことができなかった。

さらにそのサイコネシスの威力は絶大だった。伝説のポケモンのわざの威力と比にならないほどだ。

「ゲイト!」

「クーチ!」

「デオキシス! サイコブースト!」

巨大なエスパーの塊がゲイトとクーチに襲い掛かった。

「ぐわっ!」

そのわざによりゲイトとクーチどころかラルドやエメル。さらにはサカキまでもがその場から吹き飛ばされてしまった。あたりの岩も吹き飛び、さかさまの青い海が現れた。

その光景を見ていたデスゴルドは笑いながら言った。

「私に逆らうからだ！ サカキもそうだ！ 元から協力するつもりなどなかったのだよ」

「きさま！」

サカキは立ち上がろうとした。しかし、多大なダメージを受けているため立ち上がることができなかった。それはラルドとエメルも同じだった。

「さて、お前達の始末でもしてやろう。デオキシス！ めいそうだ！ そして、サイコブースト！」

デオキシスはめいそうを使い、失ったところこう分を元に戻した。そして、サカキたちめがけてサイコブーストを放った。

もうダメだと、思ったラルドとエメル。最後に巨大な爆発音を聞いた。

それから数秒間。ちんもくが続いていたが、ラルドはふと目を開けた。そこには見覚えのある。服装をしている一人の少年がいた。

「なさけねえな、ラルド。ほら、立てるか？」

ラルドはその少年の手を借りて立ち上がることができた。

「ハピナス、タマゴうみでラルドとエメルさんを回復させてあげてくれ」

その少年は近くにいた手持ちと思われるハピナスにタマゴうみをさせラルドとエメルを癒させた。それにより、痛みは残っているが自力で立つことぐらいはできるようになった。

「う、ゴールド……お前……」

「心配かけたな。だけど、その心配もこれで帳消しにさせてもらうぜ」

そう言う少年は少しラルドから離れ、ハピナスをボールに戻した。そして、バクフーンをボールから出した。

「ら、ラルド。あれはゴールドくんだよね？」

「ああ。そして、あのバクフーンはマグマラシか……」

ふと、ラルドはゴールドから視線をずらすと、そこではデスゴルドともう一人の見覚えのある少年が戦っていた。

「レッドさん！　じゃあ、ゴールド。お前……」

「ああ。俺は救われたのさ。さあ、そんなことより奴を倒すぞ。レッドさん！　今行きます！」

ゴールドはそういつて走り出した。レッドはフシギバナをだして、

デオキシスと呼ばれた謎のポケモンに立ち向かっていった。

「ゴールド……。エメル、俺たちも行こう」

「ええ。こんな痛み吹き飛ばすわ」

「待ってください、エメルさん」

ラルドとエメルがレッドとゴールドのところへ行こうとした時、後ろから声が聞こえた。二人は振り向くと、そこには、グリーン、レオ、クリス、リュウト、ジムリーダーたちがいた。

「俺らも戦いに加わらせてもらおう。いいな？」

「グリーンさん……。はい、がんばりましょう！」

「オレだって忘れてもらっちゃ困るぜ」

「わたしだって」

「オレもですよ、エメルさん」

「わかってるわよ、リュウト」

こうして、ラルドたちはレッドとゴールドの助太刀に入った。

ジムリーダーたちは、ミュウツーと呼ばれた謎のポケモンをサカキの持っていたボールに戻しサカキが動けないようにした。

ついに、ダーク団との決着が付くのだろうか。

第三十九話終了第四十話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマール島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV82

クイック（オオスバメ）LV73

ゲイト（ワニノコ）LV75

ロック（ボスゴドラ）LV75

フライ（フライゴン）LV75

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマール島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

ゴールドのトレーナーカード

バッジ：マール島バッジ：三個

手持ちポケモン

バクフーン（バクフーン）LV80

ヨルノズク（ヨルノズク）LV70

デンリュウ（デンリュウ）LV70

ヌオー（ヌオー）LV70
ハピナス（ハピナス）LV71

第40話 「八人のトレーナー」

「行くぞ！ ゲイト！」

「頼むわよ！ グリーン！」

「行け！ バシャーモ！」

「行け！ リザードン！」

「頼んだわよ！ メガニウム！」

「行け！ カメックス！」

ラルドは、ゲイト（ワニノコ）。エメルはグリーン（ジュカイン）。リュウトはバシャーモ。

グリーンはリザードン。クリスはメガニウム。レオはカメックスを出した。

そして、ゴールドのバクフーン。レッドのフシギバナの計八匹のポケモンたちがデスゴールドの持つデオキシスに立ち向かっていくのだった。

「フシギバナ！ はっぱカッター！」

「バクフーン！ かえんほうしゃ！」

フシギバナとバクフーンはデオキシスに攻撃を仕掛けている。し

かし、デオキシスはそれらをかわした。

ラルドがよく見るとデオキシスは、先ほどの形とは違っていた。なにやら敏速そうな形状である。

「な！ エメル！ あのポケモンの形を見てみる！」

それに気が付いたラルドはエメルにそういった。

「姿が違う……。どういうこと？ ポケモン自体は変わっていないみたいなのに姿が変わっているなんて」

「デオキシスとは宇宙からやってきたポケモン」

ラルドとエメルの会話を聞いていたグリーンが言った。そして、さらに続けた。

「奴は、ノーマル。アタック。ディフェンス。スピードと फिल्म チェンジをすることができる。つまり、お前達が見ていたデオキシスはおそらくノーマルだったのだろう。今はスピードフィルムになっているから姿が違うんだ」

「まさか宇宙からきて、しかも姿を変えられるポケモン……」

「たとえどんな奴でも倒すのには変わりはないぜ！ ゲイト！ ハイドロポンプだ！」

ラルドはハイドロポンプを放った。それに続き、かえんほうしゃ。はっぱカッターを他のポケモンが放った。

だが、デオキシスはそれらをあっさりとかわした。すばやくなっているデオキシスには悠々とかわせるのだ。

「無駄だ無駄だ！ デオキシスにはかなわん！」

「やってみなきゃわからねえだろ！ バクフーン！ だいまんじだ！」

「フシギバナ！ はっぱカッター！」

「ゲイト！ ハイドロポンプ！」

一斉攻撃を再度した。しかし、今度も当たらなかった……のははっぱカッターとハイドロポンプだけだった。

上下左右に放った、だいまんじ。かえんほうしゃ。ハイドロポンプ。はっぱカッター。上下左右にしか逃げ場がないデオキシスはどれか一つに当たるしかなかったのだ。

「レッド！」

グリーンはレッドに話しかけた。

「グリーン！ 久しぶりだな」

「ああ。だが、今はそんなことを言っている暇はない。お前ら二人も俺らと合流し同時攻撃をするぞ」

「わかった。ゴールド！ 他のみんなと合流するぞ」

レッドとゴールドは他の六名のところに向かった。

そして、再度一斉攻撃をした。先ほどと同じ作戦だ。

「何度も同じ手などくらわん！」

デオキシスは四方を囲まれていた。その四方の真ん中で体を大きくさせた。先ほどまでのようなすばやそうな形ではなく、重く動きが鈍いような形だ。

その形になったデオキシスは、四方の攻撃のうち一個だけを受けた。だが、その攻撃も意味がなくなった。ずぶとい形の謎のポケモンは攻撃を受け流してしまったのだ。

それを見ていた八人のトレーナー達は驚いた。先ほど与えることができたダメージだったが、今度はダメージを与えることができなかったことが一番衝撃的だ。

「デオキシス！ サイコブースト！」

デオキシスはサイコブーストを放ってきた。先ほどより威力が大きくなっている。

八人のトレーナーは、それぞれ左右に移動しサイコブーストから身を守った。だが、守れたとはいえない状況になった。

サイコブーストがかわされたことによりおくの壁に思い切りぶつかった。それで砕けた岩が、左右に移動したトレーナー達に当たったのだ。

「レオさん！」

「リュウト！」

ラルドとエメルはそれぞれ逆の方向に移動していた。別れた場所で、レオとリュウトが岩の餌食となった。

「レオさん大丈夫ですか」

「あ、ああ、なんとか」

レオは起き上がろうとするが、痛みがするのかなか立つことができない。

「ゴールド！ 頼む！」

「わかった。ハピナス！ タマゴうみだ」

タマゴうみでレオは回復させられた。

リュウトもその後にハピナスのタマゴうみによって回復することができた。

だが、回復はできてモオキシスを倒す手立てはなかった。攻撃してもディフェンスフィルムで防がれたりスピードフィルムでかわされたりしていた。

さらに、サイコブーストを放つときやサイコネシスなどで攻撃をする時は、とがったような形に変形する。そのフィルムになるとこうげき力。とくこうが上がるのだ。

ラルドたちはその攻撃や防御に戸惑いながら攻撃をしていた。しかし、それは自分達のダメージとなった。

「くっ。一体どうすれば……」

レッドがそうつぶやいた。先ほどから何個かの作戦を練りながら戦っていたが、どの作戦もことごとく失敗してしまっているのだ。

そんな時、デオキシスのサイコブーストがラルドたちを襲った。そのサイコブーストをかわすことができなかったらラルドたちは先ほどのラルドたちのように岩に埋もれてしまった。

「お、おい！」

入り口付近にいたジムリーダーたちが岩をどかしラルドたちを救出する。

「これで、終わりだな、八人のトレーナーたちよ。これで止めを刺してやるっ」

「そうはさせるか！ テツカニン行け！」

ジムリーダーのファーツはテツカニンを出した。他のジムリーダーたちもポケモンを出した。

しかし、そのポケモンたちはやられてしまった。ジムリーダーたちのポケモンでも倒せないほどデオキシスの力は半端ではない。

そして、ジムリーダーたちも岩に埋もれてしまったのだった。

「おろかな。私にはむかうからこうなるのだよ。レッド、グリーン、ゴールド、クリス、レオ、リュウト、エメル、ラルド。これで終わりだ！ デオキシス！ サイコブースト！」

デスゴルドのその指示によってデオキシスはサイコブーストを放つ体勢になり、それを発射した。意識が遠のく十六人のトレーナー。その中の一人がそのピンチを脱させることができた。

そう、伝説のポケモンと呼ばれた三匹の鳥。伝説の三匹の鳥を持っているトレーナーは最後の力を出し、彼らを出しのだ。

彼らは、それぞれ自分が持つ最大の攻撃をサイコブーストに当てた。それによって、サイコブーストの起動はずれラルドたちはピンチを脱することができたのである。

「ファイヤー、サンダー、フリーザーか。グリーン。まさか、こいつらを出すとはな」

「俺らは絶対に負けられないんだよ！」

グリーンは立ち上がった。それを見たほかのトレーナー達も自分の力を振り絞り、立ち上がった。

「僕らは絶対にお前を倒す！」

「そして、この手でダークポケモンを捕まえてリライブをする！」

レッドとリュウトが言った。

「おろかなものたちよ。私にかなうはずはあるまい。このデオキシスさえいれば我らダーク団の世界征服も夢ではない」

「そうかな。確かに俺らじゃとめるのは無理かもしれない」

ラルドが続けた。

「でも、世界には俺らより強いトレーナーはいる。ホウエンリーグの四天王やセキイリーグの四天王。それにいくら弱いトレーナーだってたくさんの人が集まれば強い力になる」

「そうだったら、あなたの野望だって終わるわ」

エメルが言った。

「黙れ！ 我々にはデオキシス以外にもエンテイ、スイクン、ライコウ、さらには強力なダークポケモンがいることを忘れるな！ こういったがいれば我らは無敵なのだ！」

「デスゴルド。お前は昔のことを忘れたのか？」

グリーンがそう言うのと、さらに続けた。

「あなただって、もともとは善意ある人だったはずだ。それなのになぜダークポケモンのような悪に染まったものを作るんだ。あなたはそんなものを作るためにポケモン協会に入ったのか？ なあ、デスゴルド……じゃない、会長！」

グリーンのその言葉は他のトレーナー達を驚かせた。すると、クリスがグリーンにたずねてきた。

「グリーンさん、一体どういうこと？ あいつが会長なんて……」

「奴の靴。前は革靴だったが、今はスニーカーだ。おそらく、デスゴールドとなっている時は革靴。会長のときはスニーカーと靴を分けているんだろう。だが、実際にはきなれているのはスニーカーなんだ。だから、デスゴールドである時でも一人ならばスニーカーをはいているのだろう。」

それだけじゃない。なぜ俺がサンダーたちを持っていることを知っている？ ここに来るまでにはこいつらは出さなかった。それに壁を突破する時だって暗かったからうつるわけではないし、いつもくらいならばつける必要もない」

グリーンが一通り説明するとデスゴールドは笑い出した。

「なにがおかしい！」

「なかなかの推理だよ、グリーン。君はドロップシティでも推理をしたな。探偵になれる素質があるだろう。いかにも、私はポケモン協会マーレ島支部会長だ」

デスゴールドは、そう言うと、顔につけていた化けの皮をはがした。それはまぎれもなく会長の顔だった。あの優しい顔の会長ではなく、厳しい表情をした会長だ。まるで、会長が会長でないようだ。

「会長……なぜ」

「私がポケモン協会に入ったのもこの野望を遂げるためだったのだよ。ポケモン協会にはいろんな情報が届く。我らにはもってこいの場所だ」

「だけど、なぜわたしたちにダーク団の場所を……」

「あの情報は私だけが知っているものではない。他のもの達も知っている。それを君たちに公表しないのは変だろう？　そして、君たちを呼んだのもその変なのを解消するためなのだよ。さあ、そんなおしゃべりはどうでもいい。さっさと、君たちを倒すことにしよう」

「そうはさせない！」

ラルドが言った。

「あなたのそんな野望なんて打ち砕いてやる！　そして、ダークポケモンなんて、ポケモンが苦しむものを作らすのもやめさせてやる！」

ラルドがそう強く言った時だった。ゲイトが急に暖かい光に包まれ始めた。

「むっ」

「ゲイトお前……」

ゲイトの姿は大きくなり、光がぱっとはじけた。そして、その新しい姿を見せた。

「オーダイル！」

「なんで……アリゲイツに進化するはずじゃ……」

「そんな理屈なんてどうでもいい。さあ、会長！ あなたを倒す！」

オーダイルに進化したゲイト。かくしてデスゴールド改め会長と戦うことになった。

一体、強力なデオキシスに対しラルドたちは勝つことができるのだろうか。そして、世界はどうなってしまうのだろうか。

第四十話終了第四十一話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV82

クイック（オオスバメ）LV73

ゲイト（オーダイル）LV75

ロック（ボスゴドラ）LV75

フライ（フライゴン）LV75

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

ゴルドのトレーナーカード

バッジ：マーレ島バッジ：三個

手持ちポケモン

バクフーン（バクフーン）LV80

ヨルノズク（ヨルノズク）LV70

デンリュウ（デンリュウ）LV70

ヌオー（ヌオー）LV70

ハピナス（ハピナス）LV71

第41話 「強敵！」

「ゲイト！ れいとうビーム！」

デオキシスはれいとうビームをディフェンスフォームで防御した。そして、サイコネシスで攻撃をしてきた。

だが、それはオーダイルによるまもるで防がれた。

「ゲイト！ ハイドロポンプだ！」

「デオキシス！ でんじほう！」

ハイドロポンプはでんじほうによって、強力な電気をおびた。その電気によって、一気に熱が高まり水はすべて蒸発してしまった。

「なっ！」

「サイコネシス！」

「かわすんだ！ ゲイト！ そして、ハイドロポンプ！」

「おろかな！」

デオキシスはハイドロポンプをスピードフォームに変化し、ゆうゆうとハイドロポンプをかわした。

「（くつ。やっぱり、接近戦にしないと勝ち目はないな……）」

ラルドは接近戦にしないと勝てないと予想した。ハイドロポンプやれいとうビームなどの飛び攻撃では、隙が多く簡単に防御やかわされてしまうのだ。

だったら、早い攻撃を放てばいいと思うかもしれないが、それほどのわざを出すことにはゲイトにはできなかった。

そんな激戦を繰り広げている後ろで、エメルたちは、自分達の手当て。ポケモンたちの手当てをしていた。

エメルたちのダメージはハピナスによるタマゴうみで。ポケモンの回復には道具を使っただ。

サイコブーストによって、岩が崩れたが、そのときに大型の初心者ポケモン進化系たちは、直接岩による攻撃を受けたのだ。

そう、まるで、小さな——小さな無数にあるいわなだれを。

かろうじて、その時にゲイトは小型のワニノコだったため、膨大なダメージを受けることはなかった。

「このままではいけない……」

グリーンがつぶやいた。それにたいしてクリスが聞いた。

「なにがですか？」

「奴一人にデオキシスを任せるわけには行かない。いや、任せられないんだ。オーダイル一匹やそこらであれを倒せるわけがない」

「でも、私たちのポケモンは、あのアルドスたちの戦闘時にひんし状態になってしまったし、薬もこの子達に使っちゃったし……。どうしようもないよ」

と、ここでレッドがグリーンに話しかけた。

「グリーン。このポケモンたちはお前らに任せた。デオキシスは僕とゴールド、それにラルドくんが協力して戦う」

「わかった……。ゴールド、ハピナスは借りるぞ」

「どうぞお好きに。さあ、レッドさん」

「ゲイト！ れいとうビーム！」

空中にいるデオキシスに対してゲイトはれいとうビームを放っている。

だが、やはり簡単にかわされてしまっていた。

「デオキシス！ サイコキネシス！」

「くっ、まもるだ！」

デオキシスによるサイコキネシスから身をまもった、ゲイト。だが……。

「サイコブースト！」

デオキシスによるサイコブーストが、まもるを終えたゲイトに襲い掛かる！

「プテラ！ まもる！」

「キマワリ！ まもる！」

突如、ゲイトの前に現れた二匹のポケモン。彼らのまもるによって、サイコブーストは抑えられ、ゲイトの身を守った。

「大丈夫か！？ ラルド！」

ゴールドがラルドに近づく。

「あ、ああ」

ゴールドはラルドの足が怪我しているのを見つけた。

「お前、怪我してるじゃないか。レッドさ……」

「大丈夫だ、ゴールド。それより、デオキシスを」

「だけど……」

「こんな怪我に気を使っている暇はないんだよ」

「……わかった」

「プテラ！ つばさでうつだ！」

「キマワリ！ にほんばれからソーラービーム！」

「ゲイト！ れいとうビーム！」

三匹による攻撃は続いた。

——ラルドによる、打撃攻撃作戦をレッドとゴールドは賛成した。

しかし、それを実行するにはデオキシスが地上に落ち、ゲイトたちが攻撃できる状況下にならなければいけない。

だが、あのデオキシスを地上に落下させるなど難しいことだが、レッドがプテラでその状況を作ろうと必死になっていた。

「ごさかしい！」

だが、その攻撃は会長にとって気に入らなかった。ただ、うつとおしい存在なのだ。

会長はデオキシスにサイコブーストを命じた。そのサイコブーストは先ほどまでのサイコブーストではなかった……。

「まずい！ みんな伏せる！」

レッドは大声で言った。

だが、それが伝わってから一秒も立たぬ間にサイコブーストは放たれた……。

——暗い場所……。ラルドが気が付いた時はあたりが暗かった。何も見えない。真の闇。

「ここは……？」

ラルドがそうぼつつんとつぶやくと、声が聞こえた。

「あきらめるか？」

「え？」

その声は聞き覚えがあった。そう、ジムリーダーの声。しかも、身近にいるあの人だ……。

「お前はそのままあきらめるのか？　ダーク団を倒すこともできずデオキシスにやられっぱなしで、世界をのつとられるのか？」

「そんなことはいやだ！　俺は絶対にダーク団を倒す！」

「だったら、なぜお前は眠っている？」

「え？」

「早く立ち上がれ！　そして、ダーク団を倒すんだ！」

——ラルドは目を覚ました。すると、そこには青い勇ましい姿が見える——ゲイト。

あたりは暗い。どうやら、また岩に閉じ込められてしまったようだ。

「ゲイト！ ゲイト！」

ラルドは発生できる最大の声を使った。すると、ゲイトはその声にこたえるように体を少しばかり動かしした。

「この岩をどけてくれ！」

そういわれた、ゲイトは手に力を入れた。だが、なかなか岩は動かない。

「あきらめるな、ゲイト！ お前ならできる！」

その言葉を発してから数秒後。ラルドは起き上がった。目の前は、先ほどまでの洞窟を感じさせない。あたりは海ばかり見え、壁がなくなっていた。

「い、一体なにが……」

ラルドがあたりを見回すと、そこにはエメルだけが倒れていた。ラルドがエメルを揺さぶる。しかし、反応はない。

どうやら、他のメンバーは岩に埋もれてしまっているようだ。

「まだ生きていたか。ゴキブリなみにしぶといのだな、ラルド君」

「会長！」

後ろから声が聞こえたので振り向くとそこには会長が立っていた。

「まさか君がここまでやるとは思わなかったよ。経歴が浅い君がここまでやるとは誰が予想できたことか」

「なに!？」

「レッド、グリーン、レオ、クリス、リュウト。彼らは各地方の四天王よりも強いといわれるトレーナー達。だが、君は所詮ホウエンリーグのたった一回の経歴だ。それほど経歴はない」

「だからなんだっていうんだ」

「君は惜しい存在だというのだよ。どうだ？ 私と手を組まないか?」

「突然なにを言い出すかと思えば……。俺は絶対にダーク団なんかと手は組まない」

「ふふ、そう言うと思ったよ。ならば、ここで始末するしかないだろう。デオキシス」

会長がそう言うつとデオキシスは会長の横に立った。

それをみたラルドはゲイトをボールに戻した。そして、別のモンスターボールを手に持った。

「戻れ、ゲイト」

「降参か」

「降参だつて？ そんなことをするわけがないじゃないか。俺は…
…俺はこいつを使いたくなかった。できるならば、みんなの手で勝
利をつかみたかった」

「……なにが言いたい？」

「でも、みんなをこんな結果にしてしまった。俺はおろかだ。でも、
そのおろかさを償えるわけじゃないけど、俺ができる最後のこと。
それは、会長！ あなたを倒すことだ！」

ラルドは手に持った一個のボールを投げた。そして、まばゆい閃
光の中から巨大なポケモンが現れた……。

第四十一話終了第四十二話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：四個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV83

クイック（オオスバメ）LV73

ゲイト（オーダイル）LV75

ロック（ボスゴドラ）LV75

フライ（フライゴン）LV75

エメルのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：五個

手持ちポケモン

グリーン（ジユカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

ゴールドのトレーナーカード

バッジ：マール島バッジ：三個

手持ちポケモン

バクフーン（バクフーン）LV80

ヨルノズク（ヨルノズク）LV70

デンリュウ（デンリュウ）LV70

ヌオー（ヌオー）LV70

ハピナス（ハピナス）LV71

キマワリ（キマワリ）LV68

第42話 「終結と別れ」

「まさか、お前がこのポケモンを持っているとはな」

会長はつぶやいた。

ラルドと会長の前に現れた巨大なポケモン。緑色で龍のような形をしたポケモンだ。

「ホウエン地方にいたとき、グラードンとカイオーガの争いを止めたレックウザだ！ お前をこいつで倒す！ レックウザ！ ドラゴンクロー！」

巨大な体を動かしレックウザはデオキシスをドラゴンクローで攻撃をする。しかし、それをディフェンスフォルムで身を守った。

「まだまだ！ もっとだレックウザ！」

レックウザのドラゴンクローはやまない。その場から逃げ出そうとした時に、ドラゴンクローを一発受けるような状況下だ。

だが、ディフェンスフォルムであるといっても、少量のダメージ程度は受けている。どこまでデオキシスが持つかにかかっている。

「くっ。サイコブーストだ！」

「はかいこうせん！」

ドラゴンクローの連続に耐えかねた会長はサイコブーストをデオ

キシスに命じた。

それに対しレックウザははいこうせんで対抗した。お互いのわざはぶつかり合った。

「なに！？」

「どうだ！ レックウザ！ しんそく！」

はいこうせんを放ったばかりのレックウザは少し間を空けてからしんそくでデオキシスを攻撃した。

デオキシスはいはいこうせんによるダメージから回復していないため、回避することもままならなかった。

「デオキシス！ じこさいせい！」

じこさいせいを開始し始めたデオキシス。だが、レックウザは続けてしんそくでデオキシスを攻撃しじこさいせいを阻止した。

「くっ！」

「まだまだだ！ レックウザ！ ドラゴンクロー！」

ラルドは必死だ。いつものバトルスタイルではない。あのラルドが……。

そうエメルは思った。彼女も、何とか目を開け現実世界に意識が戻ってきた。そして、ラルドの気迫あるバトルを見ているのだ。

彼女は、ラルドのように立ち上がることはできなかった。いくら力を入れても立つことができない。

「デオキシス！　十まんボルト！」

「ふん！　レックウザ！　ドラゴンクローで切り裂け！」

十まんボルトはレックウザのドラゴンクローで切り裂かれた。しかし、レックウザ自身にも少量ながらダメージを与えられた。

「くそっ！」

「いけえ！　レックウザ！　げきりん！」

レックウザのげきりんは、デオキシスにクリーンヒットした。

デオキシスは思いつきり地上にたたきつけられ、戦闘不能となった。

「なっ！　まさか……」

会長は立ちすくんだ。その会長にラルドは近づきこついった。

「あなたの野望も終わりだ。残念です……会長。さあ、あなたのやることはまだ一つ残っています。ちゃんと罪を償ってください」

——決着はついた……。波は穏やかだった……。

それから三ヶ月がたった日のドロップシティの病院前。

レッド、グリーン、ゴールド、クリス、レオ、リュウト、ラルド、エメルたちはそこにいた。

「よし、じゃあこれでお別れだな」

レッドがそういった。

「ああ。ダーク団の総師であるデスゴールド——会長は警察に捕まり、サカキ自身も警察に捕まった。もう、俺たちがマーレ島にいる理由はない」

「わたしもです。『ダーク団をつぶしてくれ』って頼まれただけですから」

「そうか。さびしくなるな」

レオが言った。

「これから三人はどこにいくんですか？」

エメルがたずねた。

「僕とグリーンはカントーに戻ることにしたよ。ゆっくり休憩をしようと思っている」

「わたしは、ジョウト地方に。わたしも休憩を入れて、また旅に出

かけようと思っているわ。あなた達はどうするの？」

「俺はリッグルシティに。最後のバッジを取りに行かなければ行けませんから」

ラルドはバッジケースを取りだし、それを見せた。そこには、七つのバッジがそろっていた。

「私もリッグルシティに。バッジを取りにいかないといけませんから」

エメルのポーチにはバッジが七つ付いてた。

「レオは？」

グリーンが聞いた。

「オレはここにまだいると思われるダークポケモンの回収をする」

「レオに同じく」

リュウトがいった。

「ダークポケモンはオレらがちゃんとリライブしてもとのポケモンに戻さないといけないからな」

「リュウトも？」

「はい、エメルさん。オレもこのスナッチマシンを利用すればレオさんと同じことができますから。ほら、前に説明したでしょ？」

「ええ。それを使えば、人のポケモンでも捕獲——スナッチすることができるのよね。そして、ダークポケモンをスナッチしてリライブしてもとのポケモンに戻る」

「そうです」

「ゴールドはどうするんだ？」

レッドがゴールドに聞いた。

「俺たちと一緒に来るんだよね？」

ラルドが言った。すると、ゴールドは少しだんまりしてから言った。

「俺は……俺は、ジョウトに戻る」

「え！？」

「俺はジョウトに戻る。そして、ジョウトリーグに挑戦しようと思う」

衝撃の発言だった。ラルドはもちろん自分とマールリーグを攻略するのだと思っていたから。

「でも、手に入れたバッジはどうするんだよ？」

「たったの三個だ。一回ジョウトリーグに行ってからもう一度ここに戻ってくるさ」

「だったら、ここを先にやっただって……」

「俺がオーレ地方に行っている間にラルドに抜かれちゃった。俺はお前には負けたくない。だから、俺は……」

「わかった。その代わり、絶対にジョウトリーグで優勝しろよ」

「ああ」

「おっと、そろそろ時間だ」

レッドが言った。

「船は、クチバに行ってからアサギに向かう。ゴールドもそれに乗るといい」

「わかりました。それじゃあな、ラルド」

「ああ。今度会った時はバトルしような！」

「その時は負けないぜ！」

こうして、レッド、グリーン、ゴールド、クリスたちはフェリー乗り場へと向かった。

「行っちゃったな」

四人の影が見えなくなってからラルドは言った。

「ええ……」

「さあ、へこんでないでオレたちも出発しよう。協会の車が来ている。それにのってリッグルシティまで行こう」

「そうですね……。さようなら、レッドさん、グリーンさん、ゴールド、クリスさん。また会える日まで」

海風がそつとラルドの頬をなでた。

第四十二話終了第四十三話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV 83

クイック（オオスバメ）LV 73

ゲイト（オーダイル）LV 75

ロック（ボスゴドラ）LV 75

フライ（フライゴン）LV 75

エメルのトレーナーカード

バッジ：^{ホウエン}八個 マーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV 86

グラ（トドゼルガ）LV 85

サート（サーナイト）LV 85

クーチ(クチート) LV82

第43話 「結末」

「さて、じゃあ、オレたちともお別れだな」

リッグルシティにやってきたラルドたち。

出かける用意を済ませた、レオとリュウトは、それぞれの乗り物に乗って、ポケモン協会前でラルドたちといた。

「はい。お元気でレオさん」

「それでは、エメルさん。短い間でしたが、いろいろお世話になりました。」

「いえいえ、それは私よ。本当にありがとうね」

「はい。お元気で」

「ええ、リュウトもね」

「それじゃあな、二人とも」

「さようなら！ ラルドくん、エメルさん」

二人はバイクのエンジンをつけた。そして、その場から去っていった。ラルドとエメルに見送られて……。

「ああ、いっちゃったな」

ポケモンセンターのラルドの部屋でラルドは言った。

「そうね。いろいろあって大変だったけど、みんながいなくなるとさみしいな」

ラルドの部屋を訪れているエメルがそういった。

「ところで、ラルド。病院で入院していた時も聞いたけど、レックウザは今どうしたの？」

マイティラビンスで、会長を倒した姿を見たのはエメルだけだった。

その後、大怪我を追った八人のトレーナー達はドロップシティの病院に入院したわけだが、入院中にエメルは聞いたのだ。

『ねえ、レックウザはどこにやったの？』

エメルが見た最後の光景。それは、レックウザが天空へ高く飛んでいく姿だった。それを見たエメルは気絶してしまい、それから次の記憶があるのは病院の一室だった。

レックウザが天空へと飛んでいく……。それは、レックウザが住みか——オゾン層に戻っていったことを意味していることをエメルは知っていた。だが、本当に戻って行ったかはわからない。

だから、こうして、ラルドにレックウザはどうしたのか聞いているのだ。逃がしたのか。それとも、まだ持っているのか……。

だが、そのことを病院でラルドが答えることはなかった。理由はなにかとつけていた。

もしかしたら、今回もなにかと理由をつけるかもしれない。そう思っていたエメルはなんとでも言わせる準備をしていた。

しかし、それは結局使うことはなかった。

「ああ、レックウザか。あいつは逃がしたよ」

「え！？ どうして？」

「あいつが——レックウザが、オゾン層に帰りたい。そういつているような気がしてさ。それに、グラードンとカイオーガの戦いをとめたし、デオキシスも倒した。そんなあいつにまだ戦えなんていったらかわいそすぎるよ」

それ以上エメルはなにも聞かなかった。

ラルドの目がどこか悲しげになっているのを感じたからだった。

それから沈黙が続いた。変な空気になったのを悟ったラルドは話題を切り出した。

「ところでさ、ジムリーダーたちも気前がいいよな」

「え？」

「だってさ、バトルもしないでバッジをくれたんだぜ。『ダーク団を壊滅させられたのは君たちのおかげだ』みたいなこといつてさ。」

この街のジムリーダーも来れば一発で制覇できたけどな」

「なにをバカなこといつてるのよ。自分の実力を上げるためにジム戦をするんじゃない。そんなもらってたなら、実力が上がらないじゃない」

「そんなこといつても、もらったときはうれしそうだったぞ、お前」

「そりゃあ、もらったら誰だってうれしいわよ！」

「そんなに力強く言わなくても……。でも、今日、ジム戦ができていつても悲しいよなあ」

「しょうがないじゃない。ジムリーダーが不在だったんだから。なんでも、ポケモン協会本部の召集に行ってるみたいで明日帰ってくるっていうんだから」

ポケモン協会マーレ島支部の会長が、ダーク団の総師であり、警察に捕まったことからいろいろ問題になっていた。

テレビのニュースでは大々的に『ポケモン協会の不祥事。支部の会長が、悪の組織の総師だった』と取り上げていた。

これをやすやすと見逃すわけにはポケモン協会側としてもいいのさ。

そして、この全国一斉ジムリーダー召集がかかり、ジムリーダーたちは全員で払っているのだ。おそらく、ラルドの父であるセンリも行っているであろう。

「ねえ、ラルド」

と、ここでエメルが言った。

「なんだ？」

「あのさ、今日の九時に港に来てくれない？」

エメルがためらいながら言った。

「いいけど、なんか用か？」

「ええ。じゃ、とりあえずよろしくね」

エメルはそう言うと、部屋を後にしていった。

ラルドはそのエメルの姿を見て少し熱が上がった。

「……もしかして……俺……って」

ラルドはそれからいろいろと考え込んだ。

今までの旅の中でエメルにあったときのことを。そういえば……。

今までは心の奥に閉じ込めてた。そして、自分自身も気づかなかったあることに気づいたラルドだった。

午後九時のとある港。そこには一人の少女がいた。

すると、少し遅れて少年がやってきた。

「なんだ？」

少年はなににも知らないような感じの口調で答えた。

「あのさ……あの……私……その……」

少女はためらいながら何かを言いたそうだった。だが、それが言葉にならない。

「その……あなたのことが……その……す……」

そういつているときに、少年は少女を引き寄せて抱いた。

「え……？」

すると、少年はこう言った。

「好きだよ」

「私も……好き」

二人は唇を重ねあった。

船の汽笛が二人を包んだ……。

第四十三話終了第四十四話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV85

クイック（オオスバメ）LV81

ゲイト（オーダイル）LV85

ロック（ボスゴドラ）LV83

フライ（フライゴン）LV81

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

第44話 「VSゲッグル! -前編-」

レオとリュウトと別れてから次の日。

陽が一番高くなったとき、ラルドとエメルの二人はリッグルジムに赴いた。

すると、昨日とは違い、ジムの案内人が内部へと案内をしてくれた。

「へえ、これはまたこれといった特徴がない内部ね」

エメルがジム内部を見て言った。

ジムはいたって普通だった。ジムリーダーは得意分野をそれぞれ持っているため、それにあわせてジムの内部が作られている。

例えば、エディジムのアクレスの場合は、水タイプを得意としているため、水タイプが活躍できるようなジムの内部設計だ。

だが、いたって普通のこの内部だと、なにが得意分野なのかわからない。

奥に通された二人。少しばかり待っていると、奥の部屋から一人の男が現れた。身長は、百七十五センチメートルほどで年齢は二十代後半程度だった。

「君たちが挑戦者か……。ぼくがこのジムのジムリーダーゲッグル」

「俺はラルドです」

「私はエメルといいます」

「二人そろってか。まあいいや。このジムのルールは四対四のダブルバトルなんだけど、君たちはちょうど二人いるから一人二匹づつ。ぼくは四匹使うバトルでいいかな？」

「ええ」

「よし、じゃあ、そうことで。グッグ、審判を頼む」

グッグと呼ばれたラルドたちを奥に案内した男は、審判台に付いた。

「ルールは聞いていたね、グッグ？ それじゃあ、始めよう」

「それでは、これより、リッグルジムリーダーグッグル対挑戦者、ラルド、エメルペアによるバトルを開始します。それでは試合開始！」

「頼んだぜ！ クイック！」

「がんばって！ キツガ！」

ラルドはクイック（オオスバメ）。エメルはキツガ（キノガッサ）を出した。そして、注目のグッグルのポケモンは。

「行こう！ シャワーズ！ ブースター！」

グッグルはシャワーズとブースターを出してきた。

「先制だぜ！ クイック！ でんこうせっか！」

「キツガ！ マツハパンチ！」

クイックのでんこうせっかはブースターに。キツガのマツハパンチはシャワーズに飛んでいった。

ブースターはクイックの攻撃をかわし、シャワーズは攻撃に耐えた。

「シャワーズ！ ハイドロポンプ！ ブースター！ かえんほうしや！」

シャワーズのハイドロポンプは、キツガに当たった。だが、こうかはいまひとつだったのであまりダメージを受けなかった。

だが、ブースターのかえんほうしはキツガに攻撃されたので、大ダメージを受けた。

「キツガ！」

「クイック！ つばめがえし！」

シャワーズにつばめがえしが当たったことによりキツガはシャワーズから離れた。

「さあ行くぜ！ クイック！ もう一度つばめがえしだ！」

「キツガ！ メガドレイン！」

「シャワーズ！ れいとうビーム！ ブースター！ かえんほうし
や！」

つばめがえしは見事にシャワーズにヒットした。そして、メガド
レインも。

だが、シャワーズにダメージを与えた代償としてクイックはれい
とうビームによるダメージを受けた。

かえんほうしやは、キツガに向かっていったのだが、そのフット
ワークでかわした。

「シャワーズ！ ハイドロポンプ！ ブースター！ てだすけだ！」

れいとうビームにより少しばかり羽が凍ってしまい動きが鈍くな
っているクイックにハイドロポンプが放たれた。さらにてだすけに
よる威力アップも付いている

「キツガ！ マツハパンチ！」

シャワーズがキツガのマツハパンチを受けたことによりよろめい
た。それにより、ハイドロポンプの軌道がづれわずかなダメージし
かクイックには与えられなかった。

「サンキュー、エメル」

「どういたしまして。さあ、次の攻撃行くわよ！」

「ああ！ クリック！ 壁に向かってつばさでうつ！」

クイックは指示通り壁につばさでうつをした。すると、羽についている氷が落ちて、身軽さを取り戻した。

そして、ブースターにつばさでうつを攻撃するために近づいていく！

「ブースター！ アイアンテール！」

ブースターは近づいてきたクイックにアイアンテールで攻撃をした。だが、クイックは持ち前のすばやさでそれを瞬時にかわしつばさでうつで攻撃をした。

「なかなかやるな」

「まだまだ！ クイック！ つばめがえしだ！」

「キツガ！ シャワーズにこころのめ！」

つばめがえしは、ブースターに当たった。シャワーズはブースターに近づいているクイックに対してれいとうビームを放った。

ブースターもかえんほうしゃを放つ。だが、そこはさすがクイックというニックネームをつけられるだけある。持ち前のすばやさを生かし、こうそくいどうを使いながらわざをかわした。

「今よ！ ばくれつパンチ！」

と、その時キツガのばくれつパンチがシャワーズにクリーンヒット

トした。

「シャワーズ！」

かろうじてひんしは免れたものの、大ダメージを受けこんらん状態になってしまっている。

「今だ！ クイック！ つばめがえし！」

クイックのつばめがえしがシャワーズを襲う！

「させるか！ ブースター！ シャワーズにほのおのうず！」

二人はグッグルが正気なのかを疑った。ブースターは味方のシャワーズにほのおのうずを巻いたのだ。

それにより、クイックのつばめがえしは中断せざるを得なかった。そのまま攻撃すればほのおのうずに巻き込まれてしまうのだから。

「ほのおのうずで、シャワーズを守ろうという作戦ね。水タイプのシャワーズならほとんどダメージは受けないし」

「そう言うことです。ブースター！ キノガッサにかえんほうしゃ！」

「だったらこれでもくらえ！ クイック！ はかいこうせん！」

キツガにかえんほうしゃは放たれた。キツガはほのおのうずによって、ブースター的位置がわからなかった。

そのわからない中から、かえんほうしやは飛び出してきてしまったため、かわすことができず大ダメージをおった。

そうしている裏で、クイックはほのおのうずに対してはかいこうせんを放った。

いくらほのおのうずを巻いていても物理攻撃以外はうずが反射させない限り、中に入ってしまう。

うずが途切れると同時にそこには倒れているシャワーズの姿があった。

「シャワーズ戦闘不能！」

グッグの声が響き渡る。

すると、突然、キツガも倒れてしまった。二度のかえんほうしやによるダメージが蓄積したのだらう。

「と、キノガッサ戦闘不能！」

それに一瞬コールをし忘れそうになったグッグだったが、そうだった。

「戻って！ キツガ」

「戻るんだ、シャワーズ」

「さあ次行くわよ！ 頼んだわ！ グリーン！」

エメルはグリーン（ジユカイン）を出した。一方のグッグルは、サンダースを出してきた。

「サンダースか。クイックよりすばやいな」

「ええ。気をつけていきましょう」

「さあ行こうか……」

ついに始まった、最後のジム戦。三対三となったこの勝負。一体どちらが勝つのだろうか。

そして、最後のバッジを無事に手に入れられるのだろうか。

第四十四話終了第四十五話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV85

クイック（オオスバメ）LV82

ゲイト（オーダイル）LV85

ロック（ボスゴドラ）LV83

フライ（フライゴン）LV81

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：七個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

キツガ（キノガッサ）LV82

第45話 「VSグッグル! -後編-」

「クイック! つばめがえし!」

「グリーン! ドラゴンクロー!」

「ブースター! かえんほうしゃ! サンダース! 十まんボルト!」

八つめのバッジを賭けグッグルと戦っているラルドとエメル。

ラルドはクイック(オオスバメ)のつばめがえしで、エメルのグリーン(ジュカイン)は、ドラゴンクローでブースターを攻撃した。

ブースターはそれらの攻撃を半分かわした。クイックのつばめがえしはほぼ的確に当たった。

そのブースターはかえんほうしゃをグリーンに。新たに投入されてグッグルのサンダースは、クイックに攻撃した。

だが、そこはさすがすばやさの高い二匹だった。グッグルの二匹のわざはそれぞれ、持ち前のすばやさでかわしたのだ。

「そのまま行け! クイック! もう一度つばめがえし!」

クイックが、ブースターに向かっていく。

だが、その時、ブースターとサンダースの位置が入れ替わった。ブースターはサンダースがいた位置に向かった。

「逃すか！」

クイックはブースターを追いかけた。サンダースには触れずに。

「まずいわ！ グリーン！ タネマシガン！」

グリーンのタネマシンガンがサンダースに当たった。そのサンダースはクイックに向かって電撃を放とうとしている！

「これが狙いだったのか！ エメル！ 援護を頼む！」

「わかったわ！ グリーン！ そのままタネマシンガンでサンダースを足止めよ！」

グリーンはいっそうタネマシンガンを強くした。

「無駄さ。サンダースにそれは通用しない。いけ！ 十まんボルト！」

サンダースの電撃がクイックを襲う！

「こうそくいどうでかわせ！」

ラルドの必死の声が聞き渡った。クイックはこうそくいどうで十まんボルトを回避した。すると、サンダースの十まんボルトはクイックの前にいた攻撃態勢のグッグルのポケモンに当たった。

「なに！？」

「クイック！ はかいこうせん！」

ブースターはひんしになった。最後のはかいこうせんをまともに受けてしまった。

「ブースター戦闘不能！」

「戻れ、ブースター」

グッグルはブースターをボールに戻した。

「なかなかやるね」

「たいしたことじゃありませんよ」

「ふふ、面白い奴だ。ならば、こいつで相手をしよう。行け！ リーファイア！」

グッグルはリーファイアを出した。

「エメル。あのポケモンは？」

リーファイアと呼ばれたポケモンを見たラルドは聞いた。

「図鑑には載っていないわ。私もあのポケモンを見たことはないし」

「リーファイアは最近発見されたポケモンでね。ご存知の通り、イーブイは、ブースター、シャワーズ、サンダース、エーフィ、ブラッキーへと進化していくが、最近さらに進化するのが発見された。そのポケモンは、グレイシアとリーファイアという。こいつがそのうち

の一匹だ」

二人は図鑑をリーフィアに向けた。やはりデータはなく、新たにリーフィアのデータが図鑑に記録された。しかし、なんの説明文も出てこない。

「さあ、そんなことよりバトルをしようじゃないか」

「わかりました。エメル、いくぞ！」

ラルドとエメルは図鑑をしまった。

「グリーン！ ドラゴンクロー！」

グリーンはリーフィアに攻撃した。だが、リーフィアはそれをかわした。

「リーフィア！ シャドーボール！」

攻撃をしてきたグリーンに対して今度はリーフィアが攻撃した。

「よし！ クイック！ 行け！」

シャドーボールがグリーンに命中したその時、クイックがつばめがえしをしながらリーフィアに向かっている！

「サンダース！ 十まんボルト！」

リーフィアにどんどん近づいてくるクイックに十まんボルトが放たれた。

それは、高速で動いているクイックに命中してしまった！

「クイック！」

「オオスバメ戦闘不能！」

「くっ、戻れ！ クイック！」

ラルドは地上に落ちたクイックをボールに戻した。

「よし！ 行け！ ラグ！」

ラルドはラグ（ラグラージを出した）

「さあ行くぜ！ ラグ！ じしんだ！」

「グリーン！ まもる！」

ラグはじしんで攻撃をした。グリーンはそれをまもるで守った。

「サンダース！ リーファイア！ ジャンプしろ！」

サンダースとリーファイアはジャンプした。だが、それだけではじしんは完全にかわせない！

すると、サンダースは自らに十まんボルトを放ち始め、リーファイアはこうこうせいを始めた。

そして、じしんによるダメージを受けたが、彼らはあまりダメー

ジを受けていなそうだった。

「サンダーズの特徴、ちくでんだわ。十まんボルトで受けたダメージを回復したのね」

「そうだ。リーフィア！ リーフブレード！ サンダーズ！ めざめるパワー！」

リーフィアはラグにリーフブレード。サンダーズはグリーンにめざめるパワーを放ってきた。

「ラグ！ れいとうビーム！」

「グリーン！ あなたもリーフブレード！」

「リーフィア！ ジャンプしろ！」

ラグはリーフィアにれいとうビームを放った。だが、リーフィアはそれをジャンプしてかわした。

グリーンは、めざめるパワーに立ち向かっていった。めざめるパワーをうまくかわしてサンダーズにダメージを与えた。

「ラグ！ れいとうビームを放て！」

一方、リーフィアは空中にいるためれいとうビームをかわせない。そう考えたラルドは一気にれいとうビームを放った。

だがリーフィアの動きは予想外で、れいとうビームをかわしてしまった！

「かかったな……」

ラルドはつぶやいた。すると、リーフィアはリーフブレードをすることを中止せざるを得なくなった。

「フィールドを凍らすとは……！ さっきの攻撃がこれが目的だったな！」

「そうさ！ ラグ！ ふぶき！」

「リーフィアかわせ！」

リーフィアはかわすために横にずれた。だが、ふぶきの範囲は広くそれをかわすことはできなかった。

「リーフィア！ こうこうせい！」

リーフィアはこうこうせいと回復を始めた。だが、それには二点の問題があった。一点は、あまり回復できないこと。そして、二点目は……。

「グリーン！ はいこうせん！」

そう、グリーンが存在——いや、サンダースの存在かもしれない。グリーンによるリーフブレードを受けたサンダースだったが、その後の指示をグッグルは怠ってしまった。

それは、リーフィアの危機によるものである。その隙にエメルははいこうせんでサンダースを倒した。

そして、グッグがサンダースの戦闘不能を告げる前に、ふぶきのダメージに耐え切れなくなってしまったリーフィアが倒れてしまった。

「サンダース！ リーフィア！ 戦闘不能！ よって、勝者、ラルド、エメル！」

「やったあ！」

「やったね、ラルド！」

「ああ！」

二人はハイタッチをした。

すると、グッグルが二人に近づいてきた。そして、二つのバッジを取り出した。

「これが、このジムの勝利の証である”リッグルバッジ”だ。うけとってくれ」

「ありがとうございます」

二人はそういって、バッジを取った。

「まだまだぼくも修行が足りないなあ。サンダースの指示を忘れてしまうなんて。ジムリーダーとしても失格だよ」

「グッグルさんの主力はリーフィアだったんですね？」

エメルは聞いた。すると、グッグルは同意を表した。

「だから、リーフィアは倒されなくなかった。そういう気持ちだったから忘れてしまったんですよ。それに、普段はシングルバトルをしているんじゃないよ。負けは負けさ。」

「よくわかったね。そうだよ。ぼくは基本的にはシングルバトルなんだ。ダブルバトルなんてあまり得意じゃない。でも、それはいいわけにはならないよ。負けは負けさ。」

ところで、君のポーチを見るとこれで八つのバッジが集まったよ
うだね」

「はい」

「じゃあ、これからマーレリーグに挑戦するんだね。だったら、今度行くべき場所を教えてあげよう。おい、グッグル。地図を持ってくるよ」

グッグルはそういわれると奥の部屋に入ってしまった。そして、一分足らずで戻ってきてグッグルに地図を渡した。どうやら、マーレ島の地図のようだ。

「ここだ」

グッグルは指を指した。そこには”アクアマリン”と書かれていた。

「アクアマリン！」

エメルは驚いた。彼女は一度アクアマリンにいったことがあるのだ。そして、サカキとも郊外で戦ったのだ。

「アクアマリンは綺麗な街だね。四天王のドンの方は、綺麗な街が好きなのさ。だから、アクアマリンにリーグを置いたんだ。ただし郊外だけだね。

マーレリーグって言うているけど、実はマーレリーグはリーグじゃないんだ」

グッグルがいきなり変なことを言い出したので二人は驚いた。そして、ラルドは聞いた。

「どういことですか？」

「他のリーグ——例えばハウエンリーグだったら、トーナメント戦とかをするだろう？ だけど、マーレリーグはそんなことがないんだ。いきなり四天王との戦いになる。そして、その四天王と戦い勝ち進んだものが、真のマーレリーグに参加することができる」

「勝てばポケモンがもらえるというのはどっちなんでしょう？」

「ああ、そのことは知っているんだね。それは四天王だよ。どんなポケモンがもらえるかは——いや、君たちの目で見るといいだろう」

「はい、そうすることにします。では、ありがとうございました」

ラルドはそういつてエメルと共にリッグルジムを後にした。

今度の目的地はアクアマリンだ。

第四十五話終了第四十六話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV86

クイック（オオスバメ）LV83

ゲイト（オーダイル）LV85

ロック（ボスゴドラ）LV83

フライ（フライゴン）LV83

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV86

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV82

キツガ（キノガッサ）LV82

第46話 「赤のリッド」

「へえ、ここがアクアマリンか！」

リッグルジムのグッグルを倒し見事八つ目のバッジを手に入れたラルドとエメル。

彼らは、マーレリーグに出場するために、アクアマリンに来ていたのだった。

以前、エメルが来ていたこともあり、アクアマリンでの移動はスムーズだった。彼らはまずポケモンセンターにより、リーグの場所を聞いた。

ジョーイさんは最初こそいうのをためらっていたが、八つのバッジを見せたらあっさり教えてくれた。話を聞くと、不正にリーグに挑戦されないよう注意しているのだという。

無論、バッジチェックはするらしいが、それを突き破るものもあるという。

彼らは教えてもらうと、ポケモンセンターにある部屋を取ってから、教えられたマーレリーグの場所へと向かった。

マーレリーグにつくと入り口にいた警備員にバッジの提示を求められた。

二人は八つのバッジをジョーイさんに見せた時のように見せた。

すると、警備員は中へと入れてくれた。

「ようこそ、マーレリーグへ」

入ると右側にカウンターがあり、受付の人が話しかけてきた。

「これからマーレリーグに挑戦ですか？」

「はい」

「大変申し訳ありませんが、挑戦は一人ずつとなっております。どちらが先にやるか決めていただけますか？」

そういわれた二人は少し話した。すると、エメルは「レディーファーストでしょ」といって、エメルが先にやることになった。

エメルが、挑戦してから一時間がたった。

受付の人から「挑戦していいですよ」といわれたので、ラルドは挑戦することを許された。

挑戦するにはロビーにある挑戦用ゲートをくぐり抜けて奥に向かう。ラルドが奥に進んでいくと、一つの入り口が現れた。

それをくぐり抜けると、そこは、広い部屋だった。あたりは赤を基調とした部屋になっていた。部屋の中には一人の男が立っていた。

「あんたが二人目の挑戦者か」

男はそういった。

「ええ」

「おれはリッドだ。まあ、そんなことはどうでもいいな。さあ、バトルだぜ」

「はい！」

二人はバトルフィールドの定位置にたった。

「ルールは簡単だ。二対二のシングルバトルだ。交代は両者自由」

「わかりました」

「よしじゃあ行くぜ！ いきな！ ギャロップ！」

「頼んだぜ！ ロック！」

リッドはギャロップ。ラルドはロック（ボスゴドラ）を出した。

「ロック！ みずのはどう！」

ロックはみずのはどうを放った。

「弱点を突いてくるか。だけど、そう簡単には当たらないぜ。ギャロップ！ だいもんじ！」

ギャロップはだいもんじをいきよいよくはなった。そのだいもんじは、みずのはどうとぶつかり合った。

すると、みずのはどうがどんどん弱くなっていった。水が蒸発してしまっている。

「くっ、ロック！ もう一度みずのはどうだ！」

二発目のみずのはどうが、一発目のみずのはどうと重なり合った。だが、圧倒的にだいもんじに押されている。

「無駄だな。ギャロップ！」

リッドがそう言うとギャロップは、ぶつかり合ってるわざの上から姿を現した。

「なに！？」

「ギャロップ！ オーバーヒート！」

「ロック！ みずのはどうだ！」

強力なオーバーヒートの前にみずのはどうを放ったロックだった。しかし、圧倒的な火力によりみずのはどうはいつきに蒸発してしまい姿をなくした。

そして、ありあまった炎はロックを襲った！

「ロック！ くそ！ 戻れ！」

ラルドはロックをボールに戻した。そして、次のポケモンを出した。

「頼んだぜ！ ゲイト！」

ラルドはゲイト（オーダイル）を出した。

その頃、みずのはどうとだいまんじは消えていた。

「ほう、みずタイプを持っていたか。だが、相性がいいからといってなめてもらっちゃ困るぜ！ ギャロップ！ とっしんだ！」

「ゲイト！ ハイドロポンプだ！」

向かってくるギャロップにハイドロポンプを放つ！ すると、ギャロップはだいまんじを放ちながらとっしんを続けている。

ハイドロポンプとだいまんじは互いにぶつかり合っている。その中をギャロップは突き進む！

「いけえ！ ギャロップ！」

「ゲイト！ きりさくだ！」

ギャロップは突き抜けてきた！ ゲイトはそのギャロップにきりさくで攻撃した。

だが、それは自らにもダメージを与える結果となった。きりさくを受けてもギャロップは攻撃を中止しなかったのだ。

「のしかかりだ！」

ギャロップは急ターンしのしかかりで攻撃をしてきた。

「ゲイト！ 受け止める！」

のしかかりによるダメージを追いながらゲイトはギャロップを押さえつけた。

その力にギャロップは抜け出せない。

「ハイドロポンプだ！」

「まずいギャロップ！ オーバーヒート！」

つかまれたギャロップは、ハイドロポンプに対抗した。だが、二度目のオーバーヒートに威力はなくハイドロポンプに押し切られてしまった。

「ギャロップ！」

「止めだ！ アイアンテール！」

ゲイトはギャロップを尻尾で突き飛ばした。壁にぶつかったギャロップは戦闘不能となった。

「戻れ、ギャロップ。ご苦労様だった。さあ、行け！ キュウコン！」

リッドはギャロップを戻し、キュウコンを出してきた。

「あんたは戻すか？」

「いや、戻しませんよ。俺はこのままゲイトで行きます」

「いいだろう。じゃあ行くぜ！ キュウコン！ でんこうせっか！」

キュウコンはゲイトに攻撃した。すばやい動きだ。

「キュウコン！ だいもんじ！」

「ゲイト！ ハイドロポンプ！」

キュウコンのだいもんじに対してハイドロポンプをぶつけた。

それらは互いに打ち消された。どうやら、互角のようだ。

「ゲイト！ きりさくだ！」

二つのわざがはじけたと同時にゲイトはきりさくでキュウコンを攻撃した。

「もう一発だ！」

「させるか！ アイアンテール！」

きりさかれたキュウコンはひるむこともなく、自慢の九本の尻尾でゲイトをアイアンテールで攻撃した。

それによって、ゲイトは吹き飛ばされた。

「はかいこうせん！」

キュウコンは間髪をいれずにはかいこうせんを放った。

まだ、立ち上がっていないかったゲイトはそれをかわすことができず、戦闘不能となってしまった。

「戻れ！ ゲイト！ よくやったよ。頼んだぜ！ ロック！」

ラルドはゲイトを戻しロックを出した。

「さあ、これで最後だな」

「はい。俺はあなたを絶対に倒しますよ！ ロック！ すてみタックル！」

「キュウコン！ かえんほうしゃ！」

ロックはかえんほうしゃに向かっていった。本当の捨て身でキュウコンにすてみタックルで攻撃した。

しかも、特性のいしあたまで反動によるダメージを受けない。

「くっ、キュウコン！ オーバーヒート！」

すてみタックルを受けた、キュウコンは反撃のオーバーヒートを放った。ロックはそれによる大ダメージを受ける！

「ロック！」

「キュウコン！ かえんほうしゃ！」

キュウコンはさらに畳み掛けるように攻撃をする！

「ロック！　じしんだ！」

かえんほうしゃを受けながらもロックはじしんを放った。

床から伝わる攻撃はさすがのキュウコンもかわすことができなかった。そして、幸運なことにかえんほうしゃが途切れたため、ロックはさらなるダメージを受けずにすんだ。

すると、二匹はにらみ合った。緊迫する状況だ。

そして、そこで先手を打ったのはラルドだった。

「ロック！　はかいこうせん！」

「キュウコン！　はかいこうせんだ！」

お互いのポケモンが持っている力を振り絞りはかいこうせんを放った！

二つはぶつかり合い巨大な爆発を生んだ。

「くっ！」

爆風がトレーナーをも襲う。

だが、その爆風をものの数秒で収まり、煙も晴れ始めた。――ど
うやら、排気口があるようだ。

煙が晴れると、そこには九本の尻尾が横たわっていた。

「くっ。まさか……」

「よし！ キュウコンは戦闘不能です！ 俺の勝ちだ！」

「負けちまったか……。戻れ、キュウコン」

リッドはそう言つとキュウコンをボールに戻した。そして、言葉を続けた。

「先に行け。次の相手が待ってる」

「ありがとうございます！ 戻れ！ ロック！」

ラルドはボールを戻して、次の部屋へと走り出すのだった。

第四十六話終了第四十七話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV86

クイック（オオスバメ）LV83

ゲイト（オーダイル）LV86

ロック（ボスゴドラ）LV85

フライ（フライゴン）LV83

第47話 「緑のヴェラ」

マーレリーグ四天王の一人”リッド”を倒したラルドが奥の部屋に進んでいった。

そこは暗い道で紫色の電気がついているだけで、不気味な感じをしている道だった。

だが、ラルドはそれを気にせずに奥へと進んでいった。頭の中にあるのは先のことだけだった。

「あれが次の扉……」

歩き続けているとラルドの目線に次の扉が移り始めた。

ラルドはゆっくりその扉に近づき開けた。すると、そこはリッドの部屋同様、広い部屋で緑色を基調とした部屋だった。

「いらっしやい」

ラルドが部屋に入ると、中央部にあるモンスターボールの絵が描かれている円の真ん中にいた女性がそう言ってきた。

「ここはマーレリーグ第二の部屋。さあ、挑戦するんでしょう？ そしたら、位置についてね」

ラルドは言われるがままに、位置に付いた。そして、相手の女性も位置に付くといった。

「私はヴェラ。部屋を見てくれればわかると思うけど、草タイプの使い手。ルールはシングルバトルの二対二。さあ、あなたのバトルを見せてちょうだい！ バトル開始よ！」

「全力でいかしてもらいますよ！ 行け！ クイック！」

「頼んだわ！ ワタッコ！」

ラルドは草タイプと聞いてか、有利なひこうタイプのクイック（オオスバメ）を出した。一方のヴェラは宣言どおり草タイプのワタッコをくりだしてきた。

「先手はもらった！ クイック！ つばめがえし！」

クイックは自慢のすばやさでワタッコに詰め寄る！

それに対してヴェラは何も指示を出さない。ラルドは一瞬不思議に思っていたが、そのままクイックの攻撃は続いた。

だが、その時予想をしないことが起こった。ワタッコはつばめがえしをかわしたのだ！ かわされることのないつばめがえしをかわしたのだ！

しかも、連続でつばめがえしを続けているが、それもすべてかわしている。ラルドはあっけに取られた。

「ふふ、ワタッコがどんなポケモンかは知っているでしょうね。風に乗って世界一周をするほどのポケモンよ」

「つばめがえしに生じる風でうまくかわされているのか！」

「そう言うこと。でも、もう遅いわ」

ヴェラにそういわれラルドはクイックを見た。すると、クイックの様子がおかしいことに気づいたのだ。

よく観察していると、どうなっているかがわかった。どく状態になっっているのだ！

どくのこなをあたりにまぶしクイックが接近した時に感染してしまったのだ！

「くっ、この短期間でこんなことになるなんて……」

「ふふ、あまいわね。ワタッコ！ わたほうし！」

「かぜおこしで吹き飛ばせ！」

クイックはかぜおこしでわたほうしを吹き飛ばした。そして、ワタッコ自身にもダメージを与えた。

だが、ダメージは一瞬のものであった。かぜおこしによって、吹き飛ばされてしまいかぜおこしで与えられるダメージの三分の一しか受けなかったのだ。

「戻れ！ クイック！」

クイックでは攻撃が当たらない。そう考えたラルドはクイックをボールに戻し次なるポケモンに託すことにした。

そして、次に出したポケモンはフライ（フライゴン）だった。

「いけ！ フライ！ かえんほうしゃだ！」

フライはかえんほうしゃを放った。轟々に燃える炎がワタッコを襲う。風も起こっていない。

「まもるよ！」

ワタッコはまもる体勢に入った。それによってかえんほうしゃを受け流した。

「にほんばれ！」

そして、にほんばれによってひでりがつよい状態にフィールドを変えた。

「チャンスだ！ フライ！ もう一発かえんほうしゃ！」

「それはどうかしらね」

ひでりがつよい状態になったことで炎タイプのわざの威力が上がる。有利になったラルドはかえんほうしゃを再度はなった。

だが、それはかわされてしまった。ワタッコがまもるを使っただけではない。先ほどのワタッコのすばやさじゃなくなってるのだ！

「ソーラービーム！」

「フライ！　かわせ！」

かえんほうしゃをかわしたワタッコはソーラービームを放った。にほんばれの効果でチャージをせずに発射された。

だが、ソーラービームの発射されるタイミングが少し遅れたためか、フライはそれをかわすことができた。

「フライ！　近づいてアイアンテール！」

「ワタッコ！　ねむりごな！」

フライはアイアンテールをするためにワタッコに接近した。対するワタッコはねむりごなを放ちフライを落とそうとするがかわされてしまい、アイアンテールを受けてしまった。

「そこからかえんほうしゃ！」

「ワタッコ！　ソーラービーム！」

ワタッコのソーラービームは発射されなかった。

接近しているフライのかえんほうしゃはあたり威力も倍増した。それによって、こうかばつぐんのダメージを。しかも、にほんばれによる威力が高まっているかえんほうしゃを受けたのだ。

「ワタッコは戦闘不能ね。戻って」

ヴェラはそう言ってワタッコをボールに戻した。

そして新たなボールを取り出した。

「さあいくのよ！ モジャンボ！」

ヴェラはモジャンボと呼ばれたポケモンをくりだしてきた。

姿形はモンジャラに似ているが何かが違う。ラルドにとっては初めてのポケモンなのだ。

ラルドは図鑑を取りだした。しかし、グッグルのリーフィアと同じくポケモン図鑑にはデータがなかった。

「あれも新しいポケモンか……。だったら不足はなしだ！ フライ！ 行くぞ！」

「ふふ、モジャンボ！ つるのムチ！」

モジャンボはつるのムチでフライを攻撃しながら捕まえようとしている。

だが、フライはそれをうまくかわした。

「そんな攻撃はきかないぜ！ かえんほうしゃだ！」

フライはつるのムチをかわしながら、かえんほうしゃを放った。

「よし！ フライ！ そのまま焼ききれ！」

フライはモジャンボにかえんほうしゃを放ち続けた。このままバトルを決めるつもりだ。

「ふふ、そう簡単には終わらせないわ！ モジャンボ！ パワーウィップ！」

かえんほうしゃによって焼かれているモジャンボはパワーウィップというわざを放ってきた。

それはかえんほうしゃを押し戻しかえんほうしゃと同時にフライを攻撃した。

フライはかえんほうしゃとパワーウィップのダメージを受けてしまったのだ。

「フライ！」

フライはそれを受けたがなんとか踏みとどまった。しかし、大ダメージをおってしまったのには変わりはない。

「くっ、限界か」

「ふふ、モジャンボ！ ソーラービーム！」

モジャンボは光りだした。それと同時にソーラービームを发射してきた！ にほんばれの効果はまだ続いている！

「フライ！ はかいこうせん！」

それに対してフライははかいこうせんを放った。ソーラービームに対抗するのだ！

二つの大技は互いにぶつかり合った。まばゆい光を放ちながら……。

そして、最後には爆発を起こした。二つのわざの威力が完全にぶつかり合ったのだ。

天井が高い部屋だが、煙が当たりに充満した。部屋には換気扇が何かが付いているためかすぐに晴れたが……。

だが、その晴れた場所でラルドが見たものはフライが倒れている姿だった。モジャンボはまだ立っている。

「フライ！ くっ、戻れ！」

ラルドはフライをボールに戻した。そして、クイックを出した。

クイックはワタツコ戦でどく状態をわずらったため、今だどく状態である。

「ふふ、最後ね。さあ、行くわよ！ モジャンボ！ つるのムチ！」

モジャンボはクイックを捕まえようとつるのムチで攻撃をしてきた。フライのときと同様だ。

「同じ手はくらわないぜ！ クイック！ つばめがえし！」

クイックはつばめがえしをした。モジャンボはそれを受けてしまいダメージを受けてしまった。

だが、モジャンボも負けてはいない。近づいてきたクイックをつ

るのムチできつちりと捕まえたのだ！

「しまった！」

「モジャンボ！ パワーウィップ！」

「クイック！ はかいこうせん！」

モジャンボはパワーウィップで攻撃を仕掛けた。だが、クイックもそれに負けじとはかいこうせんを放った。

そして、ぶつかり合った二つのわざははじけ爆風を起こした。

再度、煙が立ちこもった。だが、それも数秒のこと。すぐに回復したのだった。

そして、煙が晴れたところでクイックは倒れそうになりながらも立っていたが、モジャンボはその場に倒れていた。

「ふふ、戻ってモジャンボ」

ヴェラは横たわっているモジャンボをボールに戻した。そして、こういった。

「私の負けね。さあ、次の部屋に行くのよ。次の四天王が待ってるわ」

「ありがとうございます！ 先に行かせてもらいます。戻れ、クイック！」

ラルドはクイックをボールに戻し奥の部屋と進んでいった。

次なる四天王がラルドを待ち構えている……。

第四十七話終了第四十八話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV86

クイック（オオスバメ）LV85

ゲイト（オーダイル）LV86

ロック（ボスゴドラ）LV85

フライ（フライゴン）LV85

第48話 「青のキータ」

マーレリーグ第三の四天王はキータと呼ばれた青年だ。

彼の部屋は青を基調としている部屋で、中央部にプールができて
いる。それを見れば誰もが水の使い手だということがわかるだろう。

せめて、ヴェラの部屋からキータの部屋にやってきたラルドはわ
かった。

「じゃあ、準備はいいね？ ルールはシングルバトルの二対二。リ
ツドやヴェラと同じさ」

「わかりました」

「よしじゃあいこう！ バトル開始だ！ 頼んだよ！ パルシェン
！」

「行け！ ラグ！」

ラルドはラグ（ラグラージ）を出し、キータはパルシェンをくり
だしてきた。パルシェンは水中に入った。

ラルドはもう選択の余地はない。クイック。ゲイト。ロック。フ
ライ……。彼らはすでに前二人の四天王戦によってダメージを受け
ているのだから。

そのうちの二匹——ゲイトとフライだが——はひんし状態になっ
ているのだ。

「ラグ！　かわらわりだ！」

ラグは水中に入り、パルシェンにかわらわりをお見舞いした。

だが、パルシェンはたいしたことないといわんばかりに、ラグに自慢のとげキャノンをお見舞いした。

「ラグ！　ひるむな！　アイアンテール！」

「バリアーだ！」

ラグはとげキャノンをもろともせずアイアンテールで攻撃をした。しかし、それはバリアーによってほとんどダメージを与えることができなかった。

「パルシェン！　れいとうビーム！」

「ラグ！　かわしてかわらわり！」

ラグはれいとうビームをうまくかわし、パルシェンにかわらわりで攻撃をした。だが、やはりあまりダメージは受けていない。

それどころか、相手の攻撃チャンスを作り出してしまい、ラグはとげキャノンを再度受けた。

「くつ。やっぱり水タイプに水タイプは不利か……。よし、戻れラグ！」

ラルドはラグを戻した。そして、次のボールを取りだした。その

ボールから出てきたのはクイックだった。

クイックはヴェラ戦で受けたどく状態をまだおっている。ラルドにとっては不利な状況である。

「クイック！ つばめがえし！」

クイックはつばめがえしをパルシェンにお見舞いした。相変わらずダメージは少ないが、少しばかりは与えている。

「パルシェン！ れいとうビーム！」

「クイック！ こうそくいどう！」

クイックの苦手なこおりタイプのわざをパルシェンは放つ！ だが、クイックはこうそくいどうや持ち前のすばやさでそれをかわした。

「クイック！ からげんきだ！」

うまくれいとうビームをかわしたクイックはからげんきで攻撃をした。どく状態であるから倍のダメージがからげんきに付加する！

パルシェンはそれに対してバリアーを張った。

「無駄だぜ！ 状態異常による追加ダメージはからげんきだけじゃないんだ！」

そう、からげんきは状態異常になれば二倍の追加ダメージがある。だが、クイック——オオスバメには特性の”こんじょう”が備わっ

ている。これは状態異常になると威力が一点五倍になるのだ。

つまり、からげんきは、三点五倍の追加ダメージが付加されるのだ。

強化されたからげんきの前にバリアーは崩れ去り、パルシエンはダメージを負った。しかも、莫大な威力だ。

「くっ！ パルシエン！ れいとうビーム！」

パルシエンはダメージをふりきりれいとうビームをクイックにヒットさせた。クイックはそれにより大ダメージを負った。

だが、クイックはそれでも倒れなかった。そして、再度からげんきでパルシエンを攻撃したのだ。

ほぼ当然ながら、パルシエンは戦闘不能となった。巨大なからげんきの前にさすがのパルシエンも倒れてしまったのだ。

「戻れ！ パルシエン！ ご苦労様だったな。さあ、次はこいつだ！」

キータはパルシエンを戻すとキングラーを出してきた。

「じゃあこちらからいかせてもらいますよ！ クイック！ 行け！」

まだ、戦闘不能にならないタフなクイックはキングラーに近づいていった！

キングラーはクラブハンマーで迎えてたが、クイックのすばやさ

によりかわされてしまいダメージを負った。

「クイック！ もう一度……！」

そのときだった。クイックは上空には戻らずそのままプールの中に落ちたのだった。

そう、ついに力尽きてしまったのだった。

「クイック！ 戻れ！」

ラルドはクイックをボールに戻して「お疲れ様」と一言言っただった。

クイックのボールをしまつと次のボールを取り出した。それはもちろんラグだ。

「こないのか？ ならばこちらから！ キングラー！ バブルこうせん！」

ラグが出てくると、少しばかり間が空いた。いつもならばラルドから先制攻撃をしてくるのだが、こなかったのでキータが先に攻撃したのだった。

バブルこうせんはラグが水中に戻ったことによってかわされてしまったが、キングラーはそれを追跡する。

「クラブハンマー！」

そして、水中でもクラブハンマーを放ったが、ラグはそれをアイ

アンテールで防いだ。

防ぐとラグは一気に水中から出た。それと一緒にキングラーも水中から出てきた。

「さっきまでの君と違うね。攻撃ばかりしてきたのに今回は逃げばかりだ」

「俺はもう先手は打ってありますよ」

「なに？」

「キングラーをよく見てあげてください」

ラルドにそういわれキータがキングラーをよく観察した。するとかなり疲れきっているようだった。それは戦闘不能に近いほどだった。

「バカな。キングラーが受けたダメージはオオスバメによるダメージだけのはずでは……。いくらからげんきが巨大なダメージを与えらとしてもここまで与えるはずは……」

「あなたは気づかなかったんですね。クイックがしたわざがからげんきでないことを」

「まさか……」

「多分そのまさかはあっていると思います。クイックはからげんきをしたんじゃないですね。がむしゃらを使ったんです！」

がむしやら——それは、自分の受けたダメージと同じものにするわぎ。自分がダメージを受ければ受けるほど、相手に与えた時のダメージは大きくなるのだ。

クイツク自身も前のバトルでダメージを受けていたし、どく状態でも受けていた。そして、あのれいとうビームを受けたことによりほぼひんし状態に近くなっていたのだろう。

ただ、ラルドにとってどくによるダメージで戦闘不能になることまでは思っていなかったらしい。

「くっ、まさかこんなことになるなんて」

「さあ行きましょう！ ラグ！ れいとうビームだ！」

ラグはれいとうビームを放った。一直線にキングラーめがけて飛んでいく！

「キングラー！ 水中に身を潜めるんだ！」

キングラーは水中に飛び込みれいとうビームをかわした。それに伴いラグも水中にもぐりこんだ。

「ラグ！ アイアンテール！」

「じたばただ！ キングラー！」

キングラーはアイアンテールで攻撃をしてこようとしたラグに向かってじたばたし始めた。ラグはそれをうまくかわそうとしたが、少しばかりダメージをおってしまった。

だが、少しばかりといっても多大なダメージをおっているキングラーのじたばたは強烈だった。

「キングラー！ クラブハンマー！」

じたばたの域から抜け出したラグにむかってキングラーはクラブハンマーで攻撃をしてきた。

「ラグ！ アイアンテールだ！」

それに気づいたラルドはクラブハンマーに対してアイアンテールで攻撃をした。

二つのわざは水中でぶつかり合い、力と力の勝負になった。

そして、勝負にピリオドが打たれた……。

「戻れキングラー」

水中に沈んでいったキングラーをキータはボールに戻した。ラグは陸上に戻っていた。

「僕の負けだね。さあ、次の部屋にいくといい」

キータは次の部屋にいくための扉を開けた。

「ありがとうございます！ ラグ行こう！」

ラルドはそういつて、走りだした。その姿を見たラグも一緒に走

り出した。

第三の四天王を倒したラルド。次は四天王最後の砦だ。

第四十八話終了第四十九話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV87

クイック（オオスバメ）LV86

ゲイト（オーダイル）LV86

ロック（ボスゴドラ）LV85

フライ（フライゴン）LV85

第49話 「白のメロディ」

白を基調とした——いや、ほぼ真っ白な部屋の中にいたのは、白の服ではなく赤系の服を着ていた女性だった。ラルドが部屋に入っただけの瞬間、一番目についたのは彼女だった。

「よくここまで来たね。あたしが最後の四天王のメロディだよ。さあ、早くバトルしよう」

メロディはそう言うと、ラルドにバトルする位置を勧めた。そして、二人がその場に立つと、メロディは言った。

「いい加減わかっていないけど、あたし達は部屋の色で使うタイプがわかるんだ。あたしは白。一体なにがでてるかな？ さあ、そんなことを考えながらバトル開始だよ！ いけえ！ ミルタンク！」

「頼んだぜ！ ロック！」

メロディはミルタンク。ラルドはロック（ボスゴドラ）を出した。どうやら、メロディはノーマルタイプの使い手のようだ。だが、ラルドが考えていたのはこおりタイプだったから彼の予想はずれた。

だが、ノーマルタイプには有利なはがねタイプのロックを出したことから、有利な立場になったのは予想外だった。

「ロック！ かわらわりだ！」

「こちらもよ！ ミルタンク！」

両者ともかわらわりで攻撃をした。それらはどちらにもあたり両者にダメージを与えた。

「ひるむな！ アイアンテール！」

ロックはダメージにひるむことなくアイアンテールをミルタンクに攻撃をした。ミルタンクはふきとばされず耐えた。

「ミルタンク！ じしん！」

「まもるだ！」

ミルタンクはじしんを起こした。だが、ロックはそれをまもるで身を守った。そして、そのまもるが切れたときだった。

「なに！？」

「ミルタンク！ みずのはどう！」

ミルタンクのみずのはどうがロックを襲った！ いわタイプも持つロックにはこうかばつぐんだ！ ロックはそれを受け大ダメージを受けたが、なんとか耐えることができた。

ミルタンクは、地をれいとうビームで凍らせた。そして、その氷の上をころがるでころがり、みずのはどうでロックを攻撃した。――これらの攻撃をじしんを起こしているあの一瞬で起こしたのだ。

「なめてもらってはこまるよ。あたしは四天王の最後の砦なんだからね。ミルタンク！ もう一回みずのはどう！」

「くっ、ロック！ 同じくみずのはどうだ！」

ロックとミルタンクのみずのはどうがぶつかり合った。両者とも押し合った結果、同時に消滅した。

それと同時にミルタンクは先ほどの氷を使いこらるで攻撃を仕掛けてきた！

「みずのはどう！」

「あなをほるで回避だ！」

急激に接近しみずのはどうを放ってきたミルタンクに対してロックはあなをほるでそれをかわした。ミルタンクもその穴の中にまで入って攻撃をしようとはしなかった。だが、代わりにじしんをくりだしてきた。

じめんタイプのわざはロックがもつとも苦手としているわざで、地中にいるためダメージは倍になる！

じしんが起こり、数秒たってもロックは地上に戻ってこない。それを見たメロディは言った。

「どうやら戦闘不能みたいね。彼を戻してあげて」

「……。ロック……。！ あなをほる攻撃！」

ロックはミルタンクの下から飛び出しダメージを与えた！ ロックは戦闘不能ではなかったのだ！

「続けてアイアンテール！ すてみタックル！」

あなをほるで崩れ落ちたミルタンクはさらにアイアンテールによる攻撃を受け、すてみタックルのダメージまでも受けた。

「ミルタンク！ ミルクのみ！」

「させるか！ はかいこうせんだ！」

ミルタンクは回復を始めた。しかし、それは少しばかりで回復中であるためはいかいこうせんをかわすことができなかった。

はいかいこうせんを受けたミルタンクはふきとばされ、飛ばされた先で倒れてしまった。もうミルタンクが立つ能力はもうない。

「戦闘不能か。戻って、ミルタンク」

メロディはそういつてミルタンクを戻した。すると、さらに続けた。

「ミルタンクに勝ってもまだあたしにはこの子がいる。おそらくあなたはまだ一回もあつたことがないこの子が！」

メロディはそう言うを取り出したボールを投げた。すると、そこからはポリゴンに似ているポケモンが出てきた。

「この子はポリゴンZ。ポリゴンの二進化系。さあ、バトル開始よ！」

「どんなポケモンであろうが俺は負けない！ ロック！ アイアンテール！」

「ポリゴンZ！ ロックオン！」

ポリゴンZにアンアンテールをお見舞いしたロックに対して、ロックオンで焦点を定めたポリゴンZ。アイアンテールで飛ばされたそのときだった。

「でんじほう！」

「なっ！？ はかいこうせん！」

ロックオンされたことにより、ラルドはでんじほうの警戒を始めようとした。だが、そんなことをする前にポリゴンZはでんじほうを放ってきた！ ラルドはそれに対処するためにはかいこうせんを放ったが、それはほぼ無駄になった。

でんじほうがぶつかる数秒前に放たれたはいこうせんだったが、すぐダメージを受けたため、はいこうせんの距離がポリゴンZまでとかなかったのだ。

ロックはその場に倒れ、戦闘不能となってしまった。

「戻れ！ ロック！ お疲れ様。よし、頼んだぜ！ ラグ！」

ロックを戻したラルドはラグ（ラグラージ）を出した。

「先手必勝だぜ！ ラグ！ れいとうビーム！」

ラグを出したラルドは一気にれいとうビームを放った。ポリゴンZはそれを受けてしまった。

「ポリゴンZ！ シグナルビームで反撃！」

「ラグ！ もう一度れいとうビームだ！」

ポリゴンZのシグナルビームはラグのれいとうビームとぶつかった。シグナルビームはれいとうビームに押し負けてしまい、消滅してしまった。そして、れいとうビームはポリゴンZに向かっていく！

「テクチャー2！」

ポリゴンZはこおりタイプに変化した！ それによって、れいとうビームを受けてもあまりダメージを負わなかった。

「なっ！？ ならばラグ！ かわらわりだ！」

ラグはポリゴンZに近づいていきかわらわりで攻撃をした。ポリゴンZはそれをかわし、サイコキネシスで逆にラグを攻撃した。

「そのままアイアンテール！」

ポリゴンZはアイアンテールでラグをラルドの元へ吹き飛ばした！ すると、ポリゴンZはロックオンをしてから光りだしたではないか！

「チャンスだ！ ラグ！ ハイドロポンプ！」

ラグはハイドロポンプを発射した。ポリゴンZはそれを受けたが、

ひるむことなくいまだに光っている。否、さらに光は強くなっている！

そして、最大限に光が強くなったそのときだ！　ラルドはなにが起こるかがわかった。

「ソーラービームだ！」

「遅いわ！　発射！」

「ラグ！　ハイドロポンプ！」

ポリゴンZによるソーラービームに対してラグはハイドロポンプを放った！　ロックオンをされている今、ほとんどそれは意味がないことを知りながら……。

ソーラービームはハイドロポンプとぶつかりあった。しかし、ソーラービームが持つ使命を果たすためハイドロポンプを一気に消滅させた。

「ラグ！」

ハイドロポンプを消滅させたソーラービームは見事にラグに当たってしまった。ラグがもつとも苦手とするくさタイプのわざのダメージを受けてしまったのだった。

ラグは強烈なわざを受けたためふきとばされてしまい、壁に思いつきりぶつかってしまった。

「これで戦闘ふの……！」

メロディが戦闘不能と言おうしたときだった。ラグはなんと立ち上がったのだ！

「ラグ！」

「なんてタフなラグラージなの……。でも、もうほとんど体力なんて残っているはずはない。ポリゴンZ！ サイケこうせん！」

「ラグ！ ハイドロポンプだ！」

ポリゴンZのサイケこうせんとラグのハイドロポンプはぶつかり合った。サイケこうせんはハイドロポンプの強力すぎる水圧に押し切られてしまった！

ハイドロポンプは一気にポリゴンZにあたり大ダメージを与えた。特性”げきりゅう”の効果だ！

「ポリゴンZ！」

メロディがそう呼びかけたそのときだった。

ポリゴンZの目の前にラグが突如現れたのだ！

「がむしゃらからかわり！」

ラグはがむしゃらで一気にポリゴンZの体力を減らした。そして、ほとんど残っていない体力に追い討ちをかけるようにかかわりで攻撃した！

こおりタイプに変化している——ノーマルタイプでも変わらないが——ポリゴンZはかくとうタイプのわざを受けたことにより巨大なダメージを受けてしまったのだった。

そうして、ポリゴンZは地面に倒れた。

「戻って、ポリゴンZ」

メロディはそう言うのとポリゴンZをボールに戻した。そして、言った。

「あなたが来る前に一人の女の子が来たわ。彼女はあたしを倒して奥の部屋に進んだ」

「エメルのことですね」

「あら？ よく知ってるわね。ええ、そうよ。奥の部屋で彼女が待ってる。彼女こそこのリーグの最後の相手。がんばってね」

メロディはそう言うのと奥に進むための扉を開いた。

ラルドはラグをボールに戻して奥へと進んだ……。

第四十九話終了第五十話に続く……

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラゲ(ラゲラージ) LV 88

クイック(オオスバメ) LV 86

ゲイト(オーダイル) LV 86

ロック(ボスゴドラ) LV 86

フライ(フライゴン) LV 85

第50話 「六対六のフルバトル！」

メロディの部屋から次の部屋に入るときの扉はこれまでの扉と違っていた。大きく飾りつけがない。まるで、挑戦者にプレッシャーを与えるような威圧感があった。

ラルドはそのプレッシャーを背負いながら奥へと入っていった。そこは灰色のコンクリート造りであることを感じさせた。

「来たわね、ラルド」

「エメル！」

「私が先に四天王に挑戦したのが運のつきってところかな？ 私がこのマレーリーグの頂点に立ったんだから。あなたより先に挑戦したから」

「へん！ 運のつきは俺だぜ！ お前には絶対負けない！ 俺が負けたのは最初のバトルのときだけだ！」

最初のバトル——それはラルドとエメルが始めてであったときのことだ。百三番道路でのあの……。

「なつかしい話しを持ち出すのね。でも、それは昔の話。私だってあのときより強くなったわ。そういえば、あの時以来私たちはバトルしていなかったわね。だったら……ここで決着をつけるだけよ」

「俺の方が強いことを証明してやるぜ！」

「ふふ、その前にラルド。こっちにあるこれにボールを乗せなさい」

エメルはそう言うその後ろにある機械を指差した。それはポケモンセンターに必ず常備されているポケモン回復機である。これにボールを乗せることでポケモンを回復させることができるのだ。

ラルドは最初「なぜ？」と思ったが、エメルの顔を見ていればわかった。弱っているラルドと戦っても仕方がない。完全なラルドと戦わなければ意味がないのだ……と。

それを理解したラルドだったので、機械にボールを六つ乗せ、ポケモンたちを回復させた。

「ルールは六対六のフルバトル。シングルバトルよ」

「いいだろう。望むところだ」

「バトル開始よ！ 行くのよ！ キツガ！」

「頼んだぜ！ クイック！」

ラルドはキツガ（キノガッサ）。ラルドはクイック（オオスバメ）を繰り出した！ そうして、マーレリーグ最後のバトルが始まった。

「先手必勝だ！ クイック！ つばめがえし！」

クイックは一気にキツガに近づいていく！

「ラルド。私はあなたの行動パターンは大体わかる。あなたの一番手がクイックであることも！ キツガ！ カウンター！」

つばめがえしのダメージを受けたキツガ。だが、それに負けじとキツガはカウンターを繰り出しクイックに自分が受けた倍のダメージを与えた。それによって、クイックは一気に体力が削られてしまった。

「負けるなクイック！ そらをとぶ攻撃！」

クイックは上空に飛び上がり、キツガに狙いを定めるため少し静止した。そのときだった！ キツガが攻撃してきたではないか！ しかも、自分の体で。

「なっ！？ まもるだ！」

ラルドはそのとつさの状況にまもるを使った。しかし、それは遅くキツガの攻撃を受けてしまった。

「キツガのスカイアッパーを忘れないでよ！」

「厄介だな。ならば、がむしゃらだ！ クイック！」

クイックはがむしゃらでキツガの体力を一気に減らした！ クイックのすばやさでキツガはそれをかわすことができなかったのだ。

「続いてつばめがえし！」

「キツガ！ タネマシンガン！」

キツガは近づいてくるクイックにタネマシンガンを放つがすべてかわされてしまった。そして、クイックのつばめがえしはキツガに

直撃した！

すると、キツガはその場にばたんと倒れた。ラルドは「倒した」と思ったとき、次のばたんという音がたった。

バトルフィールドには、キツガとクイックの二匹が倒れているのだった！

「くっ、カウンターをあの場面で使うとは……」

「お疲れ様、キツガ。戻って」

「戻れクイック！ サンキューな」

二人はそれぞれのポケモンをボールに戻し、次のボールを取り出した。

「頼んだわよ！ クーチ！」

「いけ！ ゲイト！」

次に出したのは、ラルドはゲイト（オーダイル）。エメルはクチ（クチート）だった。

「ゲイト！ ハイドロポンプ！」

「クーチ！ れいとうビーム！」

ゲイトの巨大なハイドロポンプが放たれ、それは一直線にクーチへと向かっていく！ だが、それをクーチはれいとうビームで凍ら

自分を守った。

「ゲイト！ きあいパンチ！」

きあいパンチの力をためながらクーチへと近づいていく！

「クーチ！ ヘドロばくだん！」

近づいて来るゲイトに対してクーチはヘドロばくだんを放った。だが、それはかわされてしまいきあいパンチを受けた！ こうかはばつぐんだ！

「くっ。クーチ！ てっぺき！」

「ゲイト！ かわらわりだ！」

クーチがてっぺきをしてからゲイトはかわらわりで攻撃をした。そのため、かわらわりのダメージは減らされてしまった。

「かみくだくよ！」

「ゲイト！ ハイドロポンプ！」

かわらわりで攻撃していたゲイトに対してクーチはかみくだくで一気にかみついた。かみつかれたゲイトは暴れながらもハイドロポンプを放ち、クーチにダメージを与えた。

だが、それでもクーチはかみつづけ、オーダイルの巨大な体を放り投げたではないか！

「さすがクーチ！ 今度はにほんばれ！」

「がんばるんだゲイト！」

ゲイトは立ち上がった。そのときにはほんばれの効果であたりは暖かくなっていた。そして、明るくなり小太陽がその場に出てきたようだった。

「いっけえ！ クーチ！ ソーラービーム発射！」

「ハイドロポンプ！」

ゲイトが立ち上がったその瞬間ソーラービームは発射された！

ラルドはそれに対してハイドロポンプを放った。二つのわざはお互いにぶつかり合った！

「まずい……このままじゃ」

ラルドはそう思った。二つのわざは引けを取らず同じ場所に停滞している。このままでは……爆発は避けられない。その爆風にゲイトは吹き飛ばされてしまうだろう。ラルドはそう考えたのだ。

一方のクーチははがねタイプ。爆風程度じゃないことはない。

「ゲイト！ まもる！」

ゲイトはハイドロポンプを放つのをやめ、まもるを使った。それと同時にソーラービームはハイドロポンプを押しながらゲイトに迫ってくる！

そのときだ！　ラルドが恐れていた爆発が起こったのは！　だが、ゲイトはまもるで身を守っている。まったく問題ない。

爆発による煙の中。ゲイトのまもるは途切れた。この煙の中では身動きはほとんどできない。ラルドは煙が晴れるのを待っていた。

だが、その煙が晴れるのを待っているのは大きな間違いだった。煙が晴れたとき、ラルドの前に現れたのは倒れたゲイトの姿だったのだ！

「な！？　ゲイト！」

ゲイトは戦闘不能となっており、ラルドはボールに戻した。ボールに戻し、エメルのほうを見るとそこにはクーチではなくノズパスが立っていた！

「ふふ、驚いたわね。クーチのバトンタッチでクーチを戻してノズを出したのよ。その後はわかるわよね。ロックオンでゲイトをロックしてでんじほうで攻撃」

「くつ。ならば頼んだぜ！　フライ！」

ラルドはフライ（フライゴン）を出した。いわタイプのノズ（ノズパス）に対しては有利である。

「フライ！　りゅうのいぶき！」

「残念ねラルド！　戻るのよノズ！　頼んだわ！　クーチ！」

エメルはノズを戻しクーチを再度出してきた。

「フライ！　じしん！」

「クーチ！　てっぺき！」

フライゴンはじしんを起こした。はがねタイプのクーチに対してはこうかはばつぐんだ！　だが、そのこうかはばつぐんのわざをてっぺきでクーチはダメージを軽減させた。

「そんなに耐えられるかよ！　フライ！　もう一度じしん！」

「あなたももう一回よクーチ！　てっぺき！」

今度も同じことが起こった。先ほどとまったく同じだ。だが、違ったのはじしんを起こしたフライがクーチに攻め寄ってきていることだ！

「至近距離からかえんほうしゃ！」

「クーチ！　かげぶんしん！」

クーチは一気にぶんしんを作り出した。だが、フライはそれらに対しておかえんほうしゃをすばやく、確実に放ち本物のクーチにダメージを与えた。

「とどめだ！　じしん！」

「クーチ！　バトンタッチ！」

エメルはクーチはバトンタッチでクーチを戻そうとした。だが、

バトンタッチをされる前にフライのじしんがクーチを揺さぶりダメージを与えた！

そのダメージでクーチは戦闘不能となってしまうた。

「戻ってクーチ。お疲れ様。次はこの子で勝負！ がんばって！
グラ！」

エメルはクーチを戻してグラ（トドゼルガ）を出してきた。フライの苦手なこおりタイプを持っているグラは強敵である。

「このまま行くぞフライ！ ソーラービームだ！」

フライはそう指示されソーラービームのチャージを開始した。すでににほんばれの効果は薄れつつあったが、まだ効果は少量ながらも残っていた。それによって、普通より少しばかり早くソーラービームは放たれた。

フライのチャージ中にグラはれいとうビームをはいていた。それはフライに当てることなくあたりにはいているのだ。

そして、いざソーラービームが発射されるとグラは凍らせた地面をすべりそれをかわした！

「なに！」

「グラ！ 今度こそフライにれいとうビームよ！」

グラは床を滑りながられいとうビームをフライに放ってきた。

「フライ！ りゅうのいぶき！」

れいとうビームに対してフライはりゅうのいぶきを放った。だが、れいとうビームが勝利しフライはれいとうビームによるダメージを受けてしまった。もっとも苦手とするわざのダメージを受けたフライは一気に体力が減ってしまった。

「グラ！ もう一度れいとうビーム！」

「フライ！ かげぶんしんでかわすんだ！」

フライはかげぶんしんでれいとうビームをかわした。そして、グラがどれが本物かを見極める前にたくさんの分身がグラにドラゴンクローでかかってきた。

「ふぶき！」

グラは前から来ている複数のフライたちに攻撃をした。だが、それらのフライはすべて分身。本物のフライはグラにドラゴンクローを決めた！

「そのままかみくだく！」

「グラ！ アイアンテール！」

グラはフライにかみくだくでかみつかれてるにもかかわらず、アイアンテールでかみついているフライを叩き落とした。

「グラ！ れいとうビーム！」

「フライ！ はかいこうせん！」

倒れているフライに対してグラはれいとうビームを放った。だが、体勢が整っていないフライもはかいこうせんをグラに放った。

するとどうだろう！ れいとうビームとはかいこうせんが今までどおりぶつかり合うかと思ったが違ったではないか！

れいとうビームとはかいこうせんはすれ違い、両者はそれぞれのわざのダメージを受けた。

「フライ！」

「グラ！」

わざを受けたフライとグラはそのわざで戦闘不能となってしまった。

これに関してエメルは以外だっただろう。あまりダメージを受けておらずタフなグラだ。なのに、ドラゴンクロー、かみくだく、はかいこうせんの三つのわざで戦闘不能となってしまうたのだから。

彼女は驚きに絶えながらもグラを戻し、ラルドもフライを戻した。

マーレリーグ最上級の戦いであり友人同士の戦い。残りの手持ちはそれぞれ三匹。両者互角の実力。

このバトルはどちらに勝利の女神が微笑むのだろうか……。

第五十話終了第五十一話に続く・・・

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV88

クイック（オオスバメ）LV86

ゲイト（オーダイル）LV86

ロック（ボスゴドラ）LV86

フライ（フライゴン）LV86

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV90

グラ（トドゼルガ）LV85

サート（サーナイト）LV85

クーチ（クチート）LV85

キツガ（キノガッサ）LV85

ノーズ（ノズパス）LV84

第51話 「切り札」

ラルドの手持ちで倒されたのは、クイック、ゲイト、フライ。エメルの手持ちで倒されているのはキツガ、クーチ、グラ。

お互い、残り三対ずつ同士になり、バトルは後半戦へと突入する。

「次はこいつだ！ 頼んだぞ！ ロック」

「私はこの子よ！ がんばって！ ノーズ！」

ラルドはロック（ボスゴドラ）。エメルはノーズ（ノズパス）を出してきた。この場面ではロック優先である。

「はがねに岩は弱いぜ！ ロック！ メタルクローだ！」

ロックはその巨体をゆらしながらノーズへと近づいていく！ ノーズはそれをかわそうとしない。

そのため、ロックはメタルクローでノーズを攻撃した。そして、そのときにノーズはでんじほうを放った！

でんじほうを受けたロックはでんじほうの効果によってまひ状態になってしまった。

「くっ、まひとは厄介な。だが、このまま負けるわけにはいかない！ ロック！ アイアンテール！」

「ノーズ！ かげぶんしん！」

まひ状態となってしまったロックだったが、なんとかノーズに近づきアイアンテールで攻撃をした。だが、それをかげぶんしんでかわされてしまった。

「ノーズ！ じしん！」

「ロック！ まもるだ！」

ロックはまもるを使おうとした。だが、それは不発に終わった。まひによってわざを使うことができなかったのだ。

それによって、ロックはじしんのダメージを——一番苦手なじめんタイプのわざを——受けてしまったのだ！

こうして、ロックはその場に倒れこんだ。そう、戦闘不能となってしまったのだ。ラルドの手持ち一のタフなあのロックが……。

「ロック！ 戻れ！ お疲れ様。さあ、次はこいつだ！ 頼んだぜ！ ラグ！」

ラルドはラグを出した。ラルドが一番信用していて、一番付き合の長いポケモンだ。

「ふふ、ラグで来るのね。ノーズ戻って」

エメルはノーズをボールに戻した。

「あなたがラグ——ミズゴロウでくるなら、私はこの子で勝負！」

私と一番付き合いの長いこの子で！」

エメルはそう言うところグリーン（ジュカイン）を出してきた！

「最初にもらったポケモン同士でやろうってか。面白い」

「ええ。行くわよ！ グリーン！ リーフブレード！」

「かげぶんしんでかわせ！」

すばやく攻め込んできたグリーンをラグはかげぶんしんでかわした。それによって、リーフブレードをかわしたのだ。

「れいとうビーム！」

「グリーン！ ジャンプ！」

横に向かって飛んでいくれいとうビームに対してグリーンは上空に飛びそれをかわした。そして、上からタネマシンガンを影にどんどんと攻撃していった！

無数に飛び回るタネマシンガンが本物のラグに直撃しラグはダメージを負った。だが、タネマシンガン自体の威力が弱いためそれほどダメージは受けなかった。

「れいとうビームだ！ ラグ！」

タネマシンガンを押し切りラグはれいとうビームを放った！――直線に飛んでいきグリーンにダメージを与えた！

「グリーン！」

「そのままれいとうビームを放ち続けるんだ！」

落ちてきているグリーンにラグはれいとうビームを放ち続けた。

グリーンはそのダメージを負っているように見えた。だが、地上に着地したグリーンの顔からはそのダメージを思わせなかった。どうやら、ダメージを負っていないかったらしい。

「れいとうビームなんてリーフブレードでできるわ！　グリーン！　れいとうビームを切り裂いたリーフブレードよ！」

グリーンは一気にラグに近づいて来る！

「ラグ！　マッドショットからどろかけ！」

一気に近づいてきているグリーンはマッドショットをかわすことができなかった。そして、その次のどろかけも……。それらのわざを受けたことによりグリーンのすばやさは下がり命中率も下がってしまい、リーフブレードはラグに当たらなかった。

それどころか、近づいてきているグリーンに対してラグはとっしんで攻撃をした。

「れいとうビームだ！」

「タネマシンガン！」

速攻を仕掛けてきたラグだったが、それをグリーンはうわまってタネマシンガンでラグに攻撃をした。

「そのままリーフブレード！」

「ラグ！ ハイドロポンプ！」

ラグはグリーンに対してハイドロポンプを放った。だが、グリーンは持ち前のすばやさでそれをかわしてリーフブレードでラグを攻撃した。それによって、ラグの体力はほとんどなくなってしまった。

「ラグ！」

「これでとどめよ！ グリーン！ もう一度リーフブレード！」

グリーンはラグに詰め寄る！

「ラグ！ れいとうビームからハイドロポンプだ！」

二つの攻撃をグリーンは回避した。それらの攻撃は無駄に終わってしまった……と思われた。

「今だ！ ふぶき！」

「グリーン！ ジャンプ！」

グリーンはジャンプすることができずその場に倒れているままだった。そのグリーンにふぶきが直撃する！ こうかはばつぐんだ！

「グリーン！ 戻って！」

ふぶきを受け続けたグリーン。がんばって耐えていたが、足元が

凍り動けない状態となつてしまい、かわすことができなくなつてしまった。こうして、グリーンは戦闘不能となつてしまった。

ラグのれいとうビームとハイドロポンプ。れいとうビームで地面は凍った。グリーンは足元を滑らそうとしていたのかもしれないが、ジユカインの特徴でそれは期待できなかった。

だが、次のハイドロポンプで状況は変わった。氷の上に水がかかったことにより、通常よりも滑りやすくなったのだ！ さすがのグリーンもそれには耐え切れなかった。

そして、あのふぶきだ。なんせこうかはばつぐんだたし、足元の水が凍り始めグリーンが足が凍ってしまったのだ。こうして、グリーンは逃げるができずそのまま戦闘不能となつてしまった。

「よく考えたものね。さあ、次行くわよ！ 行くのよ！ サート！」

エメルは新しいボールを取り出しサート（サーナイト）を繰り出してきた。

「今度はこちらから行くわよ！ サート！ サイコネシス！」

「ラグ！ かわして」

サートは鋭いサイコネシスで攻撃をしてきた。ラグはそれを横にステップしてかわした。そして、サートにハイドロポンプを放った。

「サート！ さいみんじゅつ！」

「まずい！？ ラグかわせ！」

ラグはさいみんじゅつをかわすことに成功した。しかし、さいみんじゅつは後から使われたサイコネシスにより自由自在に動き回ることが可能になっていた！ 自由自在に動くさいみんじゅつをさすがにかわすことはできなかった。

「ラグ！」

「今度こそとどめよ！ サート！ はかいこうせん！」

サートははいこうせんを放った。眠っているラグはいくらラルドが問いかけてもおきなかった。

——そして、ラグは力尽きた。

「戻れ。ラグ」

「ふふ、さあ、ラルド。あなたの最後の一匹を見せなさい。あなたの最後の一匹。それは私は見たことはない。ハウエンリーグのときも出していなかったわよね」

「……」

「レックウザも逃がした。なら、ちゃんとした六匹目はいるはずでしょう？ 回復マシンに乗せた時だって、ボールは確かに六つあったわ」

「ああ、こいつが最後の一匹だ」

ラルドはそう言う一つのボールを取り出した。そして、それを投げた。まばゆい閃光の中から黄色いちくちくしているポケモンが

姿を現した。

「そのポケモンはグッグルさんも使っていた……」

「ああ、サンダースだ。ホウエンには生息していないイーブイから進化したポケモン」

「あなたの最後の切り札つてわけね。望むところよ！ 行くわよ！
サート！ サイコネシス！」

「かわせ！ サース！」

サースと呼ばれたラルドの切り札であるサンダースはサートのサイコネシスを余裕の表情でかわした。それはすばやさが高いだけではない。彼のレベルが高いということもあるのだ！

サートのサイコネシスは決して悪いところなどなかった。なのに余裕でかわされたのにはそれしか理由はないのだ！

「十まんボルト！」

「サート！ サイコネシス！」

飛んでくる十まんボルトをサートはサイコネシスで受け止めた。そして、それをサースに返してやった。だが、それを受けたサースはダメージを受けるところかどこか体力を回復したように元気だった。

「サースの特性”ちくでん”にでんきタイプのわざは意味がないぜ！
もう一度十まんボルトだ！」

「サート！ テレポートでかわすのよ！」

サートはテレポートでサースの後ろに回りこんだ。そして、サイコネシスを放った。

「こうそくいどうだ！ サース！」

サースはサイコネシスをかわした。そして、サートにすばい動きで近づいていく！

「サート！ シャドーボール！」

「サース！ アイアンテール！」

サースはシャドーボールをもろともせずにアイアンテールでサートを攻撃した。そして、かみなりをお見舞いした！

その攻撃にサートは倒れてしまった！ まさか……エメルはそう思った。

「まさかこんな強敵が最後に残っているなんて……」

エメルがサートをボールに戻してからいった。

「こいつにかなう奴はいない。ラグと共に俺と歩んできたこいつなら」

「私はまだあきらめないわ。あなたが強敵を残していても。さあ、行くのよ！ ノーズ！」

エメルはノーズを繰り出してきた。エメル最後の一匹だ。

「これがラストバトルというわけか」

「ええ。ついに決着が付くのよ！ 行くわよ！ ノーズ！ じしん！」

「サース！ こうそくいどう！」

ノーズのじしんが起こっている中サースはあたりを走りまわった。少しでも地面のゆれから逃れているのだ！ だが、ダメージがないわけではない。確実にサースの体力は減っていつている。

「十まんボルトだ！ サース！」

「ノーズ！ まもる！」

じしんが終わるとサースは十まんボルトをノーズに放った。だが、ノーズはそれをまもるで身を守った。

「ノーズ！ すてみタツクル！」

「サース！ 迎え撃て！」

ノーズがすてみタツクルで攻撃を仕掛けてきた！ サースはそれに対してただ迎え撃つ体勢になっているだけだ。

「アイアンテール！」

ノーズが十分サースに近づいてくるとアイアンテールでノーズを一気に吹き飛ばした。こうかはばつぐんのダメージを受けたノーズだったが、まだ体力は残っていた。

「くつ。ノーズ！　じしんよ！　さらにじしんを起こすの！」

「サース！　耐えるんだ！」

サースは苦手なじめんタイプのわざを耐え始めた。だが、こうかはばつぐんなこのわざをさすがのサースも耐え切れるかどうかかわからない！

そして、じしんが終了して次のじしんを起こされる前のことだ！

「今だ！　サース！　最大パワーのかみなり！」

「！？　ノーズ！　じしんはやめてかげぶんしんでかわすのよ！」

ノーズはじしんをキャンセルしかげぶんしんをした。だが、そのかげぶんしんは意味を成さなかった。強力なかみなりが影もろとも全体に攻撃をしたのだ！

こうして、ノーズは戦闘不能となった。

第五十一話終了エピローグに続く・・・

ラルドのトレーナーカード
ハウエン
バッジ：八個　マーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV90
クイック（オオスバメ）LV86
ゲイト（オーダイル）LV86
ロック（ボスゴドラ）LV86
フライ（フライゴン）LV86
サース（サンダース）LV92

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個^{ハウエン}マーレ島バッジ：八個

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV90
グラ（トドゼルガ）LV85
サート（サーナイト）LV85
クーチ（クチート）LV85
キツガ（キノガッサ）LV85
ノーズ（ノズパス）LV85

エピソード

「ふう、負けちゃったなあ」

ラルドの戦いを終え、ノーズを戻したエメルは言った。

「まさかこいつを出すとは思ひもなかったけどな」

ラルドにくつついているサースをなでながらラルドは言った。

「いつそのサンダースを手に入れたの？」

「ラグと共に歩んできたって言っただろ？　そのときからだよ」

「そうじゃなくて、一体、どこでその子をつまえたの？」

「ああ、ラグがまだミズゴロウだったときで旅に出発する時に父さんからもらったんだ。もちろん、そのときはまだ進化前のイーブイだったけど。」

父さんはいろんな地方に行くからハウエンでは珍しいポケモンをつまえてくるんだ。ゲイトだってその一匹さ」

「それでいつサンダースに？」

「テッセンさんからニューキンセツを調べてきて欲しいって言われた時があったんだけど、そのときに拾ったかみなりのいしで進化させた」

「そうだったの」

「それよりエメル。お前、この島に来る時『リーグチャンピオンに勝つと、ポケモンがもらえるらしい』っていったけど、リーグチャンピオンって誰だよ？」

「その質問にはあたしが答えるわ」

ラルドとエメルが話している時、メロディの部屋のほうから別の人物が四人入ってきた。それは、マーレリーグの四天王たちだった。

「メロディさん」

「リーグチャンピオンって言うのはこのマーレリーグには存在しないの」

「え？」

「つまり、このマーレリーグを勝ち抜いた奴はいないのさ」

リッドが言った。

「それじゃあ、私たちが」

「最初に勝ち抜いたっていうことですか？」

「そう言うことだな」

「ぼくたちに勝った人物はそれほどいません。それよりも、グッグルに勝ったものの方が少ない。あいつはジムリーダーとしての実力がありすぎるからね」

キータが言った。

「ところで、ポケモンはどうなるんですか？」

「残念ながらまだ準備していないの。でも、これを準備しているわ」

そう言うつとメロディは二枚のチケットを差し出した。

「これは？」

「シンオウ地方行きのフェリーのチケット。これを使えばシンオウ地方に行くことができるわ」

「シンオウ地方？」

「ここから結構はなれたところにある地方さ。カントー地方からずっと北に行けばある大きな地方よ」

ヴェラが言った。

「そこにはハウエンやマーレじゃ見れないポケモンがたくさんいる。そこで、新しいポケモンを捕まえるといい」

「見たことのないポケモン……」

「ええ、さあ受け取って」

メロディの取り出したチケットを二人は一枚ずつ取った。

「がんばってね、二人とも。あなた達はまだ若いわ。将来が期待できるわね」

——それから何十年もたった。

その年、マーレ島にはたくさんの人たちが訪れた。トレーナーだったり一般客だったり料理人だったり……。とにかくすごい人の量だ。

「それでは今年から開催されるマーレリーグトーナメント！　まずはチャンピオン二人によるエキシビジョンを行います！」

マーレリーグがあつた場所。そこには巨大な会場が作られた。そして、たくさんの人がそこを訪れていた。

審判の声で観客の大歓声の中、一人の男性と一人の女性がセンターフィールドに姿を現した。

「何年ぶりだろうな。お前と大舞台で戦うのは」

男性が言った。

「もう、何十年もたったわね。あの時は負けてしまったけど、今度は負けないわよ」

「こっちだって。負けるわけにはいかないぜ」

二人はそう言うところからそれぞれ出した。

そして、それを空中に投げた。

こうして、記念すべきマールリーグ第一回のエキシビジョンで彼らは再び――何年ぶりの本気のバトルを始めるのだった……。

エピソード終了マール島の伝説完結

ラルドのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマール島バッジ：八個
年齢：12歳

手持ちポケモン

ラグ（ラグラージ）LV90
クイック（オオスバメ）LV86
ゲイト（オーダイル）LV86
ロック（ボスゴドラ）LV86
フライ（フライゴン）LV86
サース（サンダース）LV92

エメルのトレーナーカード

バッジ：八個ホウエンマール島バッジ：八個
年齢：12歳

手持ちポケモン

グリーン（ジュカイン）LV90
グラ（トドゼルガ）LV85
サート（サーナイト）LV85

クーチ(クチート) LV85
キツガ(キノガツサ) LV85
ノーズ(ノズパス) LV85

エピローグ（後書き）

あとがき

2005年11月 7日より連載していたこのマール島の伝説もついに完結となりました。私自身、一番連載期間が長く、話数も多いこの小説でした。

2005年度のものは私が小説を書き始めた頃のもの。後半は今の現在の私が書いているもの。比べてみるとまったく違います。私がどれくらい成長したのかわかる小説です。

さて、この小説。私はまだ見つけていないのですが、おそらく矛盾があるかと思います。それというのも、プロットを作っていないのに初期の話で無駄に重要そうな文章を書いてしまったことにあります。

21話と22話の間に4ヶ月ほどの期間があいてしまったことによて、私自身で内容を忘れてしまったので矛盾が生じる——または、重要そうなポイントが無駄になったということがあります。

それを修正することは来ませんが、温かい目で見ていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9242u/>

マーレ島の伝説

2011年7月30日11時30分発行